

兵庫県芦屋市

月若遺跡発掘調査報告書

第98・100地点

— 都市計画道路山手幹線街路事業に伴う発掘調査区 —

2010

芦 屋 市

芦屋市教育委員会

兵庫県芦屋市

月若遺跡発掘調査報告書

第 98・100 地点

— 都市計画道路山手幹線街路事業に伴う発掘調査区 —

2010

芦 屋 市

芦屋市教育委員会

序 文

芦屋市には、たくさんの遺跡があります。これらは、太古の昔から、人びとが優れた住環境を求めて、この地で生活してきた証です。

阪神・淡路大震災の復興事業として進められてきた都市計画道路山手幹線が敷設される地区は、重要な遺跡が数多く存在していることから、平成9年度以降、建設工事に先立ち、数多くの発掘調査を実施してきました。そして、平成21年度に実施した発掘調査をもって、当該事業に伴う調査をすべて完了することができました。

本書では、平成21年度に実施した月若遺跡における2件の発掘調査について報告します。これらの調査では、弥生時代から近世にわたる集落や耕作地に関する遺跡が見つかりました。さらに、法隆寺の軒先を飾る瓦と良く似た文様をもつ古代の瓦や、鉄の道具が製作されたことを意味する鉄滓などが出土したことから、調査地付近において古代の寺院や役所に関わる施設があったことが明らかとなりました。

このたびの発掘調査の成果が、郷土の歴史について関心を深めていただく契機となり、さらに学術研究および教育資料として広く活用していただく一助となれば幸いです。そして、今後とも本市の文化財保護へのご理解とご支援をお願いしたく存じます。

最後になりましたが、発掘調査および本書の刊行にあたりまして、多大な御協力を賜った月若町をはじめとする多くの市民のみなさまや、本事業の関係各位に厚くお礼申し上げます。

平成22年10月31日

芦屋市教育長
藤原 周三

例 言

1. 本書は月若遺跡第98・100地点の埋蔵文化財発掘調査報告書で、芦屋市文化財調査報告第86集として公開するものである。
2. 発掘調査を実施した月若遺跡第98地点は兵庫県芦屋市西芦屋町34番2、34番6、34番7に所在し、月若遺跡第100地点は芦屋市月若町71番2に所在する。
3. 調査地は、周知の埋蔵文化財包蔵地である「月若遺跡」の分布範囲内に位置している。本遺跡は、平成16年（2004）3月31日刊行の『兵庫県遺跡地図』〔兵庫県教委2004〕および平成21年（2009）3月31日刊行の『芦屋市埋蔵文化財包蔵地分布地図』〔第80集〕で周知し、遺跡保護の取扱いを行っている。
4. 調査は芦屋市が計画する都市計画道路山手幹線街路事業に伴うもので、芦屋市教育委員会が調査主体となって実施した。
5. 本発掘調査ならびに整理作業、報告書の印刷・刊行に係る費用は、芦屋市が全額負担した。
6. 調査期間については、調査地点番号の登録と調査着手時期が前後したことから、月若遺跡第100地点の調査を第98地点より先に実施した。そのため、月若遺跡第98地点が平成21年（2009）7月21日から9月26日まで実働49日となり、月若遺跡第100地点が平成21年（2009）5月11日から7月21日まで実働45日となった。調査に引き続き、平成21・22年度に整理作業および発掘調査報告書（本書）の作成を生涯学習課三条文化財整理事務所において実施した。
7. 調査面積は、月若遺跡第98地点が220㎡を測る。なお、当調査では3面の遺構面を調査したため、延べ調査面積は660㎡となる。一方、月若遺跡第100地点は204㎡を測り、その内訳はⅠ区が108㎡、Ⅱ区が37㎡、Ⅲ区が59㎡となっている。なお、Ⅰ区で3面、Ⅱ・Ⅲ区で2面の遺構面を調査したため、延べ調査面積は516㎡となる。
8. 本発掘調査は、本市生涯学習課主査（文化財担当）森岡秀人（学芸員）・同課学芸員竹村忠洋・同課嘱託山平裕之（学芸員）・同課嘱託坂田典彦（学芸員）・同課嘱託白谷朋世（学芸員）が担当した。調査組織の詳細については、第1章第2節に記した。
9. 本発掘調査および遺物・写真・図面等の整理作業、報告書の作成は竹村・平山が担当し、調査・整理補助員として生涯学習課臨時的任用職員である天羽育子・桑原育世・近藤奈保子・須田佑子・西周崇代・山本麻理・横森美和子が従事した。また、平成21年度および平成22年度の同課臨時的任用職員である岩本舞・芝まいこ・住本孝太の協力を得た。
10. 本書の編集は、竹村が担当した。
11. 本文の執筆は、竹村・平山・西岡が行った。執筆分担については、目次に執筆者名を掲げている。
12. 発掘作業は、月若遺跡第98地点を株式会社マツダ建設に、月若遺跡第100地点を株式会社島田組に委託した。
13. 月若遺跡第98地点の発掘調査では、調査員として東海アナース株式会社折井千枝子氏が従事した。
14. 月若遺跡第100地点の発掘調査状況のビデオ撮影記録は、山本徹男氏（映像作家）に委託した。ビデオ撮影に係る費用は、芦屋市教育委員会生涯学習課が負担した。
15. 図版1で用いた航空写真は、芦屋市広報課からの提供を受けたものである。
16. 本書に掲載した地図は、第6図が国土地理院発行5万分の1地形図「大阪西北部」（平成11年要部

- 修正) 図幅、第7図が芦屋市発行2千5百分の1基本図「芦屋駅」(平成10年3月修正) 図幅、第47図が芦屋市発行2千5百分の1基本図「芦屋駅」(平成18年2月修正) 図幅をそれぞれ使用した。
17. 発掘調査に伴う出土遺物および写真・実測図等の資料・記録類は芦屋市教育委員会が保管している。
18. 発掘調査および整理作業の過程で、下記の方々・機関から御助言・御教示・御協力を賜った。御芳名を記し、深く感謝の意を表する(五十音順、敬称略)。

相澤敏子 梅本素子 大藪由美子 久保ふく子 小島静子 近藤康司 寺前めぐみ 中井みどり
仲谷由利子 菱田哲郎 藤川耕策 藤川祐作 松田和義

凡 例

1. 本書で使用した方位・座標は、平面直角座標系第Ⅴ系(日本測地系)である。標高は、東京湾中等潮位(T.P.)で表示している。また、図中で使用した方位は座標北を示す。
2. 土層断面図の土色は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』2000年後期版(農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修)を使用している。
3. 本書における遺構名は、次のように表記する。
掘立柱建物：SB 溝：SD 井戸：SE 堅穴住居跡：SH 土坑：SK ビット：SP
流路：SR 近現代遺構：KG
4. 本文中の年号は元号と西暦で表記し、例えば「平成22年(2010)」のように記す。
5. 本文中では、引用および参考とした文献を「〔人名もしくは機関等2010(刊行年・西暦)〕』という形で示している。また、本市が刊行した芦屋市文化財調査報告を引用・参考文献として示す際には、例えば、〔第80集〕であれば、芦屋市文化財調査報告第80集を指す。なお、本書の84～88頁にその目録を掲載している。

本文目次

序 文

例 言

凡 例

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯 (竹村忠洋) ... 1

第2節 調査組織

1. 平成21年度(本発掘調査および遺物・資料整理) (竹村) ... 2

2. 平成22年度(遺物・資料整理および報告書の作成) (竹村) ... 3

第3節 調査の経過

1. 月若遺跡第98地点および第100地点の発掘調査の経過 (竹村) ... 3

2. 月若遺跡第98地点および第100地点の整理作業と発掘調査報告書の作成 (竹村) ... 3

第2章 調査地をとりまく環境

第1節 芦屋市の歴史的環境 (竹村) ... 4

第2節 月若遺跡の概要 (竹村) ... 8

第3章 月若遺跡第98地点の調査

第1節 本発掘調査の方法 (竹村・平山裕之) ...10

第2節 発掘調査の経過 (竹村・平山) ...11

第3節 基本土層 (竹村・平山) ...16

第4節 遺 構

1. 第1遺構面 (竹村・平山) ...22

2. 第2遺構面 (竹村・平山) ...22

3. 第3遺構面 (竹村・平山) ...26

4. 第4遺構面 (竹村・平山) ...27

第5節 遺 物

1. 遺構出土の遺物 (竹村) ...29

2. 遺構に伴わない遺物 (竹村) ...30

3. 瓦 (竹村) ...31

第6節 小 結 (竹村) ...34

第4章 月若遺跡第100地点の調査

第1節 本発掘調査の方法 (竹村) ...36

第2節 確認調査の概要 (竹村) ...37

第3節 発掘調査の経過 (竹村・平山) ...40

第4節 基本土層	（竹村）	46
第5節 遺構		
1. 第1遺構面	（竹村）	49
2. 第2遺構面	（竹村・西岡崇代）	51
第6節 遺物		
1. 遺物包含層出土の遺物	（竹村）	63
2. 第2遺構面の遺構出土の遺物	（竹村）	64
3. 瓦	（竹村）	72
第7節 小 結	（竹村）	75
第5章 まとめ	（竹村）	76
引用・参考文献		82
芦屋市文化財調査報告目録		84
報告書抄録		

挿 図 目 次

第1図 兵庫県と芦屋市の位置	1	
第2図 月若遺跡第49地点確認調査（平成9年度）	2	
第3図 寺田遺跡第103地点確認調査（平成9年度）	2	
第4図 月若遺跡第100地点整理作業	3	
第5図 発掘調査報告書作成作業	3	
第6図 芦屋市内主要遺跡分布図	5	
第7図 月若遺跡および寺田遺跡・芦屋庵寺遺跡調査地点分布図	9	
【月若遺跡第98地点】		
第8図 調査区地区割図	10	
第9図 調査風景	11	
第10図 調査風景	13	
第11図 調査区土層断面図	17	
第12図 第1・2遺構面平面図	24	
第13図 第3・4遺構面平面図	25	
第14図 SK04平面図およびSK05平面図・土層断面図		26
第15図 SK17土層断面図		27
第16図 SD05土層断面図		29
第17図 出土遺物		30
第18図 遺物包含層・SH03出土瓦		32
第19図 SK04出土瓦		33
第20図 SK06出土瓦		34
【月若遺跡第100地点】		
第21図 調査区地区割図		36
第22図 確認調査トレンチ平面図・土層断面図・柱状図		39
第23図 調査風景		41
第24図 調査風景		42
第25図 調査風景		43
第26図 調査風景		43
第27図 調査風景		45
第28図 調査区土層断面図		47
第29図 第1遺構面平面図		50

第30図	暗渠土層断面図・立面図	51
第31図	第2遺構面平面図	53
第32図	S H01平面図・土層断面図・柱穴・土坑土層断面図	54
第33図	S B01平面図	55
第34図	S B01柱穴土層断面図	56
第35図	S B02平面図・柱穴土層断面図	57
第36図	第2遺構面ビット土層断面図	59
第37図	第2遺構面ビット・土坑・溝土層断面図	60
第38図	S D01土層断面図	61
第39図	S D05土層断面図	62
第40図	地震痕跡(砂眼)土層断面図	63

第41図	遺物包含層・堅穴住居跡・掘立柱建物・ビット・土坑・溝出土遺物	65
第42図	S D01出土遺物	67
第43図	S D05出土遺物(1)	70
第44図	S D05出土遺物(2)	71
第45図	S D01出土瓦(1)	73
第46図	S D01出土瓦(2)	74
第47図	月若遺跡南部・寺田遺跡東部の古代溝推定図	79
第48図	月若遺跡第70・81・96・100地点の平安時代末～鎌倉時代の遺構	80

写真図版目次

図版1

大阪湾上空から芦屋市域をのぞむ(南から)
月若遺跡とその周辺を俯瞰する(南西から)

調査地近景(南東から)
盛土等除去後の調査地(南西から)

図版2 月若遺跡第98地点

調査区西半(I・II区)第2遺構面全景(東から)
調査区東半(III・IV区)第2遺構面全景(西から)

図版8

調査区西半(I区)北壁土層断面(南から)
調査区東半(III区)北壁土層断面(南から)

図版3 月若遺跡第98地点

出土瓦(凹面)
出土瓦(凸面)

図版9

調査区西半(I区)第1遺構面(西から)
調査区東半(III区)第1遺構面(南から)
地震痕跡の砂眼(南から)

図版4 月若遺跡第100地点

I区第2遺構面(発掘調査時の第1遺構面、西から)
I区第2遺構面(発掘調査時の第2遺構面、西から)

図版10

調査区西半(I・II区)第2遺構面(南東から)
調査区東半(III・IV区)第2遺構面(西から)

図版5 月若遺跡第100地点

I区東壁土層断面(南西から)
S D01土層断面(北から)

図版11

S H02(北から)
S H03(南から)
S H04(西から)

図版6 月若遺跡第100地点

S D01出土瓦(凹面)
S D01出土瓦(凸面)

図版12

S K04・05(東から)
S K04上部隠検出状況(南から)
S K04下部瓦片検出状況(南から)
S K04礫と瓦片(南東から)
S K05土層断面(東から)

【月若遺跡第98地点】

図版7

調査地近景(北東から)

図版13

- S K17 (北から)
- S K17 (東から)
- S K17土層断面 (東から)

図版14

- 調査区西半 (I・II区) 第3遺構面 (東から)
- 調査区東半 (III・IV区) 第3遺構面 (北東から)

図版15

- 調査区西半 (I・II区) 第4遺構面 (西から)
- 調査区東半 (III・IV区) 第4遺構面 (西から)

図版16

- S H06・07 (南から)
- S H06 (南から)
- S H07 (東から)

図版17

- S D05土層断面 (南から)
- S P34土層断面 (南から)
- S K03土層断面 (南から)
- S K26土層断面 (南から)
- S D01土層断面 (南から)

図版18

- S H02出土須恵器
- S K17出土須恵器
- S H01・S K01出土遺物
- 遺構に伴わない遺物

図版19

- 第11a層出土軒九瓦
- 第15層・S H03出土瓦 (凹面)
- 第15層・S H03出土瓦 (凸面)

図版20

- S K04出土瓦 (凹面)
- S K04出土瓦 (凸面)

図版21

- S K06出土瓦 (凹面)
- S K06出土瓦 (凸面)

【月若遺跡第100地点】

図版22

- 調査地近景 (北西から)
- 調査地近景 (南西から)

図版23

- 第1トレンチ (南西から)
- 第1トレンチ西壁土層断面 (東から)
- 第2トレンチ 防空壕跡 (北から)

図版24

- I区南壁土層断面 (北西から)
- I区東壁土層断面 (西から)

図版25

- I区第1遺構面 (東から)
- I区第1遺構面 (西から)
- K G03・04 (北東から)
- K G05 (東から)
- I区東部塋墓 (西から)

図版26

- 暗渠検出状況 (北東から)
- 暗渠基底石 (北東から)
- 暗渠土層断面 (東から)

図版27

- I区第2遺構面 (発掘調査時の第1遺構面、西から)
- I区第2遺構面 (発掘調査時の第1遺構面、東から)

図版28

- I区第2遺構面 (発掘調査時の第2遺構面、西から)
- I区第2遺構面 (発掘調査時の第2遺構面、東から)

図版29

- II区第2遺構面 (北から)
- II区第2遺構面 (南から)

図版30

- III区第2遺構面 (発掘調査時の第1遺構面、南東から)
- III区第2遺構面 (発掘調査時の第2遺構面、南から)

図版31

- S H01 (南から)
- S H01 (東から)

S H01 (西から)
S H01土層断面 (南東から)
S H01-K1土層断面 (南から)

図版32

S B01北半部 (南から)
S B01南半部 (南東から)
S B01-S P13土層断面 (北から)

図版33

S B02 (北から)
S B02-S P79土層断面 (南から)
S B02-S P80土層断面 (南から)
S B02-S P84土層断面 (南から)
S B02-S P85土層断面 (南から)

図版34

S P24土層断面 (南から)
S P70土層断面 (北から)
S K01上半部土層断面 (東から)
S K01下半部土層断面 (東から)
S K08土層断面 (北から)
S D02土層断面 (西から)
S D03土層断面 (南から)
S D04土層断面 (南から)

図版35

S D01底部確認状況 (北から)
S D01発掘状況 (北東から)

図版36

S D05北部断ち割り土層断面 (南から)
S D05南部断ち割り土層断面 (南東から)
地蔵痕跡 (砂眼) 土層断面 (北東から)

図版37

遺物包含層・堅穴住居跡・掘立柱建物出土遺物
ビット・土坑・溝出土遺物

図版38

S D01出土遺物 (1)
S D01出土遺物 (2)

図版39

S D05出土遺物 (1)

S D05出土遺物 (2)

図版40

S D05出土遺物 (3)
S D05出土遺物 (4)

図版41

S D01埋土第4層出土軒丸瓦および軒平瓦とその瓦当
部製作手法
S D01埋土第2層もしくは第3層および第4層出土瓦
(凹面)
S D01埋土第2層もしくは第3層および第4層出土瓦
(凸面)

図版42

S D01IV層 (下部) 出土軒丸瓦
S D01埋土第6層出土軒丸瓦
S D01埋土第6層出土瓦 (凹面)
S D01埋土第6層出土瓦 (凸面)

図版43

S D01出土特殊土器・製塩土器・石器・サスカイト剥
片・石製品
S D01出土鉄製品・鉄滓・被熱石材

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

今回、発掘調査を実施したのは、月若遺跡第98地点と第100地点である。第98地点は兵庫県芦屋市西芦屋町34番2、34番6、34番7に、第100地点は芦屋市月若町71番2に所在し、両地点ともに山手幹線街路事業地内に位置している。

山手幹線街路事業は、平成7年（1995）1月17日に発生した阪神・淡路大震災の復興事業の一つに位置づけられており、兵庫県尼崎市から神戸市長田区までを結ぶ総延長約29.5kmの幹線道路として、沿線の各市によって事業が進められてきた。芦屋市域では約2.3kmの区間が事業対象であり、工事が行われてきた。そして、平成22年（2010）10月24日に全線が開通した。

市域における街路事業地内には寺田遺跡・月若遺跡・業平遺跡・大原遺跡・打出岸造り遺跡・久保遺跡が分布していたため、文化財保護法第57条の3（当時）に基づく発掘通知書が、平成9年（1997）12月19日付で、芦屋市長北村春江より本市教育委員会に提出された。これを受けて、本市教育委員会では、本事業によって埋蔵文化財が損壊を受けると判断し、街路事業地内における未確認の遺跡を含め、各遺跡の範囲および遺構面・遺物包含層の具体的な内容を把握することを目的として、平成10年（1998）2月2日～3月2日にかけて試掘・確認調査（寺田遺跡第103地点、月若遺跡第49地点、業平遺跡第43地点、大原遺跡第32地点、打出岸造り遺跡第24地点）を実施した（第2・3図）〔芦屋市教委2005c〕。その結果、調査対象となった先行買収地19ヶ所の内、15ヶ所において埋蔵文化財の存在が確認された。

芦屋市教育委員会では、その後も用地買収が整い次第、追って試掘・確認調査を実施する予定となっ



第1図 兵庫県と芦屋市の位置



第2図 月若遺跡第49地点確認調査(平成9年度)



第3図 寺田遺跡第103地点確認調査(平成9年度)

ていた。しかし、住宅の再建や土地区画整理事業をはじめとする震災復興関連事業に伴って、埋蔵文化財発掘調査の件数が激増する状況において、芦屋市教育委員会が山手幹線街路事業の発掘調査を迅速に実施することは極めて困難であると判断された。そこで、芦屋市および芦屋市教育委員会は、山手幹線街路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の取扱いについて兵庫県教育委員会と協議した。その結果、地方自治法に基づく自治体間の一部事務委託として、調査主体を芦屋市教育委員会とし、調査機関として本市西側の隣接市である神戸市教育委員会が発掘調査を実施することとなった。これについては、平成12年度に「埋蔵文化財の発掘調査業務に関する協定書」(以下、「協定書」と略す)が、芦屋市・芦屋市教育委員会と神戸市との間に、兵庫県教育委員会を立会人として締結された。

この協定書に基づき、平成12年度には神戸市教育委員会によって、事業地における試掘・確認調査が実施され、事業地内各地点における埋蔵文化財の取扱いが決められた。それ以降の本発掘調査についても、協定書に基づいて平成18年度まで神戸市教育委員会が調査機関となって発掘調査が実施され、その翌年度にあたる平成19年度まで整理作業および報告書の作成が行われた。

一方、平成18年度をもって神戸市教育委員会との協定書の締結期間が終了したため、平成19年度以降の発掘調査および整理作業、報告書作成などは、芦屋市教育委員会が行うこととなった。平成21年度には月若遺跡第98地点と第100地点の2件の本発掘調査を実施し、その整理作業および発掘調査報告書(本書)の作成を平成21・22年度に実施した。なお、今回報告する月若遺跡第98・100地点の発掘調査をもって、平成9年度以降、進められてきた山手幹線街路事業に伴う発掘調査は、すべて終了した。

第2節 調査組織

今回の本発掘調査および遺物・資料整理、報告書作成は、芦屋市教育委員会を主体として、以下の調査組織で実施した。

1. 平成21年度(本発掘調査および遺物・資料整理)

教育長藤原周三、社会教育部部長橋本達広、生涯学習課課長津村直行、同課課長補佐細井良幸、同課主査(文化財担当)森岡秀人(学芸員、本発掘調査担当)、同課主事春木和子、同課学芸員竹村忠洋(本発掘調査担当)、同課嘱託平山裕之(学芸員、本発掘調査担当)・坂田典彦(学芸員、本発掘調査担当)・



第4図 月若遺跡第100地点整理作業



第5図 発掘調査報告書作成作業

白谷朋世（学芸員、本発掘調査担当）、同課臨時的任用職員田中智美・力武麻喜江、同課調査・整理補助員桑原育世・近藤奈保子・須田佑子・住本孝太・西岡崇代・横森美和子

2. 平成22年度（遺物・資料整理および報告書の作成）

教育長藤原周三、社会教育部長橋本達広、生涯学習課課長細井良幸、同課主査（文化財担当）森岡秀人（学芸員）、同課主査竹内典子、同課学芸員竹村忠洋（報告書作成・編集）、同課再任用職員春木和子、同課嘱託坂田典彦（学芸員）・白谷朋世（学芸員）、同課臨時的任用職員力武麻喜江、同課整理補助員天羽育子・岩本舞・芝まいこ・西岡崇代・山本麻理

第3節 調査の経過

1. 月若遺跡第98地点および第100地点の発掘調査の経過

月若遺跡第98地点と第100地点は、発掘調査実施以前にすでに地点番号を登録していたが、結果として地点番号が後の第100地点から本発掘調査に着手することとなった。

第100地点は平成21年（2009）5月11日から7月21日まで実働45日で実施した。一方、第98地点は平成21年（2009）7月21日から9月26日まで実働49日で実施した。また、それぞれの調査では、発掘作業と並行して、発掘調査現地のコンテナハウスや本市生涯学習課三条文化財整理事務所において、遺物洗浄や写真整理などを行った（第4図）。各地点の調査経過および作業内容の詳細は、第98地点については第3章第2節、第100地点については第4章第3節に掲げた調査日誌抄で記す。

2. 月若遺跡第98地点および第100地点の整理作業と発掘調査報告書の作成

平成21年度に実施した月若遺跡第98地点と第100地点の整理作業は、いずれも第98地点の発掘調査が終了してから本格的に実施した。また、発掘調査の終了後から平成22年度にかけて、両地点を合わせて芦屋市文化財調査報告第86集（本書）として発掘調査報告書の作成を進めた（第5図）。

整理作業および報告書の作成は、竹村・平山を担当者として生涯学習課三条文化財整理事務所において行った。整理補助員としては、天羽・桑原・近藤・須田・西岡・山本・横森が従事した。報告書の編集は、竹村が行った。報告書の印刷・製本は、有限会社岸本出版印刷が行った。

第2章 調査地をとりまく環境

第1節 芦屋市の歴史的環境

今回、発掘調査を実施した月若遺跡第98地点は兵庫県芦屋市西芦屋町34番2、34番6、34番7に、第100地点は芦屋市月若町71番2に所在する。両地点は南北道路を挟んで30m程度しか離れておらず、阪急電鉄神戸線芦屋川駅から南西に約300mの場所に位置している（第7図）。調査地周辺では、平成22年（2010）の山手幹線の開通に向けて、芦屋川陸道をはじめとする関連工事が進められてきた。

芦屋市は、兵庫県の南東部に位置する阪神間の住宅都市である（第1図、図版1）。市域の形状は南北に細長く、その規模は東西約2.5km、南北約8.3km、面積18.57km²を測る。市域の地形は、六甲山地と大阪湾に挟まれた北高南低の変化に富むものとなっており、山地・丘陵・台地・段丘・沖積扇状地・沖積低地・砂洲・浜堤・砂浜が形成されている〔パリノ・松元・田中・辻2007〕。市域を流れる主要な河川には、芦屋川と宮川がある。

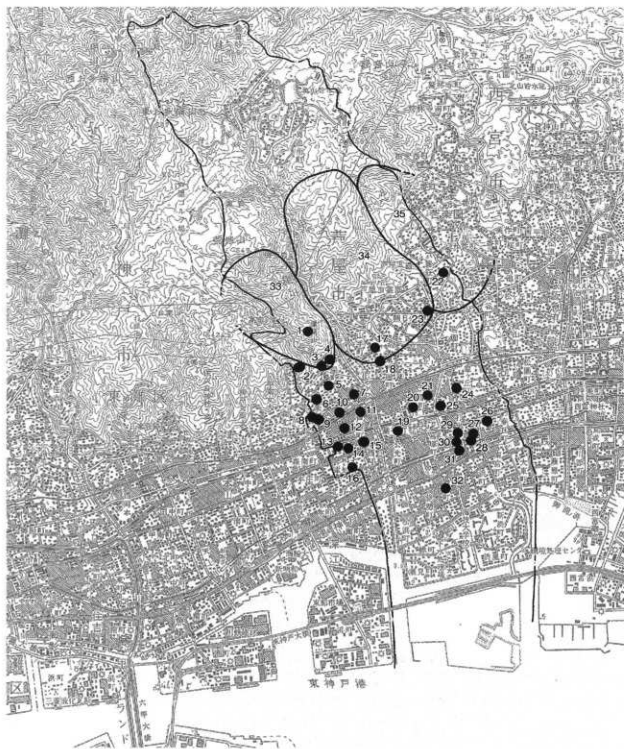
現在の市街地は、六甲山地南麓の台地・丘陵部と東西に細長い平野部を中心に形成されている。市の推計人口総数は、平成22年（2010）9月1日現在、93,730人となっている。狭隘な平野部には、阪急電鉄神戸線、JR東海道本線、国道2号線、阪神電鉄本線、国道43号線、阪神高速国道3号神戸線・5号湾岸線が並行して通っており、東西交通の要衝となっている。そして、平成22年（2010）10月24日には、都市計画道路山手幹線が開通した。

市内に分布する遺跡は、平成22年（2010）9月30日現在、146遺跡が周知されている。それらの内、主要な遺跡について時代を追って概観する（第6図）。なお、遺跡の詳細は、『新修芦屋市史』本篇・資料篇1〔武藤・有坂・末中・村川編1971・1976〕および芦屋市文化財調査報告第1～87集等を参照されたい。芦屋市文化財調査報告については、本書の84～88頁にその目録を掲載している。

芦屋市域において最も古い遺跡は、後期旧石器時代まで遡る。岩ヶ平遺跡・朝日ヶ丘遺跡・堂ノ上遺跡・打出小槌遺跡など岩ヶ平台地および翠ヶ丘丘陵を中心に立地しているものや、津知遺跡のように沖積扇状地に立地するものがある。

縄文時代の遺跡は早期から晩期まで認められる。その立地は、山地および丘陵に立地するもの（山芦屋遺跡・朝日ヶ丘遺跡など）と、扇状地に立地するもの（芦屋廃寺遺跡・寺田遺跡・六条遺跡・前田遺跡・津知遺跡・栗平遺跡・若宮遺跡など）に大きく分けられる。

弥生時代になると、前期から中期前葉では、寺田遺跡・清水遺跡・津知遺跡・若宮遺跡および金津山古墳下層など、比較的低地に立地する遺跡が目立つが、中期中葉から後期前半には、山地に立地することが特徴的な高地性集落である会下山遺跡・城山遺跡や、丘陵に立地する山芦屋遺跡・城山南麓遺跡など、高所に分布が偏る傾向が認められる。一方、月若遺跡・寺田遺跡・芦屋廃寺遺跡・栗平遺跡・打出小槌遺跡などの平野部に立地する諸遺跡においても遺構・遺物が確認されているが、その数は少ない。後期後半になると、先に挙げた高所立地の集落が減少する一方で、芦屋川右岸の扇状地を中心に遺跡群が形成される。弥生時代の水田跡は、前田遺跡や津知遺跡で検出されており、扇状地縁辺部から沖積低地にかけて耕作地が形成されていたと推測される。江戸時代には、「堂ノ上」（現在の楠町付近）から外縁付鈕Ⅱ式銅鐸が出土している。



- | | | |
|-----------------|-------------|----------------------|
| 1 城山遺跡 | 13 六条遺跡 | 25 久保遺跡 |
| 2 会下山遺跡 | 14 清水遺跡 | 26 堂ノ上遺跡 |
| 3 三条古墳群・山芦屋遺跡 | 15 前田遺跡 | 27 金津山古墳 |
| 4 城山古墳群・芦屋川水車場跡 | 16 津知遺跡 | 28 小松原遺跡 |
| 5 延遺跡 | 17 芦屋神社境内古墳 | 29 打出小畑古墳 |
| 6 三条会下遺跡 | 18 藤ヶ谷遺跡 | 30 打出小畑遺跡 |
| 7 西山町遺跡 | 19 養平遺跡 | 31 若宮遺跡 |
| 8 三条岡山遺跡 | 20 大原遺跡 | 32 興川遺跡 |
| 9 三条九ノ坪遺跡 | 21 打出岸送り遺跡 | 33 徳川大坂城東六甲採石場城山刻印群 |
| 10 戸屋庵寺遺跡 | 22 八十塚古墳群 | 34 徳川大坂城東六甲採石場奥山刻印群 |
| 11 月若遺跡 | 23 朝日ヶ丘遺跡 | 35 徳川大坂城東六甲採石場岩ヶ平刻印群 |
| 12 寺田遺跡 | 24 阿保親王塚古墳 | |

第6図 芦屋市内主要遺跡分布図 1/50000

古墳時代では、その初頭において、芦屋川右岸の遺跡群が引き続き居住域となっている。前期になると、三条岡山遺跡や三条会下遺跡など丘陵・台地の遺跡において遺構や遺物が認められるものの、扇状地においては遺構・遺物が減少する。中期・後期になると再び扇状地上で遺構・遺物が顕著に検出されている。また、中期からカマドを造り付ける堅穴住居跡がみられるようになり、7世紀代には堅穴住居から掘立柱建物に移行している。当時代の水田跡は、津知遺跡や大原遺跡などで検出されている。

市内の古墳は、前期から飛鳥時代にかけて数多く築造されている。阿保親王塚古墳（前期）、金津山古墳（中期）、打出小槌古墳（中期）、駒塚古墳（後期）などの大型古墳や独立墳が翠ヶ丘丘陵に分布している。さらに、平成20年（2008）に実施された若宮遺跡第45地点の確認調査では、埴輪や葺石を伴う濠状遺構の一部が確認され、埋没古墳の存在が推測されている。また、同年に発掘調査が実施された三条岡山遺跡第19地点において、古墳時代中期後葉の円墳が3基検出され、段丘上に初期群集墳が存在していることが明らかとなった。後期には、粟平遺跡において後期前半の横穴式石室墳などが検出されている。その後、城山古墳群や三条古墳群、八十塚古墳群などの群集墳が丘陵や台地に形成される。芦屋神社境内古墳も、本来、笠ヶ塚群集墳を構成していた横穴式石室墳である。

古代令制下、芦屋市域は摂津国菟原郡域に含まれ、当郡には賀美・葦原（葦屋）・佐才・住吉・覚美・天城・津守・布敷の八郷が存在したが（『倭名類聚抄』巻六、摂津国第七十二）、その内の葦屋郷の大半や賀美郷が市域にあったと考えられている。当該期の集落跡は、芦屋廃寺遺跡・月若遺跡・寺田遺跡をはじめとして芦屋川右岸を中心に確認されている。さらに、これらの遺跡から検出された遺構・遺物の中には官衙の要素を有するものが目立ち、芦屋川右岸地域に寺院・郡衙・駅家が集中していたことが推測されている。具体的に述べると、古代寺院としては、白鳳文化期に建立された芦屋廃寺跡がある。郡衙としては、寺田遺跡第90地点において「大領」「少領」の墨書をもつ須恵器が出土したことから、当地点周辺が菟原郡衙の所在地と推定されている。駅家については、平安時代前期の大型建物跡が検出された津知遺跡第2地点や、隣接する神戸市東灘区所在の深江北町遺跡第9次調査において「驛」の墨書土器が出土したことから、両遺跡周辺が葦屋驛ないし驛戸集落の所在地の有力な候補地となっている。さらに、月若遺跡と寺田遺跡では、芦屋廃寺跡出土の創建期瓦と同型式の単弁八弁蓮華文高句麗様式軒丸瓦や法隆寺式の複弁八弁蓮華文軒丸瓦、均正忍冬唐草文軒平瓦が出土しており、芦屋川右岸に分布する各遺跡の中に官衙に関連する施設があったようである。墓制では、藤ヶ谷遺跡において奈良時代の古墓が検出されている。遺物では、三条九ノ坪遺跡において白雉3年（652）を示すと考えられる「三 壬子年」の紀年銘をもつ木簡が出土している。芦屋廃寺遺跡では、「寺」の刻印をもつ奈良時代の鉄鉢形の須恵器が8点出土している。

古代後半～中世においても、芦屋廃寺遺跡・月若遺跡・寺田遺跡が居住域となっているようであるが、新たに六条遺跡・清水遺跡・前田遺跡・津知遺跡・船戸遺跡・打出小槌遺跡・若宮遺跡などにおいても集落跡に伴う遺構が検出されており、その結果、集落遺跡数は増加している。また、古代末以降には、三条岡山遺跡・冠遺跡・久保遺跡・打出小槌遺跡などの丘陵・台地に立地する遺跡や若宮遺跡など沖積地に立地する遺跡でも、犁痕など耕作地に関連する遺構が数多く検出されており、耕作域が拡大していることがわかる。

16世紀に入ると、摂津豊島の土豪、瓦林政頼が鷹尾山（通称、城山）に鷹尾城を築くが、その山麓部に分布する城山南麓遺跡では、同時期の建物跡や火葬墓などが確認されている。

その後、芦屋地方は、天下統一を成し遂げた豊臣秀吉の直轄地となる。しかし、慶長20年（1615）

の大坂夏の陣で豊臣氏が滅びると、徳川氏譜代領となった。その後、元和3年(1617)には、戸田氏鉄に与えられ、尼崎藩となった。幕府は戸田氏鉄に大坂城の修築を命じ、元和6年(1620)～寛永6年(1629)には、西宮市から神戸市東部に及ぶ六甲山地南麓の山地および丘陵部において、大坂城再築に伴う採石場が経営される。この採石場跡は、現在、「徳川大坂城東六甲採石場跡」と呼称され、芦屋市域に分布する採石場は、岩ヶ平・奥山・城山の3つの刻印群に細分されている。六甲山中や市街地には当時の採石場跡や刻印石・矢穴石・割石などの関連石材が多数分布しており、岩ヶ平刻印群を中心に住宅の建設に伴う発掘調査が数多く実施されている。また、石切丁場から切り出された石材は浜辺まで運搬され、大坂城までは大阪湾を介して運ばれたが、海浜部に位置する呉川遺跡では搬出されずに残された刻印石や割石が見つかり、近年、宮川河口付近や西蔵町でも同様の石材が確認されている。

寛永12年(1635)には、戸田氏に替わって青山氏が、宝永8年(1711)には松平(桜井)氏が尼崎藩主となるが、その間、芦屋地方は尼崎藩領であった。明和6年(1796)には、市域に存在した四ヶ村の内、芦屋村・打出村が天領になり、三条村・津知村が尼崎藩領となった。

近世後半から近代では、産業用水車場群の一つである芦屋川水車場跡や、月若遺跡の東部で見ついている複数のカマドなどがある。市指定文化財である小阪家住宅は、阪神・淡路大震災によって全壊し、移築復元を前提として解体されたが、その際に発掘調査が実施され、当建物の建設時期が18世紀後半～末であることが解明されている。

明治時代になり、慶応4年(1868)、天領である芦屋村と打出村は兵庫鎮台(改称して兵庫裁判所)の管下に入り、その後、第一次兵庫県に属した。残る三条村と津知村は、明治2年(1869)の版籍奉還により尼崎藩領となり、明治4年(1871)の廃藩置県によって尼崎県の管下に属した。同年11月には、尼崎県は第二次兵庫県に編入され、その結果、四ヶ村すべてが同一行政管下に置かれることとなった。明治22年(1889)4月には、町村制施行に伴い、四ヶ村は合併し、精道小学校の校名をとって、精道村が発足した。

交通に関しては、明治7年(1874)に大阪と神戸間において官設鉄道(現在のJR東海道本線)が開通し、大正2年(1913)には芦屋駅が新設された。また、明治38年(1905)の阪神電鉄の開通に伴い、打出停留所と芦屋停留所が開設した。大正9年(1920)には、阪急電鉄神戸線の開通によって、芦屋川停留所が開設された。昭和2年(1927)には、阪神国道(現在の国道2号線)が開通した。こうした交通網の急速な発展を背景に、明治から昭和初頭にかけて、住宅地化が急速に進んだ。その過程に関連するものとして、呉川遺跡第22地点の確認調査では、大正時代から昭和10年代の陶磁器類やガラス瓶など、膨大な数の日常生活用品が出土している。

昭和15年(1940)11月10日には、市制施行に伴い芦屋市が誕生した。その翌年に太平洋戦争が開戦するが、発掘調査では防空壕跡や昭和20年(1945)の空襲による戦災痕跡が多く見つかった。

戦後においては、復興の中、昭和26年(1951)に施行された芦屋国際文化住宅都市建設法に基づいて、まちづくりが進められた結果、全国的にも著名な住宅都市として目覚ましい発展を遂げた。

このような芦屋市を平成7年(1995)1月17日に阪神・淡路大震災が襲い、多くの市民の尊い命が失われた。震災復興事業が進められた結果、震災から15年の歳月を経た現在、まちなどにおいては震災の傷跡が大分目立たなくなっている。この間、埋蔵文化財では住宅の再建をはじめとする復興事業に伴い、震災復興調査が激増した。月若遺跡においても例外ではなく、その結果、平成22年(2010)9月30日現在、115次の調査地点数を数える(本発掘調査・確認調査・工事立会・慎重工事等を含む)。

第2節 月若遺跡の概要

月若遺跡は、現在の月若町・西山町・芦屋町に分布しており、その範囲は東西約250m、南北約350m、面積約52,700㎡を測る（第7図）〔兵庫県教委2004、第80集〕。当遺跡周辺には、芦屋廃寺遺跡・寺田遺跡・西山町遺跡が隣接しており、市内では埋蔵文化財が最も濃密に包含される地域に位置している。これらの各遺跡は埋蔵文化財包蔵地としては行政的に区分されているが、それぞれの遺跡間では時期や遺構の性格などにおいて密接な関係が認められる。なお、山手幹線は、芦屋川右岸地域において月若遺跡と寺田遺跡の分布範囲を東西に貫通している。その中で、月若遺跡において山手幹線街路事業に伴い実施された調査地点は、第68・70・79・81・83・89・96・98・100地点である。

月若遺跡は、芦屋廃寺遺跡D地点として昭和60年（1985）に実施された試掘調査によって、その存在が明らかとなった（第1地点）。その後、これまでに実施されてきた数多くの調査結果によって、縄文時代早期から近世にわたる複合遺跡であることが判明している。地形的には沖積扇状地中位面に立地しており、標高は約20～30mである。遺跡分布範囲の東端では、芦屋川の河岸段丘崖と考えられる崖状地形が検出されている（第69・89地点）。

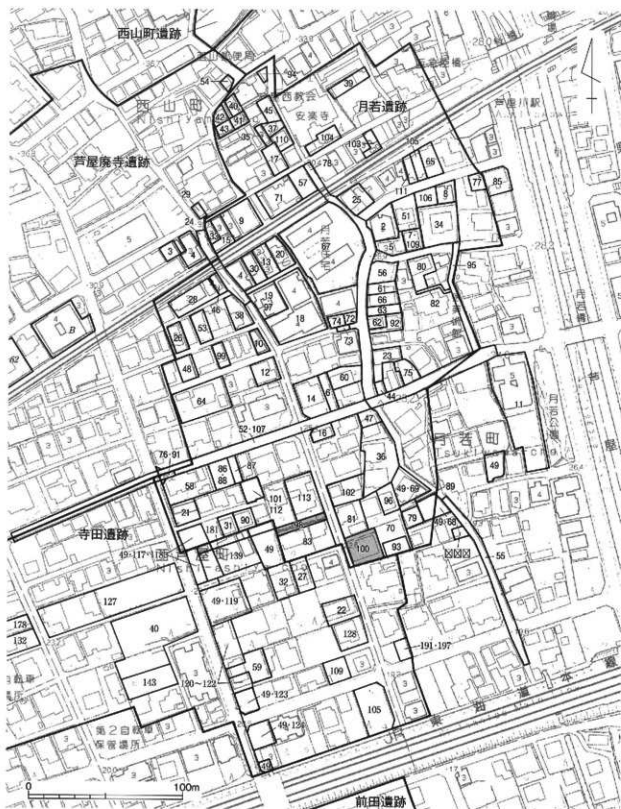
縄文時代では、早期・前期・中期・後期の土器・石器が若干確認されており（第2・10・13・18・19・69・70・71・81・83・96・98地点）、第13地点では早期末～前期初頭の土坑が確認されている。

弥生時代では、前期の遺構・遺物は確認されておらず、中期後半の土坑が第12地点で検出されているのみで、後期前半までの遺構や遺物は少ない。それに対して、弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭になると、竪穴住居跡をはじめ、居住域に伴う多くの遺構が検出されており、大規模な集落が形成されていることがわかる。さらに、第96地点では小銅鐸が出土している。

古墳時代になると、前期の遺構は比較的少ないが、中期以降、竪穴住居跡やピットが多数検出されている。出土した遺物の中には、手持勾玉や有孔円板、白玉、勾玉などの滑石製模造品や土製勾玉などの祭祀遺物が認められる（第1・10・12・18・19・69地点）。

古代においても、引き続きピットなどの居住域に伴う遺構が多く認められており、遺物も多数出土している。それらの中で、第81地点と第100地点で古代の大溝から出土した単弁八弁蓮華文高句麗様式軒丸瓦や法隆寺式の複弁八弁蓮華文軒丸瓦・均正忍冬唐草文軒平瓦を含む多量の瓦片、埴は注目される。そして、月若遺跡第98地点においても単弁八弁蓮華文高句麗様式軒丸瓦を含む多数の瓦片が出土している。さらに、月若遺跡の南方に位置する寺田遺跡第191・197地点からは、古代の丸瓦・平瓦片が出土しており、西方に近在する寺田遺跡第181地点でも、単弁八弁蓮華文高句麗様式軒丸瓦と法隆寺式の均正忍冬唐草文軒平瓦が出土している。これらの各地点出土の瓦当は、芦屋廃寺跡の創建期のものと同型式であると考えられる。これらの出土瓦から、古代において月若遺跡の南部や寺田遺跡の東部に、寺院関連施設や官衙的施設があったことが推定される。なお、上記の第81地点と第100地点の古代の大溝からは、瓦片と一緒に埴形滓を含む鉄製品生産に伴う鉄滓が出土している。

古代末～中世では、掘立柱建物をはじめ居住域に伴う遺構が多数見つかった。第70地点では、大型の堀が検出されている。さらに、第70・81・100地点では調査区を跨るようになり、平安時代末の大型掘立柱建物が検出されている。第71地点では15世紀頃から耕作地となっており、その他にも居住域から生産域に変化した地点が数多く認められる。なお、近世～近代の特徴的な遺構として、カマドが10基



第7図 月若遺跡および寺田遺跡・芦屋廃寺遺跡調査地点分布図 1/2500
 (ゴチック体は月若遺跡、明朝体は寺田遺跡、明朝体の斜体字は芦屋廃寺遺跡の調査地点番号を示す。)

近く検出されている(第8・13・18・25地点など)。

今回報告する第98地点と第100地点は、月若遺跡分布範囲の南部に位置しており、これまで実施された周辺の調査結果からは、弥生時代後期以降の遺構・遺物包含層があることが推測された。

第3章 月若遺跡第98地点の調査

第1節 本発掘調査の方法

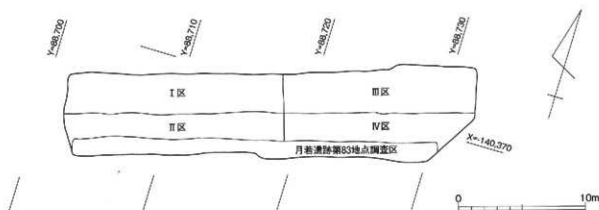
今回の調査地点は芦屋市西芦屋町34番2、34番6、34番7に所在し、都市計画道路山手幹線の道路敷設用地に位置している。調査地には、現況で石垣の擁壁が設けられた敷地境界が東西方向に走っており、その北側が高く、南側が低い約1mの高低差を伴っていた。それを境にして北側は個人住宅の庭部分であり、南側は街路事業用地としてすでに更地になっていた（図版7）。

本地点は月若遺跡の分布範囲の南西端に位置しており、隣接する寺田遺跡と接している。調査地周辺の発掘調査状況を見ると、南側には月若遺跡第83地点（平成17年度調査）〔第68集〕、西側には寺田遺跡第181地点（平成16年度調査）〔第62集〕が隣接している。

周辺の既往調査の結果からは、本地点において埋蔵文化財が確実に存在していると判断されたが、本発掘調査に着手するに当たって、平成21年（2009）6月24日に確認調査を実施し、基本土層を確認することとなった。個人住宅の庭地であった範囲の中央付近にトレンチを1基設定し、基礎的な情報を得ることができた。なお、確認調査トレンチの規模は、東西約1.6m、南北約1.9m、面積約3㎡を測る。

調査区は、山手幹線街路が建設される範囲と深度を対象に設定した。その際、調査区の北辺は街路計画範囲北辺ラインと一致させた。南辺は今回の調査地点と月若遺跡第83地点の調査結果が検証できるように、その調査区北縁が確認されるよう設定した。東辺は既存の南北道路との境界から約1.5m西側に控えて設定した。西辺は宅地段差に伴う石垣が残存していたため、石垣上端ラインから約2m東側に控えて設定した。このようにして、調査区の形態は東西に長い矩形を呈し、その規模は東西32m、南北7mとなり、その面積は220㎡となった。なお、発掘調査時には、遺構面を3面検出しているため、延べ調査面積は約660㎡となる。なお、現地で検出した3面の遺構面について、整理作業や本書の作成作業の中で、遺構の時期を検討した結果、遺構面を4面に分けて報告することとする（第12・13図）。

調査区の地区割について記すと、今回の調査では、機械掘削で生じる残土は場外に処分し、残る人力掘削で生じる残土は場内で処理することとなった。そこで、残土置き場を確保するために調査区を2分し、反転掘削をすることとした。また、先述した調査前の個人住宅南辺の宅地段差に伴う東西方向の石垣基部の攪乱を境に、北側が高く、南側が低い高低差が生じた。そこで、反転掘削をもとに東西を2分



第8図 調査区地区割図 1/300

し、石垣基部の攪乱を境に南北を2分した。その結果、調査区を4分割することとなり、その北西部をⅠ区、南西部をⅡ区、北東部をⅢ区、南東部をⅣ区と呼称した（第8図）。

調査深度は、無遺物層である第15層下面（発掘調査時の第3遺構面）までとした。ただし、街路の歩道となる範囲については、工事掘削深度である標高22.665mまでとした。なお、発掘調査時の第3遺構面の記録後、さらに下層の状況を確認するために、Ⅱ区に2基、Ⅳ区に1基の深掘トレンチを設定した。その結果、下層において遺物の包含は確認されなかった。

掘削に際しては、まず、調査地南西部に重機（0.25m³）でトレンチを掘削し、機械掘削できる土層を確認した。引き続き、埋蔵文化財に影響を与えないように宅地段差の石垣および近現代の堆積土、近世の耕作土、中世の耕作土（第1～10層）を重機で除去した。それより下層は人力で分層発掘しながら、遺構面を検出した。

調査区には、平面直角座標系第Ⅴ系（日本測地系）の座標値を投影させた基準点を設置した。

写真撮影には、35mmカラーポジフィルムとデジタルカメラ（300万画素）を用いた。

実測図は、遺構面平面図を縮尺1/20・1/100、調査区土層断面図を縮尺1/20、各遺構の平面図・土層断面図・断面図を縮尺1/10ないし1/20で作成した。なお、平面実測図は、光波測距器を用いて測点し、作成した。

現地におけるすべての記録が完了後、調査区を埋め戻し、現状復旧した。

なお、発掘調査に伴うコンテナハウスについては、調査地南側の街路事業地内に1棟設置し、南東約40mに位置する同事業用地内（月若町71番2）にもう1棟を設置した。

第2節 発掘調査の経過

本発掘調査は、森岡・竹村・平山・坂田・白谷を調査担当者として、平山が現地に常駐し、平成21年（2009）7月21日から9月26日までに実働49日で実施した。また、発掘調査と並行してコンテナハウスにおいて遺物洗浄や写真整理などを行った。調査・整理補助員としては、桑原・須田・西岡・横森が従事した。

7月21日には、コンテナハウスの設置やネットフェンス等の設営、調査器材の搬入等を経て、7月23日よりⅠ・Ⅱ区の機械掘削を開始し、人力により遺物包含層の掘削と発掘調査時の第1～3遺構面の検出を行い、記録作業を進めた。

Ⅰ・Ⅱ区の調査が完了後、8月21日には反転掘削を行って、Ⅲ・Ⅳ区の調査へと移行した。Ⅰ・Ⅱ区と同様、機械掘削の後、人力により発掘調査時の第1～3遺構面を検出し、記録作業を行った。

9月16・18日にはⅢ・Ⅳ区を重機で埋め戻し、現状復旧した。その後、発掘現場の資材や器材を搬出し、9月26日に本地点の発掘調査を終了した。

以下に、本発掘調査の日誌抄を掲げて、発掘調査の経過および作業内容の詳細を記す。



第9図 調査風景（8月3日）

【本発掘調査日誌抄】

平成21年(2009)

7月21日(火)雨

準備工を開始した。調査地およびコンテナハウスを設置する場所にネットフェンスを張り始めた。

7月22日(水)曇り時々晴れ

コンテナハウスおよび仮設トイレ等を設置した。

7月23日(木)晴れ

本日は、朝からコンテナハウスに調査器材および調査用具を搬入した。調査地は東西に狭長く、北側と南側に敷地境界に伴う高低差が存在する。調査は残土置き場の確保から、西部と東部に分割し、反転掘削を行う計画である。高低差の境界となる石垣基部の擾乱を中心に、北西部をⅠ区、南西部をⅡ区、北東部をⅢ区、南東部をⅣ区とした。

午後より、Ⅰ区の機械掘削を開始した。月若遺跡第100地点の基本土層第6層に相当する褐色土層を本地点でも確認した。この褐色土層上面を第1遺構面と捉え、やや上層(第11層上面)まで機械掘削を行った。またⅡ区の掘削も開始し、月若遺跡第83地点の調査区北壁を確認した。

7月24日(金)晴れのち曇り

本日より、東海アナーズの折井千枝子調査員が発掘調査に従事する。機械掘削が完了しているⅠ区は、基本土層の設定に向けて北壁の分層を開始した。また、Ⅰ区西端に残した分層発掘部において、北壁と西壁に沿う側溝を掘削した。その北西隅で鉄製品が出土し、撮影の後に取り上げた。

Ⅱ区は機械掘削を継続し、月若遺跡第83地点の調査区北壁の検出を行った。その断面においても褐色土層を確認し、やや上層まで掘削を行った。本日で機械掘削を完了した。

午前に藤川祐作氏が来跡した。

7月25日(土)雨時々曇り

雨天により発掘作業は中止したが、ベルトコンベアーと発電機の搬入だけは行った。

7月27日(月)雨のち曇り

先週末から、梅雨前線の大雨が西日本に被害をもたらしている。本日も降雨のため、発掘作業を中止した。三条文化財整理事務所まで、整理作業を進めた。

7月28日(火)曇りのち雨

Ⅰ区北壁およびⅠ・Ⅱ区間の壁面を清掃し、分層を行った。土層断面を撮影後、本地点の基本土層を設定した。第1遺構面の基盤層と考える褐色土層は、第14層である。重機で第11層上面まで掘削しており、第14層上面の検出に向けて人力掘削を開始した。

本日は午後からの降雨を想定して、午前中で発掘作業を中止した。

7月29日(水)曇り一時晴れ

Ⅰ区的人力掘削を継続し、第1遺構面(第14層上面)を検出した。ビットおよび犁痕を確認したため、遺構検出状況を撮影した。また光波測距器を用いて、縮尺1/100の平面実測図を作成した。

その後、第14層を掘削し、第2遺構面(第15層上面)を検出した。西部の精査を行ってビットを確認し、一部について段下げを行った。また、Ⅰ区西端の分層発掘部は、第9～11層の掘削を順次進めた。

7月30日(木)晴れ

本日は、Ⅰ区東部の精査から開始した。ビットおよび溝を検出し、ビットは段下げと平掘を行った。西部も同様に作業を進め、一部は土層断面を撮影した。

また、分層発掘部は第14層を除いて第2遺構面を検出し、切り合う大型土坑2基を確認した。

Ⅱ区は掘削箇所が非常に多く、掘削部の掘削を中心にを行った。

7月31日(金)晴れ時々曇り

Ⅰ区はビットの撮影や略測による記録、記註などの諸作業を進めた他、縮尺1/20で第2遺構面の平面実測図を作成し始めた。また、昨日確認したⅠ区西端の大型土坑を検出したところ、堅穴住居跡(SH01・02)と判断した。特にSH02は、粘土および焼土層の堆積が顕著であり、カマドが遺存していると考えられる。

Ⅱ区は近現代の石垣掘削部を除き、精査を行った。未だ掘削箇所が残り、特に西部は下層まで掘削の影響を大きく受けていることが判明した。

8月1日(土)雨時々曇り

本日は近畿各地で大雨となっており、発掘作業を中止した。8月に入ってなお、梅雨が長く異常気象である。

8月3日(月)晴れ

ようやく、近畿地方の梅雨明けが発表された。本日は、Ⅰ・Ⅱ区第2遺構面の全景撮影に向けて、朝から遺構面の清掃や白線引き等の諸準備を進めた。Ⅱ区の南側に3段の撮影用足場を組み立て、午後2時頃より撮影を開始した。

地上からの撮影を行った後、Ⅰ区は平面実測図の作成を再開し、レベルングを進めた。また一部の遺構は、縮尺1/10で土層断面図の作成に取りかかった。Ⅱ区は、東部の平面実測図の作成を行った。

8月4日(火)晴れ

本日は、非常に厳しい陽射しの中で作業を行った。Ⅰ区は、第2遺構面の記録作業を進めた。西部のSH01は完掘後に撮影を行い、SH02はカマドを断り割って、土層断面を撮影した。また、両住居跡より、ビット1基を検出した。

Ⅰ区の記録作業を進める傍ら、可能な範囲から第3遺構面(第16層上面)の検出に向けて、人力掘削を開始した。また、遺構面精査により、若干のビットを確認した。Ⅱ区は西部の平面実測図を作成し、全体のレベルングを行った。

8月5日(水)晴れのち曇り一時雨

本日は不安定な天候であり、午後に突然の降雨があった。Ⅰ区は第2遺構面の記録作業を進め、SH02のカマド内に堆積する焼土・炭化物、そしてカマド本体を順次掘削し、床面の検出を行った。礫が多く検出されたSK05の土層断面図を縮尺1/10で作成した。第3遺構面は、遺構面精査と遺構検出を続行し、一部のビットを半掘して記録した。また、北壁側溝を掘削した。Ⅱ区は東部を掘削して、第3遺構面を検出した。



第10図 調査風景（9月9日）

8月6日（木）曇り時々晴れ

I区はSH02の床面検出状況を確認した後、鳥状に残っていたSH01・02を掘削して、第3遺構面を検出した。また、SK05は土層断面の撮影と註記を行った後、確検出状況の平面図を縮尺1/10で作成した。

第3遺構面は、遺構面精査と遺構検出を再度行い、西部でSD04を検出した。これは月若遺跡第83地点のSD201・202に続く遺構である。I区で中層、II区で中・下層を掘削し、出土遺物を取り上げた。また、検出した多数のビッドは随時、段下げと平掘を行った。

8月7日（金）曇りのち晴れ

梅雨は明けたが、今週は厳しい蒸し暑さが続いた。本日はSK06の他、SK04・SP16の平面図（上部確検出状況）を完成させた。SK04は礎の下に、多数の古代瓦片を確認し、その出土状況を撮影した。礎および瓦を投棄した腐葉土坑と考えられる。

第3遺構面は、半掘したビッドの撮影・略測記録・註記を行い、順次完掘した。また、I・II区西部のSD04は、分層発掘を継続した。

午後に藤川祐作氏が来跡した。

8月8日（土）晴れ

本日は、I・II区第3遺構面の全景撮影に向けて、朝から遺構面の清掃や白線引き等の諸準備を進めた。II区南側に3段の掘削用足場を組み立て、正午頃より撮影を開始し、地上からの遺構撮影を順次行った。

全景撮影後、I区東端の鳥状に残る第15層を掘削した。ビッドをわずかに検出し、記録して完掘を行った。また、I・II区平面実測図の追記とレベルングを進めた。

8月10日（月）雨のち曇り

本日は台風9号の影響で、兵庫県内で記録的豪雨が報告されている。発掘作業を中止して、コンテナハウスで遺物洗浄等の整理作業を行った。

8月11日（火）曇り時々晴れ

本日は雨の排水作業を行った後、I・II区第3遺構面の平面実測図に追記と補正、レベルングを行った。並行して、SD04は最下層である砂礫層まで掘削し、その完掘状況を撮影した。

I区東部は、第16層（第3遺構面基盤層）を掘り下げた。上面遺構の掘り残し以外は、明確に遺構を確認できない。II区に関しては同様で、検出遺構はなかった。SK04は、下部瓦片検出状況の平面図を縮尺1/10で作成

し始めた。また、西端側溝と東端側溝を掘削した。

8月12日（水）晴れのち曇り

SK04は、平面図作成を継続した。レベルングの後、鳥状に残った範囲を掘削して、周囲のレベルに合わせた。I区西部では、SK02に土層観察用土手を設定して、掘削を行った。撮影後、土層断面図を縮尺1/10で作成した。また、I区北壁土層断面図を縮尺1/20で作成し始めた。

II区東部は、東端側溝を掘削した。東壁に、ほぼ水平堆積する淡黄白色シルトの薄層を確認した。第15層上面（第2遺構面）から掘り出した堅欠住居跡の可能性も考えられ、確認が必要である。

8月17日（月）晴れ

本日は湿度も高く、残暑が厳しい中での作業であった。I区は、平面実測図への追記とレベルングを行った。また、北壁土層断面図の作成を継続した。

I・II区東端で堅欠住居跡（SH03）を確認し、検出状況の撮影後、平面実測図に記録した。周壁溝が遺存しており、縮尺1/10で周壁断面図を作成した。また、下層確認用に第1トレンチと第2トレンチを掘削し、土層断面を撮影した。

8月18日（火）晴れ

本日は発掘作業を中止して、記録図面の作成を進めた。I区北壁・西壁およびI・II区東壁の土層断面図を作成した。また、第1トレンチおよび第2トレンチを平面実測図に追記し、縮尺1/20で北壁・東壁の土層断面図の作成に取りかかった。

I・II区東端のSH03では、ビッドを1基検出した。撮影を行った後、縮尺1/10で土層断面図を作成した。午後に、藤川祐作氏と松田和義氏が来跡した。

8月19日（水）晴れ

本日も記録図面の作成に専念した。I区北壁の土層註記に取りかかり、II区西壁の土層断面図を縮尺1/20で作成し始めた。第1・2トレンチの土層断面図が完成し、土層註記を行った。SH03はビッドの土層註記を行い、完掘した。

8月20日（木）晴れ

I区北壁およびI・II区西壁を清掃後、土層断面の撮影を行った。その後、II区西壁の土層断面図を完成させ、I区北壁およびI・II区西壁の土層註記を行った。SH03は、清掃後に全景を撮影した。

午後2時頃より、I・II区の埋め戻しを開始した。

8月21日（金）曇り

朝からI・II区の埋め戻しを継続し、午後にIII・IV区を設定した。反転掘削はIII区から開始し、重機で第11層付近まで掘削した。また、IV区南側で月若遺跡第83地点の埋め戻し土を掘削し、その調査区北壁を検出した。

8月22日（土）曇りのち晴れ

本日は降雨の予報があったため、発掘作業を中止した。

8月24日（月）快晴

本日は温度が低く、爽やかな快晴となった。III区北壁と東壁の清掃後、分層を開始した。また、掘削を完了するとともに、北壁側溝を掘削した。IV区は南壁（月若遺

跡第83地点の調査区北壁)を清掃後、分層を開始した。
用水路跡と考えられる近世・近代の遺物および礫が混入するⅢ区東端の掘削部は、撮影を行った後に完掘した。また、縮尺1/100の平面実測図に記録した。

8月25日(火) 晴れ

今朝は気温が低く、夏の終わりが近いことを感じさせた。Ⅲ区は、第1遺構面(第14層上面)の検出に向けて、人力掘削を開始した。

Ⅳ区も同様に、人力掘削を開始した。表層の掘削および石垣の掘削を掘削し、第14層上面の検出を行った。中央部の土坑から、近代の便桶と考えられる陶器の大甕が出土した。

8月26日(水) 晴れのち曇り

Ⅲ区は第1遺構面の検出が完了し、精査を行った。溝および流路、ピットなどを確認したため、縮尺1/100の平面実測図に記録した。また、遺構の検出状況を撮影した。

Ⅳ区は、第1遺構面の検出を継続する傍ら、掘削の掘削を随時行った。また、Ⅲ・Ⅳ区第1遺構面の平面実測図(縮尺1/20)の作成を進めた。

8月27日(木) 曇り時々晴れ

本日は、再び蒸し暑い中での作業となった。Ⅲ区東部は、S D02とS R01の完掘と撮影、平面実測図への記録を行った。S R01は、上層(砂層)と下層(砂礫層)に分けて掘削した。西部は人力掘削によって第2遺構面(第15層上面)を検出し、堅穴住居跡(S H03)・ピット・土坑などを確認した。

Ⅳ区は第1遺構面を検出した結果、掘削および近代遺構しか確認できなかった。

8月28日(金) 曇り時々晴れ

Ⅲ区西部の遺構検出を継続し、堅穴住居跡(S H04)やピットなどを新たに確認した。遺構の段下げおよび手掘を随時行い、一部は土層断面を撮影した。東部も人力掘削によって第2遺構面を検出し、ピットおよび土坑などを確認した。特にS K17は本格墓の可能性があり、十字に土層観察用の土手を設定して掘削を行った。

Ⅳ区は西部を第2遺構面まで掘削し、Ⅰ区で検出したS H03の続きを確認した。また、Ⅳ区第1遺構面の平面実測図を完成させた。

8月29日(土) 曇り

Ⅲ区は一部の遺構について、縮尺1/10の土層断面図を作成した他、平面実測図の作成を進めた。また、S K17の掘削を確認した。

Ⅳ区西端のS H03は周壁溝を検出するとともに、床面をシルト層上面まで掘り下げた。また東部の精査によって、ピットおよび土坑を検出した。

8月31日(月) 曇り時々晴れ

本日は、明日予定している全景撮影に向け、Ⅲ・Ⅳ区第2遺構面の記録作業を急いだ。Ⅲ区は、略測記録と註記が終了したピットおよび土坑を順次完掘した。S K17は土層観察用土手の断面を撮影した後、縮尺1/10で土層断面図を作成した。また、S H03・04およびS K17の全景を撮影した。

Ⅳ区は、S H03の周壁溝を掘削した。南壁(月若遺跡第83地点の調査区北壁)の土層断面図を縮尺1/20で作

成した。また、一部のピットと土坑は、土層断面の撮影後に完掘した。Ⅲ・Ⅳ区ともに、平面実測図の追記およびレベリングを進めた。

9月1日(火) 快晴

9月に入ったが、まだ残暑が厳しい。Ⅲ・Ⅳ区第2遺構面の全景撮影に向け、朝から遺構面の清掃や白線引き等の諸準備を進めた。Ⅳ区南側に3段の撮影用足場を組み立て、午前11時頃より撮影を行った。

午後からはⅢ区でS H04の床面を掘り下げ、S K17は土層観察用の土手を除去後、完掘状況を撮影した。Ⅳ区ではS H03の床面の精査を行った。ピットとカマドを検出したため、S H03に伴う遺構検出状況を撮影した。

午後に藤川祐作氏が来訪した。

9月2日(水) 晴れのち曇り

再び蒸し暑い1日となった。Ⅲ区はS H04の床面の検出状況を撮影した。S K17は掘削および墓底部の土層を撮影し、土層断面図に追加実測を行った。

Ⅲ・Ⅳ区ともに、第2遺構面の平面実測図に追記と補正、レベリングを行った。また、第3遺構面(第16層上面)の検出に向けて、人力掘削を開始した。

9月3日(木) 晴れのち曇り

本日はⅢ・Ⅳ区ともに、第3遺構面の遺構検出が中心であった。遺構面精査により、Ⅲ区東部でS H05を検出した。周壁溝に土層観察用の土手を設定して、掘削を行った。

また、Ⅲ・Ⅳ区でピットと土坑を多数確認し、順次、段下げと半掘を行った。

午前に藤川耕策氏が来訪した。

9月4日(金) 曇り時々晴れ

Ⅲ・Ⅳ区で検出したピットと土坑の撮影および略測記録、註記などを進めた。そのほとんどは第2遺構面で見逃した遺構と考えられる。S H03はカマドを断り切り、掘削および縮尺1/10の土層断面図を作成後に完掘した。また、Ⅲ区中央部で長円形の堅穴住居跡(S H06)、Ⅲ・Ⅳ区西端でS D05を検出した。

本日は、Ⅲ・Ⅳ区第3遺構面の全景撮影(第1回目)を行った。Ⅳ区南側に3段の撮影用足場を組み立て、遺構面の清掃や白線引き等を行い、午後3時頃より撮影を開始した。また地上からは、S H05の個別撮影を行った。

9月5日(土) 晴れ

Ⅲ区はS H05の床面を掘り下げた他、昨日検出したS H06を段下げたところ、白色の膜状のものを伴う土坑(S K32)を検出した。また、Ⅲ区北端土層断面図を縮尺1/20で作成した。

S D05の掘削を開始した。この溝は、月若遺跡第83地点のS D203に続くものである。

9月7日(月) 晴れ

本日は、非常に残暑の厳しい一日であった。Ⅲ区は東部を若干掘り下げ、新たにピットと溝を検出した。S H06は、十字に土層観察用の土手を設定し、掘削を行った。また、S K32で検出した白色の膜状のものを周囲の掘土ごと取り上げた。

Ⅲ・Ⅳ区西端のS D05は掘削を継続し、上層・中層・下層に分けて出土遺物を取り上げた。その際、外形に復元可能な弥生土器の甕が出土した。平面実測図に出土位

置を記録し、撮影の後に取り上げた。

9月8日(火) 晴れ時々曇り

日本の南海上を北東へ進む台風12号の影響で、風の強い一日であった。本日は、S H06を撮影して土層観察を行った。周辺一帯を掘り下げて検討した結果、長円形ではなく隅円方形の堅穴住居跡と判明した。

S D05は、平面実測図に追記とレベリングを行った。また、東廊部と地下層を掘削し、「V」字形を呈する様相が明らかとなった。

9月9日(水) 曇り時々晴れ

残暑も和らぎ、秋を感じる一日となった。朝からⅢ・Ⅳ区第3遺構面の全景撮影(第2回目)に向け、遺構面の清掃や白線引き等の諸準備を進めた。午前10時半頃から、山本徹男氏(映像作家)による記録ビデオの撮影が行われた。

Ⅳ区南側に3段の撮影用足場を組み立て、午後1時半頃より撮影を開始した。地上からは、主にS D05を撮影した。終了後、Ⅲ区西部を掘削し、新たにS D06を検出した。土層観察用の土手を設定して、掘削を開始した。また本日、マツダ建設が基準測量杭に国土座標の投影を行った。

9月10日(木) 晴れ

まずⅢ区東部を掘り下げ、東端に堅穴住居跡(S H07)とそれに伴うピットを検出した。

また、S D05の土層断面図を縮尺1/20で作成したほか、平面実測図の追記とレベリングを行った。

午後に寺前めぐみ氏(前芦屋市教育委員会生涯学習課嘱託)が来跡した。

9月11日(金) 晴れのち曇り

本地点の調査も、いよいよ終盤である。まず、S D06の掘削を進めた。土層断面の観察により、弥生時代と古墳時代の溝が切り合い、さらに土石流で損壊を受けている様相が判明した。

午後からは、S H06・07およびS D06を中心として、Ⅲ・Ⅳ区第3遺構面の全景撮影(第3回目)を行った。Ⅳ区南側に2段の撮影用足場を組み立て、午後2時頃より開始し、地上からは遺構の撮影を個別に行った。

Ⅳ区中央部で堅穴住居跡を検出し、完掘後に撮影を行った(当初、月若遺跡第83地点のS B201北端部と思われた。しかし平面図が整合せず、遺構として誤認したと判断する)。また、Ⅲ・Ⅳ区の平面実測図に追記とレベリングを進めた。

9月12日(土) 曇りのち雨

S H06は縮尺1/20で土層断面図を作成した後、床面を掘り下げ、ピットを検出した。また、S H07も床面を掘り下げ、ピットおよび土坑(S K41)を新たに検出した。S K41は一辺が約1.2mを測り、隅円方形を呈した大型のものである。

S D06は縮尺1/20で土層断面図を作成した後、完掘した。また、S H06およびS D07の完掘状況を撮影した。本日は降雨のため、午後2時半で発掘作業を中止した。

9月14日(月) 曇り時々晴れ

本日は、S H06・07の床面下で検出したピットおよび土坑の記録作業が中心であった。特にS H06は、高床部の除去後にピットを確認したことから、建て替えに伴い、

高床部を造り出した可能性も考えられる。

S H06に伴うピット周辺で、全体像が不明瞭な遺構を確認した。後日、土石流痕跡の一部分と判明した。Ⅲ・Ⅳ区の平面実測図の追記およびレベリングも継続して行った。

9月15日(火) 雨のち曇り

朝からの小雨により、肌寒い一日となった。本日は、Ⅲ区北壁土層断面図の修正および追加実測を行い、土層註記を開始した。

午後4時より、現場撤収に向けた協議を行い、街路課梅木課員、生涯学習課竹村孝芸員・平山囀氏、東海アナース折井調査員、マツダ建設増元氏・各務氏、西本建設福田氏が立ち会った。

午後に藤川祐作氏が来跡した。

9月16日(水) 晴れ時々曇り

本日より、Ⅲ・Ⅳ区の埋め戻しを開始した。並行して、Ⅲ区北壁土層断面図の修正および追加実測を続行し、土層註記を完了させた。また、下層確認用に第3トレンチを掘削し、縮尺1/20で東・西・北壁の土層断面図を作成した。出土遺物はなく、自然堆積層と判断される。

午後に松田氏が来跡した。

9月17日(木) 晴れ

本日は、埋め戻し作業を休止した。S H07の床面下で検出したS K41の土層断面図を縮尺1/20で作成した。これで本地点の記録作業が完了した。

9月18日(金) 曇り時々晴れ

朝から埋め戻し作業を再開し、午後2時半頃に終了した。ベルトコンベアーおよびハイプレッシャー、発電機等の搬出を行った。

コンテナハウスでは、記録図面と出土遺物の整理を進めた。

9月19日(土) 晴れ

本日は、作業員用コンテナハウスや重機等の搬出を行った。

9月24日(木) 晴れ

朝からコンテナハウス内の整理等、現場撤収に向けて諸準備を進めた。午後4時頃から、三条文化財整理事務所へ器材・荷物を搬出した。

午後に藤川祐作氏が来跡した。

9月25日(金) 晴れ

コンテナハウス、仮設トイレ等の搬出を行った。また、三条文化財整理事務所へ、整理作業を進めた。

9月26日(土) 晴れ

調査地のネットフェンス等を撤去し、本地点の発掘調査を終了した。

第3節 基本土層

調査地の現況は、約1mの高低差をもって北側が高い石垣の擁壁を伴う敷地の境界を跨いでいた。石垣の北側は、元々、個人住宅の庭部分であり、南側はすでに街路事業用地として更地になっていた（図版7）。また、今回の調査区は、南側に隣接する月若遺跡第83地点の調査区と連続させるように設定しており、その埋め戻し土が検出されている。

調査区の土層断面は、北壁（Ⅰ・Ⅲ区北壁）と西壁（Ⅰ・Ⅱ区西壁）を実測した（第11図、図版8）。基本土層は、第1～19層まで設定した。これらの内、第11層上面までを重機によって掘削し、それ以下は人力で分層発掘を行った。したがって、第10層までの各層の堆積時期や性格の詳細については、不明である。

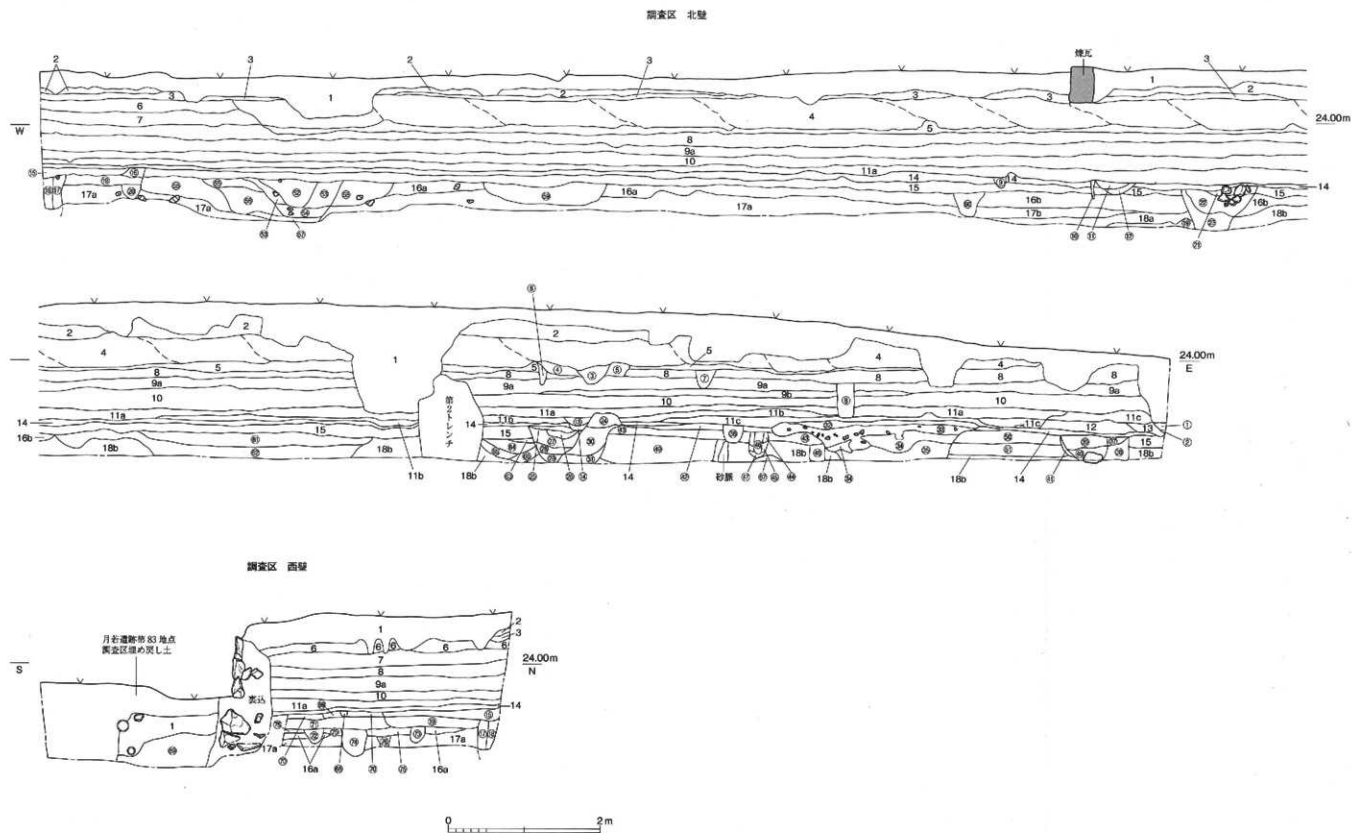
次に、各土層について推定される時期と性格を記す。まず、機械掘削を行った第1～10層についてみると、第1層は近現代の表土と盛土であり、攪乱の埋土も含んでいる。第2層は近現代の旧表土もしくは耕作土と考えられる。第3層は近現代の整地土と考えられる。第4層は近現代の盛土である。第5層は近世～近代の耕作土と考えられる。第6層は近世～近代の耕作土と考えられる。第7～10層は中世の耕作土と考えられる。

引き続き人力掘削を行った第11～19層についてみると、第11～13層は中世の耕作土である。第14層は古代の整地土と考えられ、当層上面を第1遺構面として検出している。第15層は弥生時代後期後半から飛鳥時代の居住域に伴う土壌層であり、遺物を濃密に包含している。発掘調査時には当層上面を第2遺構面として検出している。第16層は無遺物層である。発掘調査時には当層上面を第3遺構面として検出している。第17～19層も無遺物層である。なお、第14層以下の土層は、芦屋川が流れる東方へ向かって緩やかに傾斜していた。

次に土層の注記について記す。土層番号は第11図に掲げた土層断面図の番号と対応している。土層番号は上層から下層に向かって順にアラビア数字を付した。また、それらの中で、土質や土色等に若干の差違が観察されたものには、アラビア数字の後にアルファベットの小文字を付けて細分した。一方、遺構の埋土等、部分的に認められる土層については、円囲いのアラビア数字で通し番号を付した。土層番号に続けて、色調、粒度、包含物、性格等を順に記した。色調は『新版標準土色帖』2000年後期版（農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所色票監修）を用いて、客観化を図った。

【調査区土層注記】

- 第1層 近現代の表土層。盛土、攪乱の埋土を含む。
- 第2層 近現代の旧表土もしくは耕作土と考えられる。
- 第3層 ぶい黄褐色（10YR5/3）シルト混じり細粒砂。粗粒砂～径3cm大の礫を含む。近現代の整地土と考えられる。
- 第4層 ぶい褐色（7.5YR5/4）～ぶい黄褐色（10YR6/4）細粒砂。部分的にシルトや粗粒砂・細礫を含む。部分的に鉄分・マンガンを含む。近現代の盛土である。盛土の単位が認められ、土色・土質が異なる（第11図に破線で図示）。
- 第5層 ぶい黄褐色（10YR5/3）シルト混じり細粒砂。粗粒砂を多く含む。径2cm前後の礫を含む。わずかに鉄分・マンガンを含む。近世～近代の耕作土と考えられる。
- 第6層 ぶい黄褐色（10YR6/3）シルト混じり細粒砂。細礫を多く含む。径3cm大の礫を少量含む。鉄分・マンガンを多く含む。近世～近代の耕作土と考えられる。



第11図 調査区土層断面図 1/50

- 第7層 灰黄褐色(10YR6/2)シルト混じり細粒砂。細礫を多く含む。鉄分・マンガンを含む。中世の耕作土と考えられる。
- 第8層 ぶい黄褐色(10YR6/3)シルト質極細粒砂。粗粒砂を非常に多く含む。鉄分・マンガンをおずかに含む。中世の耕作土と考えられる。
- 第9a層 ぶい黄褐色(10YR6/4)シルト質極細粒砂。径5mm大の礫を非常に多く含む。鉄分・マンガンをお8層より多く含む。中世の耕作土と考えられる。
- 第9b層 ぶい黄褐色(10YR5/4)シルト混じり極細粒砂。粗粒砂～径1cm大の礫を含む。鉄分・マンガンをおずかに含む。中世の耕作土と考えられる。
- 第10層 ぶい黄褐色(10YR6/4)シルト質細粒砂。粗粒砂～径5mm前後の礫を非常に多く含む。鉄分・マンガンをお9層より多く含む。中世の耕作土と考えられる。
- 第11a層 ぶい黄褐色(10YR5/4)シルト質細粒砂。粗粒砂～径5mm前後の礫を非常に多く含む。鉄分・マンガンをお10層より多く含む。中世の耕作土である。
- 第11b層 褐色(10YR4/4)シルト混じり細粒砂。粗粒砂を非常に多く含む。鉄分・マンガンをお非常に多く含む。中世の耕作土である。
- 第11c層 ぶい黄褐色(10YR5/4)シルト混じり細粒砂。粗粒砂を多く含む。鉄分・マンガンをお少量含む。土壌化している。中世の耕作土である。
- 第12層 ぶい黄褐色(10YR5/3)シルト混じり細粒砂。粗粒砂～径7mm前後の礫を含む。下部ほど鉄分・マンガンをお多く含む。
- 第13層 ぶい黄褐色(10YR6/3)シルト混じり極細粒砂。粗粒砂～径7mm大の礫を多く含む。鉄分・マンガンをおずかに含む。
- 第14層 黄褐色(10YR5/6)シルト混じり細粒砂。粗粒砂～径1cm大の礫を多く含む。鉄分・マンガンをお多く含む。古代の整地土と考えられる。当層上面が第1遺構面である。
- 第15層 暗褐色(7.5YR3/3)シルト混じり細粒砂。粗粒砂～径3cm大の礫を含む。鉄分・マンガンをお非常に多く含む。遺物を濃密に含む。弥生時代後期後半から飛鳥時代の居住域に伴う土壌層と考えられる。当層上面が第2遺構面である。また、第3遺構面を覆っている。
- 第16a層 褐色(10YR4/4)細粒砂。わずかにシルトを含む。鉄分・マンガンを含む。無遺物層である。当層上面が第3遺構面である。
- 第16b層 黒褐色(10YR2/3)シルト質極細粒砂。粗粒砂～細礫を含む。鉄分・マンガンをお少量含む。無遺物層である。当層上面が第3遺構面である。
- 第17a層 ぶい黄褐色(10YR6/3)細粒砂。粗粒砂を多く含む。無遺物層である。
- 第17b層 暗褐色(10YR3/4)シルト混じり極細粒砂。粗粒砂を含む。鉄分・マンガンを含む。無遺物層である。
- 第18a層 暗褐色(10YR3/3)シルト混じり細粒砂。粗粒砂を含む。鉄分・マンガンをお少量含む。無遺物層である。
- 第18b層 暗褐色(10YR3/3)シルト混じり細粒砂。径5～10cm程度の礫を多く含む。無遺物層である。
- 第19層 ぶい黄褐色(10YR4/3)細粒砂。シルトをおずかに含む。粗粒砂を多く含む。鉄分・マンガンをおずかに含む。無遺物層である。
- 第①層 ぶい黄褐色(10YR5/4)シルト混じり細粒砂。粗粒砂を含む。鉄分・マンガンを含む。溝の埋土。
- 第②層 褐色(10YR4/4)細粒砂。わずかにシルトを含む。径2cm前後の礫を多く含む。上部ではマンガン粒が石に付着。溝の埋土。
- 第③層 ぶい黄褐色(10YR5/3)シルト質細粒砂。粗粒砂～径5mm前後の礫を多く含む。少量の鉄分とマンガン塊を部分的に含む。溝の埋土。
- 第④層 ぶい黄褐色(10YR5/3)シルト質細粒砂。粗粒砂～径7mm前後の礫を多く含む。鉄分・マンガンをお少量含む。畦畔。
- 第⑤層 ぶい黄褐色(10YR5/4)シルト質細粒砂。粗粒砂を多く含む。鉄分を含み、径5mm前後のマンガン塊が部分的に沈着している。畦畔。
- 第⑥層 ぶい黄褐色(10YR6/3)シルト質細粒砂。粗粒砂を多く含む。鉄分・マンガンをお多く含む。杭の痕跡。
- 第⑦層 ぶい黄褐色(10YR6/4)シルト質極細粒砂。粗粒砂を非常に多く含む。鉄分・マンガンをお少量含む。ピットの埋土。
- 第⑧層 ぶい黄褐色(10YR6/3)シルト質極細粒砂。粗粒砂を多く含む。鉄分・マンガンをおずかに含む。杭の痕跡。
- 第⑨層 灰黄褐色(10YR4/2)シルト混じり細粒砂。粗粒砂を多く含む。SD01の埋土。
- 第⑩層 ぶい黄褐色(10YR5/3)シルト質細粒砂。わずかに粗粒砂を含む。杭の痕跡。
- 第⑪層 灰褐色(7.5YR4/2)シルト混じり細粒砂。鉄分・マンガンをお多く含む。ピットの埋土。

- 第⑨層 黒褐色 (10YR2/3) シルト混じり細粒砂。粗粒砂を含む。鉄分・マンガンを含む。ピットの埋土。
- 第⑩層 ぶい黄褐色 (10YR7/2) 砂礫。急な水流による堆積物。SD02の埋土。
- 第⑪層 ぶい黄褐色 (10YR5/4) 細粒砂。わずかにシルトを含む。粗粒砂～径2cm大の礫を含む。鉄分・マンガンをわずかに含む。SD02の埋土。
- 第⑫層 暗褐色 (10YR3/4) シルト混じり細粒砂。粗粒砂～径3cm大の礫を含む。鉄分・マンガンを多く含む。炭化物を非常に多く含む。SH01の埋土。
- 第⑬層 暗褐色 (10YR3/4) シルト混じり細粒砂。粗粒砂～径3cm大の礫を含む。鉄分・マンガンを多く含む。SH01の埋土。
- 第⑭層 灰褐色 (7.5YR4/2) シルト混じり細粒砂。粗粒砂～細礫を多く含む。鉄分・マンガンを含む。SH01の柱穴(P1)の埋土。
- 第⑮層 黒褐色 (10YR2/3) シルト質細粒砂。粗粒砂をわずかに含む。鉄分・マンガンを多く含む。炭化物を多く含む。SH01の柱穴(P1)の柱穴。
- 第⑯層 暗褐色 (10YR3/3) 細粒砂。わずかにシルトを含む。粗粒砂を非常に多く含む。鉄分・マンガンを含む。SH01の埋土。
- 第⑰層 灰黄褐色 (10YR4/2) 細粒砂。わずかにシルトを含む。粗粒砂～細礫を多く含む。鉄分・マンガンを少量含む。SH01の埋土。周壁溝の埋土の可能性がある。
- 第⑱層 暗褐色 (10YR3/3) シルト混じり細粒砂。鉄分・マンガンを含む。礫を含む。瓦片を含む。SK04の埋土。
- 第⑲層 暗褐色 (10YR3/4) 細粒砂。わずかにシルトを含む。鉄分・マンガンを含む。礫を含む。須恵器片・瓦片を含む。SK04の埋土。
- 第⑳層 暗褐色 (10YR3/3) 細粒砂。わずかにシルトを含む。粗粒砂を含む。鉄分・マンガンを含む。瓦片を含む。SK29の埋土。
- 第㉑層 褐色 (10YR4/4) シルト混じり極細粒砂。粗粒砂～径5mm大の礫を含む。少量の鉄分・マンガンを含む。畦畔。
- 第㉒層 黒褐色 (7.5YR3/2) 細粒砂。粗粒砂～径2cm大の礫を含む。鉄分・マンガンを含む。SD06の埋土。
- 第㉓層 黒褐色 (7.5YR3/2) 細粒砂礫。わずかにシルトを含む。鉄分・マンガンを第㉒層より多く含む。SD06の埋土。
- 第㉔層 黒褐色 (10YR3/2) シルト混じり細粒砂。径7mm～2cm大の礫を含む。鉄分・マンガンを多く含む。SD06の埋土。
- 第㉕層 黒褐色 (7.5YR3/2) シルト質細粒砂。鉄分・マンガンを含む。SD06の埋土。
- 第㉖層 黒褐色 (7.5YR2/2) 細粒砂。シルトを少量含む。鉄分・マンガンを非常に多く含む。SD06の埋土。
- 第㉗層 黒褐色 (10YR2/2) 細粒砂～中粒砂。シルトを少量含む。粗粒砂～径3cm大の礫を含む。上部に遺物を多く含む。SD06の埋土。
- 第㉘層 黒褐色 (10YR2/3) 細粒砂。粗粒砂～径3cm大の礫を含む。鉄分・マンガンを多く含む。下部に遺物を多く含む。SD06の埋土。
- 第㉙層 褐色 (10YR4/4) シルト質細粒砂。粗粒砂～径7mm大の礫を含む。鉄分・マンガンを少量含む。土壌化している。SR01の埋土。
- 第㉚層 ぶい黄褐色 (10YR5/4) 砂礫。径3～7cm大の河原石を多く含む。土師器片・須恵器片を含む。SR01の埋土。
- 第㉛層 褐色 (10YR4/4) シルト混じり細粒砂～黒褐色 (10YR3/3) 砂礫。第14層および下部の遺物包含層がブロック状に混在する。SR01の埋土。
- 第㉜層 暗褐色 (7.5YR3/4) 細粒砂～ぶい黄褐色 (10YR5/4) 中粒砂。粗粒砂・細礫を含む。SR01の埋土。
- 第㉝層 ぶい黄褐色 (10YR5/3) 細粒砂～中粒砂。わずかにシルトを含む。粗粒砂～径1cm大の礫を含む。鉄分・マンガンをわずかに含む。ピットの埋土。
- 第㉞層 暗褐色 (7.5YR3/3) シルト混じり細粒砂。粗粒砂～径7mm大の礫を多く含む。鉄分・マンガンを多く含む。道槽の埋土。
- 第㉟層 黒褐色 (7.5YR3/2) シルト混じり細粒砂。粗粒砂を含む。鉄分・マンガンを非常に多く含む。遺構の埋土。
- 第㊱層 暗褐色 (10YR3/3) シルト質細粒砂。粗粒砂を多く含む。径1～3cm大の礫を少量含む。鉄分・マンガンを含む。SK39の埋土。
- 第㊲層 暗褐色 (10YR3/4) シルト混じり細粒砂。粗粒砂～径1cm大の礫を含む。鉄分・マンガンを非常に多く含む。SK39の埋土。
- 第㊳層 暗褐色 (10YR3/3) シルト混じり極細粒砂。粗粒砂を多く含む。鉄分・マンガンを多く含む。SK39の埋土。
- 第㊴層 暗褐色 (7.5YR3/3) シルト混じり細粒砂。粗粒砂～径1cm大の礫を多く含む。径5mm大のマンガン塊を多く含む。SH06の埋土。
- 第㊵層 暗褐色 (7.5YR3/3) シルト混じり細粒砂。粗粒砂～径1cm大の礫を多く含む。鉄分・マンガンを多く含む。SH

- 06の覆土。
- 第④層 黒褐色 (10YR2/3) シルト混じり細粒砂。粗粒砂～径7mm大の礫を含む。鉄分・マンガンをやや多く含む。SH06の柱穴 (P5) の埋土。
- 第⑤層 暗褐色 (10YR3/3) シルト混じり細粒砂。径1～3cm大の礫を含む。鉄分・マンガンをやや多く含む。SH06の柱穴 (P5) の埋土。
- 第⑥層 暗褐色 (10YR3/3) シルト質細粒砂。粗粒砂～径1cm大の礫を含む。鉄分・マンガンを多く含む。SH06の柱穴 (P5) の柱痕。
- 第⑦層 極暗褐色 (7.5YR2/3) シルト混じり細粒砂。粗粒砂～径5mm大の礫を含む。鉄分・マンガンを多く含む。SH06の柱穴 (P5) の埋土。
- 第⑧層 暗褐色 (10YR3/4) シルト質細粒砂。粗粒砂～径5mm大の礫を多く含む。鉄分・マンガンを多く含む。SH06の周壁溝の埋土。
- 第⑨層 黒褐色 (10YR3/2) 砂礫。古墳時代の流路の埋土。上流の遺物包含層を巻き込んでいる。
- 第⑩層 黒褐色 (7.5YR3/2) シルト混じり極細粒砂。粗粒砂～径2cm大の礫を含む。鉄分・マンガンを多く含む。SH05の覆土。
- 第⑪層 黒褐色 (7.5YR3/2) シルト混じり細粒砂。粗粒砂～径2cm大の礫を含む。鉄分・マンガンを非常に多く含む。SH05の覆土。
- 第⑫層 暗褐色 (10YR3/3) シルト質細粒砂。粗粒砂～径1cm大の礫を含む。鉄分・マンガンを非常に多く含む。SD04の埋土。
- 第⑬層 灰黄褐色 (10YR4/2) シルト混じり細粒砂。径7mm大の礫を非常に多く含む。鉄分・マンガンを含む。SD04の埋土。
- 第⑭層 灰黄褐色 (10YR5/2) 砂礫。わずかにシルトを含む。遺物を非常に多く含む。SD04の埋土。
- 第⑮層 暗褐色 (10YR3/3) 細粒砂。わずかにシルトを含む。粗粒砂を含む。鉄分・マンガンを含む。SD04の埋土。
- 第⑯層 ぶい黄褐色 (10YR5/3) 砂礫。割れた花崗岩を多く含む。遺物を非常に多く含む。SD04の埋土。
- 第⑰層 ぶい黄褐色 (10YR4/3) 細粒砂礫。下部は風化花崗岩がみられる。遺物をわずかに含む。SD04の埋土。
- 第⑱層 暗褐色 (10YR3/4) シルト混じり細粒砂。上部に細粒砂～粗粒砂を含む。鉄分・マンガンを多く含む。SD04の埋土。ただし、SD04以前の自然流路の可能性はある。
- 第⑲層 褐色 (7.5YR4/4) 砂礫。風化花崗岩の細礫を非常に多く含む。下部には径5～10cm大の礫が混入する。弥生時代後期以前の流路であるSR02の埋土。
- 第⑳層 黒褐色 (10YR2/3) シルト質細粒砂。粗粒砂～細礫を多く含む。鉄分・マンガンを非常に多く含む。ピットの埋土。
- 第㉑層 暗褐色 (10YR3/3) 細粒砂礫。シルトをわずかに含む。鉄分・マンガンを含む。SD05の埋土。
- 第㉒層 黒褐色 (7.5YR2/2) シルト混じり細粒砂。径5mm前後の礫を多く含む。径5～7cm大の礫を含む。SD05の埋土。
- 第㉓層 灰黄褐色 (10YR4/2) 細粒砂。粗粒砂を多く含む。鉄分・マンガンをわずかに含む。SD07の埋土。
- 第㉔層 暗褐色 (10YR3/3) 細粒砂。粗粒砂を多く含む。鉄分・マンガンをわずかに含む。SD07の埋土。
- 第㉕層 黒褐色 (10YR2/3) シルト混じり細粒砂。径5mm～1cm大の礫を含む。鉄分・マンガンを含む。SD07の埋土。
- 第㉖層 暗褐色 (10YR3/4) シルト混じり細粒砂。粗粒砂～径7mm大の礫を含む。鉄分・マンガンをわずかに含む。SD07の埋土。
- 第㉗層 黒褐色 (7.5YR3/2) 砂礫。弥生時代以前の土石流堆積物。
- 第㉘層 褐色 (10YR4/4) シルト (粘土質)。SH02のカマド壁体。
- 第㉙層 暗褐色 (10YR3/4) シルト質細粒砂。粗粒砂を含む。SH02のカマド壁口の堆積物。
- 第㉚層 ぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト混じり細粒砂。径2～3mm大の炭化物を多量に含む。鉄分・マンガンを含む。SH02の覆土。
- 第㉛層 暗褐色 (10YR3/4) シルト混じり細粒砂。鉄分・マンガンを含む。SH02の覆土。
- 第㉜層 暗褐色 (10YR3/3) シルト混じり中粒砂。粗粒砂を多く含む。鉄分・マンガンを含む。SH02のピットの埋土。
- 第㉝層 暗褐色 (10YR3/3) シルト混じり中粒砂。粗粒砂を多く含む。鉄分・マンガンを含む。SH02のピットの埋土。
- 第㉞層 ぶい黄褐色 (10YR4/3) 細粒砂。わずかにシルトを含む。粗粒砂を含む。鉄分・マンガンを含む。SH02のピットの埋土。
- 第㉟層 暗褐色 (10YR3/4) 細粒砂。わずかにシルトを含む。粗粒砂・細礫を多く含む。鉄分・マンガンを少量含む。SH02の覆土。
- 第㊱層 褐色 (7.5YR4/3) 細粒砂。わずかにシルトを含む。植物の根痕と考えられる。

第4節 遺構

1. 第1遺構面

第1遺構面は、第11a層に覆われており、第14層を基盤層とする。当遺構面で検出された遺構は、中世の耕作地に伴うものである。Ⅰ区で溝（SD01）と犁痕、Ⅲ区で溝（SD02）と流路（SR01）が検出されている（第12図、図版9）。また、Ⅲ区東部において、地震痕跡である砂脈が検出されている（第12図、図版9）。

なお、第12図では攪乱として図示しているが、第1遺構面までに至る掘削の過程で、調査区東端において18世紀代の染付磁器を含む流路の西肩が確認されている。現在の南北道路下に南方へ流下する流路が埋没していると考えられる。

（1）溝

調査区の中央付近でSD01が、東部でSD02が検出されている（第12図、図版9・17）。両溝ともに北から南へと直線的にのびている。SD01は幅10～30cmを測る。SD02は幅30cm前後を測る。これらの溝は、中世の耕作地に伴うものと考えられる。

（2）流路

調査区北東部で1条の流路（SR01）が検出されている（第12図、図版9）。当流路は、幅2.8m前後、深さ50cm以上を測る。流路の北部では、拳大よりやや小さな円礫が多数みられ、底面においては部分的に挟まれた状況を呈している。埋土上層からは、7世紀後半～8世紀前半の須恵器杯蓋片、赤褐色を呈する古代瓦片などが出土している。

（3）犁痕

調査区北西部で犁痕が10条検出されている（第12図、図版9）。いずれも北東から南西方向に走行している。幅10cm前後、長さ0.6～2.7mを測る。中世の耕作に伴うものと考えられる。

（4）地震痕跡

調査区の東端で、北から南にのびる地震痕跡の砂脈が検出されている（第12図、図版9）。調査区東壁の土層断面において、先述した近世の流路に切られていることが確認されていることから、それ以前の地震に伴うものであるということがわかる。しかし、地震が発生した時期については不明である。

2. 第2遺構面

第2遺構面は、第14層に覆われており、第15層を基盤層とする。当遺構面では堅穴住居跡が3棟（SH01～04。ただし、SH01・02は同一の住居跡）、多数のピットおよび土坑が検出されている（第12図、図版2・10～13）。これらの遺構の時期は、古墳時代後期～古代にかけての遺構と考えられるが、一部、第1遺構面で検出できていなかった中世の遺構も含まれている。

なお、調査区南部（Ⅱ・Ⅳ区）は攪乱が広範囲に及んでおり、マンガンの沈着が著しいなど、遺構検

出が非常に困難な状況であった。

(1) 竪穴住居跡

竪穴住居跡が3棟検出されている（SH01～04。ただし、SH01・02は同一の住居跡）。いずれの住居跡も部分的な検出に留まり、遺構の全容を把握することはできなかった。いずれの住居跡も古墳時代後期もしくは飛鳥時代のものと考えられる。

① SH01

調査区北西端で一部分のみ検出された竪穴住居跡で、東壁部分のみ確認されている（第12図）。SH02を切っている。床面では1基のピット（P1）が検出されている。覆土には炭化物が多く含まれており、焼失住居である可能性が高い。

② SH02

調査区北西端で検出された竪穴住居跡で、東壁部分のみ確認されている（第12図、図版11）。SH01に切られている。東壁に造り付けのカマドが検出されている。カマドには支柱石が確認されている。また、SH01と同様に、当住居跡の覆土にも炭化物が多く含まれており、焼失住居と考えられる。時期については、床面直上から出土した須恵器杯身（第17図2）から6世紀後葉頃と考えられる。床面では1基のピット（P1）が検出されている。

なお、本調査地点の西側に隣接する寺田遺跡第181地点の東端で、2時期の床面をもつ古墳時代後期の竪穴住居跡（SB201）が検出されている〔第62集〕。当住居跡も焼失住居であることから、SB201と今回検出されたSH01・02とは、同一の住居跡であると考えられる。

③ SH03

SH03は調査区のほぼ中央で検出されているが、反転掘削を行ったⅠ・Ⅱ区とⅢ・Ⅳ区の境界付近に位置していたことから、東西に分かれて検出されたものを図上で合成した（第12図、図版11）。

全体の約3分の2が検出されている。方形を呈しており、東西約3.9m、南北2.7m以上、深さ約40cmを測る。周壁溝が確認されており、東壁に伴うもので幅約45cm、深さ約20cmを測る。東側の周壁溝に接してカマドが設けられている。主柱穴と考えられる2基のピット（P1・2）が検出されている。

出土遺物から6世紀後半～7世紀初頭頃と考えられる。

④ SH04

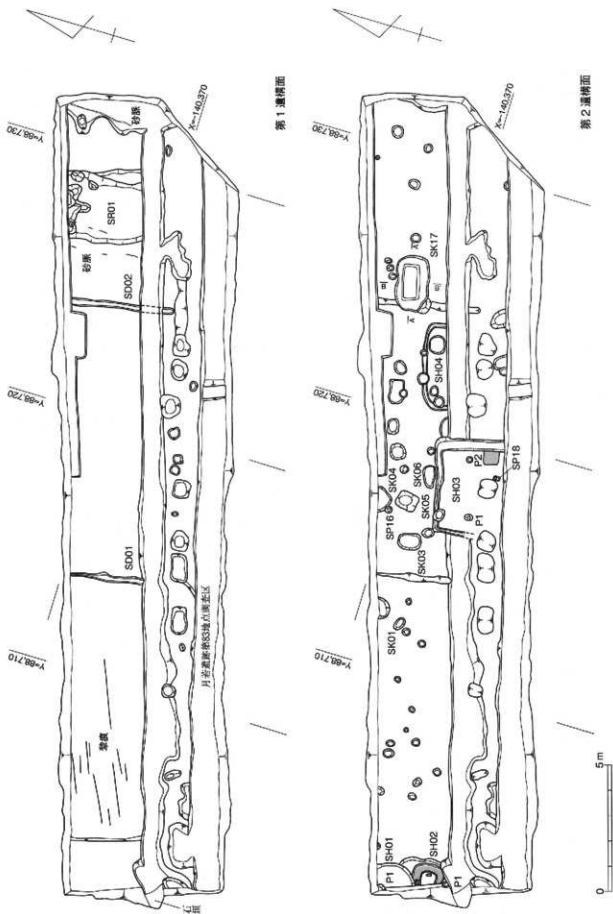
調査区中央やや東よりの位置で検出された竪穴住居跡である（第12図、図版10・11）。全体の3分の1程度しか検出されていない。隅円方形を呈しており、東西約3.5m、南北1.0m以上、深さ約5cmを測る。周壁溝が確認されており、幅が約20cm、深さ15～20cm程度である。出土遺物から古墳時代後期もしくは飛鳥時代のものと考えられる。

(2) ピット

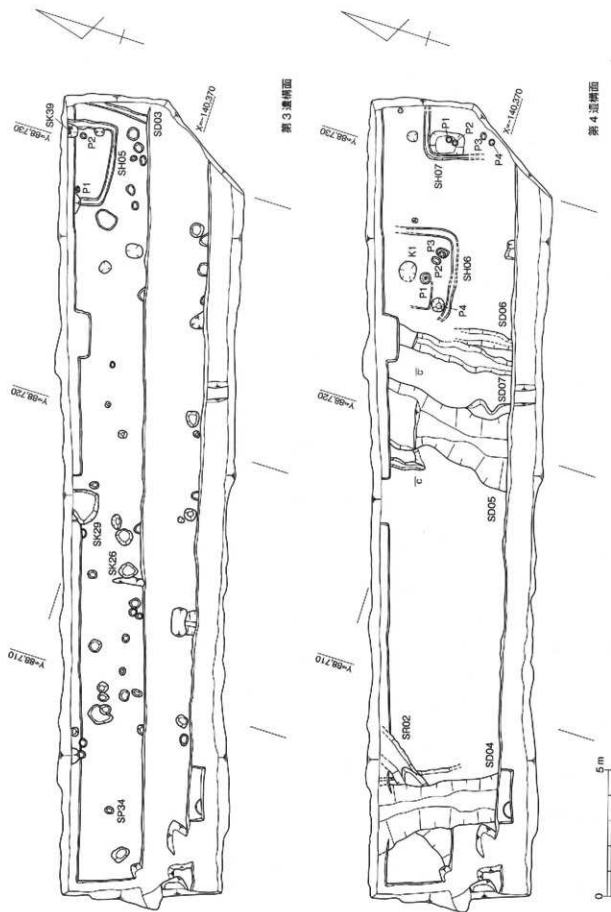
ピットが多数検出されている（第12図、図版10）。これらの多くは、本来、掘立柱建物を構成していたものと考えられるが、復元することはできなかった。

(3) 土坑

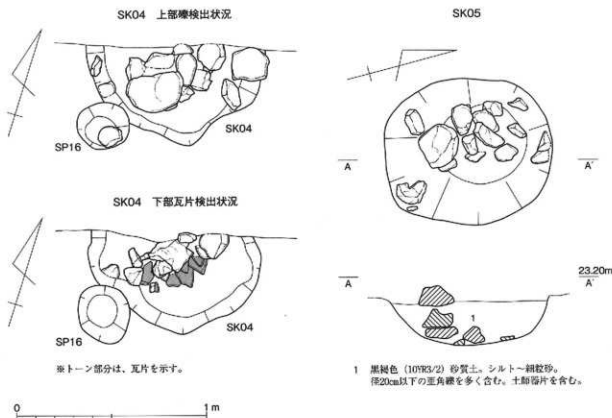
土坑が多数検出されている（第12図、図版10・17）。ただし、今回は規模が比較的大きなものを土坑



第12図 第1・2遺構面平面図 1/150



第13図 第3・4遺構面平面図 1/150



第14図 SK04平面図およびSK05平面図・土層断面図 1/20

として認識したため、これらの中には、本来、掘立柱建物を構成する柱穴も含まれていると考えられる。

これらの中で、調査区中央の北部で検出されたSK04とSK05からは、人頭大の礫が多数出土している（第14図、図版12）。SK04では、礫の下に古代の瓦片が多数敷かれていた。これらは根石の役割を果たしていたと考えられることから、両遺構は建物の柱穴である可能性が高い。

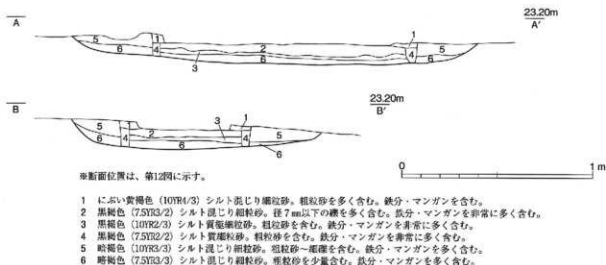
なお、調査区中央付近で検出されているSP18およびSK06からも古代瓦が出土している。また、西側に隣接する寺田遺跡第181地点では、古代の柱穴であるSP1009において、法隆寺式の均正忍冬唐草文軒平瓦が出土している〔第62集〕。さらに、同地点のSP1064では、人頭大の礫が多く置かれており、その下層から単弁八弁蓮華文高句麗様式軒丸瓦を含む瓦片が出土している〔第62集〕。今回検出された古代瓦片を伴う土坑と合わせて、これらの遺構は何らかの関連をもつものであると推測される。

また、Ⅲ区中央部で検出されたSK17は、木棺墓の可能性が高い（第12・15図、図版13）。その場合、墓坑は長さ約2.3m、幅約1.3mとなる。その中に納められる木棺は、長方形を呈しており、長さ約1.4m、幅約60cmとなる。出土遺物から古墳時代後期もしくは飛鳥時代のものと考えられる。

3. 第3遺構面

第3遺構面は、第15層に覆われており、第16a・16b層を基盤層とする弥生時代後期後半～古墳時代前期初頭の遺構面である。遺構面の標高は、調査区西部から東部へ約0.5m下がっている。

当遺構面では竪穴住居跡1棟（SH05）、多数のピットおよび土坑、溝1条（SD03）を検出した（第13図、図版14）。しかし、これらの中には第2遺構面で検出できていなかった古墳時代以降の遺構が多



第15図 SK17土層断面図 1/20

く含まれていた。

なお、後述するとおり、第3遺構面に伴う遺構の一部については、本書作成時に新たに設定した第4遺構面に伴う遺構として報告する。

(1) 堅穴住居跡

調査区東部において、堅穴住居跡 (SH05) が検出されている (第13図、図版14)。ただし、調査区の土層断面で確認すると、第15層上面から掘り込まれていることが確認でき、本来、第2遺構面に伴うものと考えられる (第11図)。全体の2分の1程度しか検出されていない。方形を呈しており、東西約3.3m、南北1.7m以上を測る。床面では、周壁溝と支柱穴と考えられる2基のピット (P1・2) が検出されている。周壁溝は幅20～30cm、深さ16～18cm程度である。出土遺物から古墳時代後期もしくは飛鳥時代のものと考えられる。

(2) ピットおよび土坑

ピットおよび土坑には、第2遺構面で検出できていなかった古墳時代以降のものが多く含まれている (第13図、図版14・17)。

ピットには、本来、掘立柱建物などを構成していたものも含まれていると考えられるが、復元には至っていない。

(3) 溝

調査区の東端で1条の溝 (SD03) が検出されている (第13図)。検出された範囲では、北から南へと直線的にのびている。最大幅約35cm、深さ約10cmを測る。時期がわかる遺物は認められなかった。

4. 第4遺構面

第3遺構面と同じく第15層に覆われており、第16a・16b層を基盤層とする弥生時代後期後半～古墳時代前期初頭の遺構面である。

発掘調査では、第3遺構面全体を精査し遺構検出を行ったが、その後、調査区の東半部にあたるⅢ・Ⅳ区において遺構の検出が不十分であると考えられた。そこで、再び遺構の検出を行ったところ、堅穴住居跡2棟（SH06・07）、ピットおよび土坑、溝4条（SD04～07）、流路1条（SR02）が新たに検出された（第13図、図版15・16）。これらの遺構については、発掘調査時に第3遺構面に伴うものとして記録したが、本書では第4遺構面を新たに設定し、その遺構として報告することとする。

（1） 堅穴住居跡

堅穴住居跡が2棟検出されている（SH06・07）。両住居跡は部分的な検出に留まり、遺構の全容を把握することはできなかった。いずれの住居跡も古墳時代後期もしくは飛鳥時代のものと考えられる。

①SH06

調査区東部で検出された堅穴住居跡である（第13図、図版16）。隅円方形を呈しており、東西3.8m以上、南北2.2m以上、深さ約2cmを測る。周壁溝が認められ、その規模は幅20～30cm、深さ6cm程度である。床面の南西部には屋内高床部の一部が確認されている。さらに、その直下でピットが検出されていることから、住居の建て替え等に伴って、高床部を設けた可能性が考えられる。ピットは主柱穴と考えられる2基（P3・4）を含め、合計4基（P1～4）検出されている。また、1基の土坑（K1）が検出されている。当土坑は、中央土坑として捉えることができるが、工事深度との関係で完掘はしていない。

②SH07

調査区東部で検出された堅穴住居跡である（第13図、図版16）。SH05と重複しているが、その先後関係は不明である。隅円方形を呈しており、東西2.0m以上、南北2.0m以上を測る。床面には周壁溝と4基のピット（P1～4）が確認されている。周壁溝の幅は、20～30cm程度である。

（2） ピットおよび土坑

当遺構面では、ピットおよび土坑が検出されている（第13図、図版15）。これらの中には、本来、掘立柱建物などを構成していたものも含まれていると考えられるが、復元はできていない。

（3） 溝

調査区西部および中央付近で、溝4条（SD04～07）が検出されている（第13図、図版15）。

①SD04

調査区西部で検出された溝である。幅1.7～2.6m、深さ約55cmを測る。断面形態は、逆台形状となっている。埋土は大きく3層に分かれ、下層に弥生土器片が最も多く包含されている。

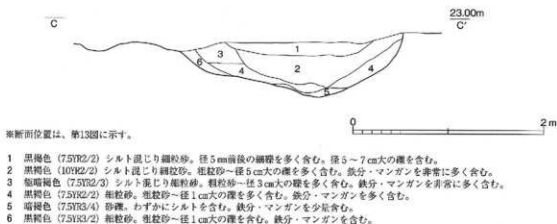
当溝の時期については、出土遺物から弥生時代後期後半～終末期頃と考えられる。

なお、当溝は南側の月形遺跡第83地点で検出されている弥生時代後期後半～終末期頃の溝であるSD201・202に続いている（第68集）。

②SD05

調査区中央付近で検出された溝である。幅1.7～3.2m、深さ約60cmを測る。溝の断面は緩やかな逆台形状の部分もあるが、強い流れにより溝底が抉られた部分は、V字に近い形状を呈する（第13・16図、図版15・17）。埋土を大きく2層に分けて掘削したが、いずれの層も弥生土器片を少量含んでいた。

当溝の時期については、出土遺物から弥生時代後期後半～終末期頃と考えられる。



第16図 S D05土層断面図 1/40

なお、当溝は月若遺跡第83地点で検出されている弥生時代後期後半～終末期の溝であるS D203に続いている〔第68集〕。

③ S D06

調査区東部で検出された溝である。S D07を切っている。幅40～70cm、深さ約35cmを測る。

当溝の時期については、出土遺物から弥生時代後期後半～終末期と考えられる。

④ S D07

調査区東部で検出された溝である。S D06に切られている。幅0.5～1.0m、深さ約45cmを測る。弥生時代後期後半～終末期頃の土器片が少量出土しており、当該時期の溝であると考えられる。

(4) 流路

調査区西部で1条の流路(S R02)が検出されている(第13図)。S D04に切られている。遺物はまったく出土しておらず、S D04が形成された弥生時代後期以前のものとは判断できない。

第5節 遺物

月若遺跡第98地点の調査では、縄文時代から近世にかけての遺物が20ℓ容量の遺物整理用コンテナで20箱分出土している。その種類は、縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・黒色土器・瓦器・瓦質土器・陶器・磁器・土鍾・瓦・サヌカイト剥片・石製品・鉄製品である。

次に出土した遺物について、まず、土器や土製品、石製品について記述する(第17図、図版18)。その後、古代の瓦について報告する(第18～20図、図版3・19～21)。

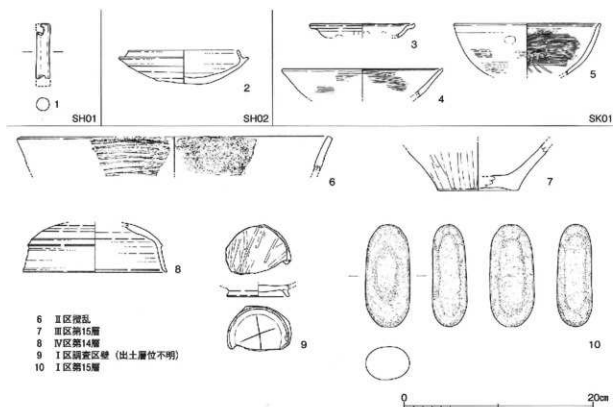
1. 遺構出土の遺物

各遺構から出土した遺物について記す(第17図1～5、図版18)。

(1) 竪穴住居跡出土の遺物

① S H01出土の遺物

1は土師質の棒状有孔土鍾である。当住居跡の覆土である炭化物層から出土している。



第17図 出土遺物 1/4

②S H02出土の遺物

2は須恵器の杯身である。外面の約1/2に濃黄緑色の自然釉が付着する。また、底部に長さ約3cm、幅約1cm、厚さ約1mmの粘土塊が付着している。TK43型式に比定され〔田辺1981〕、6世紀後葉のものと考えられる〔大阪府立近つ飛鳥博2006〕。

(2) 土坑出土の遺物

土坑に伴う遺物として、SK01から出土したものについて記す（第17図3～5、図版18）。3は土師器皿で、いわゆる「て」字状口縁が退化したものである。淡黄色を呈する。11世紀後半頃のものと考えられる〔伊野1995〕。

4・5は黒色土器の椀で、いずれも内外面に黒色に仕上げるB類である。両者ともに内面にヘラミガキを丁寧に施し、端部に1条の沈線を巡らせる。5は見込みに暗文が認められる。これらは11世紀後半頃のものと考えられる〔森1995〕。

これら以外に図化していないが、I区東部第6層から把手状を呈し、器種・器形などが不明の土師器が出土している（図版18①）。また、木棺墓の可能性のあるSK17からは、異形の特殊な須恵器片が出土している（図版18②）。形態からは、子持器台の台脚受部および退化した杯身になるのかもしれない。

2. 遺構に伴わない遺物

次に、遺構に伴わない遺物について記す（第17図6～10、図版18）。

6はII区の攪乱から出土した縄文土器の深鉢である。口縁部外面には横方向の二枚貝条痕が施され、

内面はヨコナデ調整で仕上げられる。晩期前半のものと考えられる。

7はⅢ区第15層から出土した弥生土器の底部である。外面には縦方向のヘラミガキが施される。しっかりとした平底の形態から、中期の壺などの底部と考えられる。本調査地点で出土している弥生土器の大半が後期中葉以降のものである中で、注目される破片である。

8はⅣ区第14層から出土した須恵器の杯蓋である。天井部外面は後近くまで回転ヘラケズリを施している。口縁部は若干外反し、端部には浅い沈線を巡らせて段を形成している。T K23型式と考えられる〔田辺1981〕。

9はⅠ区から出土した黒色土器の底部で、出土層位は不明である。内黒焼成のA類で、底部に輪高台を貼り付ける。底部外面には「×」のヘラ記号が認められる。内面にはヘラミガキが施されている。

10はⅠ区第15層において弥生時代後期後半頃の上器とともに出土した石製品である。濃緑色を呈する深成岩で、大粒の長石や石英が目立つ。部分的に平滑な面が認められることから磨石と考えられる。

3. 瓦

今回の調査では、建物の柱穴と考えられるS K04やS K06を中心に古代の瓦片が数多く出土している。ここでは、出土した瓦片の一部について、遺物包含層から出土したものと各遺構から出土したものをそれぞれ記述する。

(1) 遺物包含層出土の瓦〔第18図11・12、図版3・19〕

11は第11a層から出土した単弁八弁蓮華文高句麗様式軒丸瓦である。芦屋廃寺遺跡第62地点で瓦当部がほぼ完存する1点が初例で〔寒川・森岡・竹村2001、芦屋市教委2006b〕、月若遺跡第81地点で細片が1点〔第62集〕、月若遺跡第100地点で1点〔本書第46図121〕出土しており、合計4点確認されている。蓮弁および周縁がネガティブに表現されるのが特徴的であり、芦屋廃寺跡のものと同型式と考えられる。須恵質で、淡赤褐色～淡灰色を呈している。

12は第15層から出土した平瓦である。土師質で、赤褐色を呈している。凹面には模骨痕と布目痕が残り、部分的にナデが施されている。凸面は粗い縄目タタキをナデ調整により消した結果、縄目タタキの一部が豆粒状に残っている。側面はヘラケズリ調整が認められる。この平瓦と良く似たものが、月若遺跡の第96地点〔第76集〕や第83地点〔第68集〕、第100地点〔本書第46図122〕、第102地点〔第84集〕および寺田遺跡第197地点〔第84集〕で確認されている。

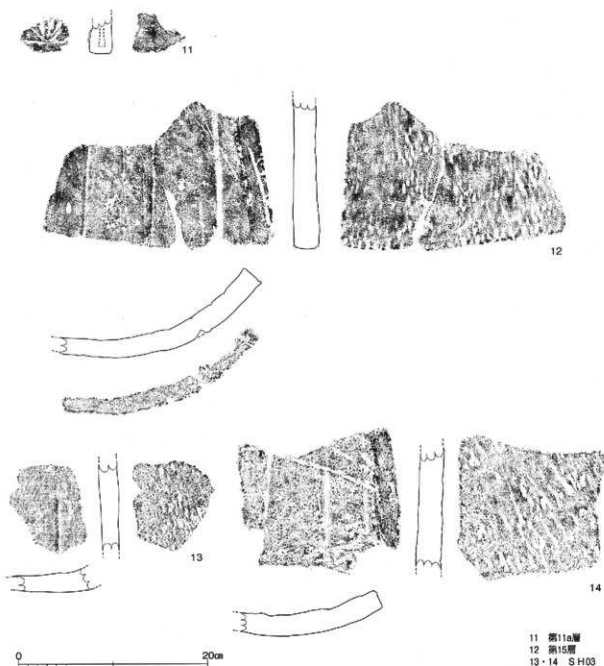
(2) 遺構出土の瓦〔第18～20図13～25、図版3・19～21〕

① S H03出土の瓦〔第18図13・14、図版19〕

平瓦である13・14がS H03の覆土から出土している。ただし、S H03は6世紀末～7世紀初頭の堅穴住居跡であることから、遺構に直接関連するものではなく、混入したものと判断される。両者ともに土師質で赤褐色を呈しており、前記の第18図12と非常に良く似ている。

② S K04出土の瓦〔第19図15～22、図版3・20〕

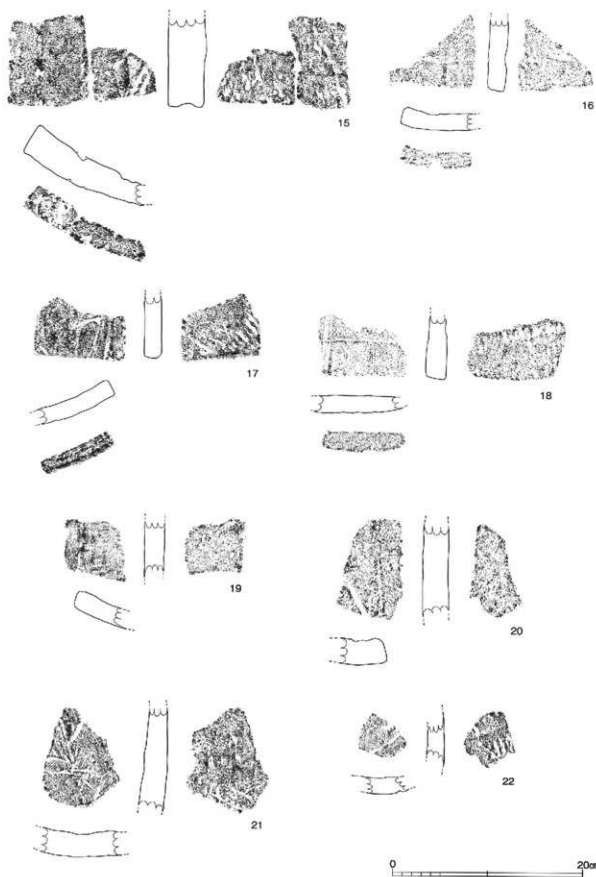
第4節で報告したとおり、S K04からは多数の瓦片が出土している。これらの中には同一個体も含まれている可能性はあるが、接合関係は認められなかった。



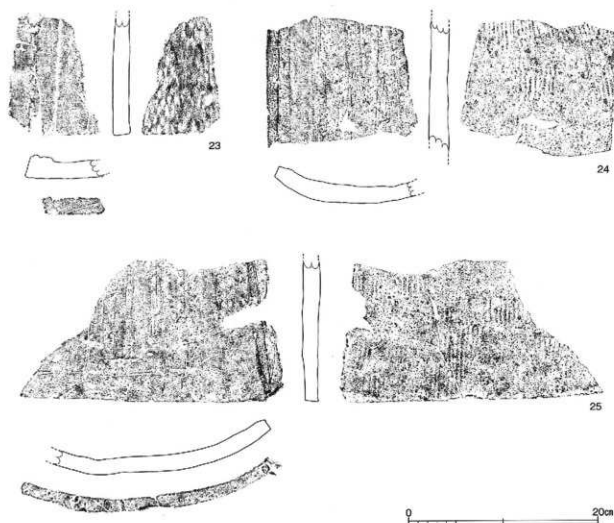
第18図 遺物包含層・SH03出土瓦 1/4

15～22はすべて平瓦である。これらの中で19以外の瓦片は、いずれも土師質の赤褐色を呈するものであり、これまで記してきた土師質のもの（12～14）と良く似ている。これらの平瓦片に共通するのは、凹面は模骨痕と布目痕が認められること、凸面は粗い縄目タタキをナデ調整で消していること、側面にはヘラケズリが施されることなどである。これらの中で15は側面に近づくにつれて厚さを増し、最も厚い部分で4.0cmとなる大変厚いものである。

他の瓦と異なる19は土師質で、淡黄色を呈する。凹面には布目痕がみられる。凸面はナデ調整である。側面にもナデが施されており、角がなく丸い。



第19図 SK04出土瓦 1/4



第20図 SK06出土瓦 1/4

③SK06出土の瓦（第20図23～25、図版3・21）

23～25は平瓦である。23は土師質で赤褐色を呈する平瓦で、前記の第18・19図12～18・20～22と良く似ているものである。凹面には模骨痕と布目痕がしっかりと残っている。凸面は粗い縄目タタキにナデ調整を施した結果、タタキ目が豆粒状に残る。また、凸面にはナデに伴う指頭痕がみられる。側面にはヘラケズリが施されている。

24・25は須恵質で、淡灰色を呈する。接合関係は認められないが、同一のものである可能性が高い。いずれも凹面には布目痕がみられ、部分的に縦方向に施されたヘラケズリによって帯状に消されている。凸面は平行タタキ目がナデ調整により丁寧に消されている。両者ともに凹面の側面に近い端部および側面にヘラケズリが施されており、25では凹面の広端面に近い端部に横方向のヘラケズリが施されている。

第6節 小 結

月若遺跡第98地点の調査では、弥生時代後期後半から近世にわたる遺構面が4面確認された。遺構の

分布は、調査区西部に比べて東部に濃密な傾向が認められる。この傾向は、南接する月若遺跡第83地点でも同様であった。

第1遺構面は、第11a層に覆われており、第14層を基盤層とするもので、近世の流路1条と中世の耕作地に伴う溝2条（SD01・02）と犁痕10条、古代以降の流路1条（SR01）が検出された。また、発生時期は不明であるが、地震痕跡である砂脈が検出されている。

第2遺構面は、第14層に覆われており、第15層を基盤層とするものである。堅穴住居跡3棟（SH01～04）。ただし、SH01・02は同一の住居跡、多数のピットや土坑、木棺墓（SK17）等、古墳時代後期～古代の居住域に伴う遺構が検出されている。堅穴住居跡は古墳時代後期もしくは飛鳥時代のものと考えられ、SH01・02は焼失住居と考えられる。SH02とSH03には、造り付けのカマドが設けられていた。

SP18、SK04・06からは、古代の瓦片が出土している。これらには土坑と認識したものも含まれているが、本来、建物の柱穴である可能性が高い。西側に隣接する寺田遺跡第181地点においても、ピット（SP1009・1064）から単弁八弁蓮華文高句麗様式軒丸瓦や法隆寺式の均正忍冬唐草文軒平瓦を含む瓦片が多数出土しており〔第62集〕、今回検出された古代瓦片を伴う遺構と合わせて、7世紀代の寺院や官衙の関連施設などと推測されるものである。

第3遺構面は、第15層に覆われており、第16a・16b層を基盤層とするもので、弥生時代後期後半～古墳時代前期初頭の居住域に伴うピットおよび土坑、時期不明の溝1条（SD03）が検出された。また、古墳時代後期もしくは飛鳥時代の堅穴住居跡が1棟（SH05）検出されている。

第4遺構面は、第3遺構面と同じく、第15層に覆われており、第16a・16b層を基盤層とするもので、弥生時代後期後半～古墳時代前期初頭の居住域に伴うピットおよび土坑、溝4条（SD04～07）、流路1条（SR02）が検出された。なお、SD06は弥生時代後期後半～終末期の溝、SR02は弥生時代後期以前の時期不明の流路である。また、古墳時代後期もしくは飛鳥時代の堅穴住居跡が2棟（SH06・07）検出されている。

遺物は20ℓ容量のコンテナ20箱分が出土しており、縄文時代晩期から近世の土器類を中心に確認されている。その中で、出土量では、弥生時代後期後半と古墳時代後期～奈良時代の遺物が比較的多い。さらに、単弁八弁蓮華文高句麗様式軒丸瓦を含む古代瓦片が多数出土しており、芦屋廃寺跡の創建期もしくはそれ以前の時期のものが主体であると考えられ、官衙的な色彩の濃い遺物である。これらの存在からも当地域には、芦屋廃寺跡に先行するか、もしくは同時期に創建された古代寺院や官衙の関連施設等が存在した可能性が高い。

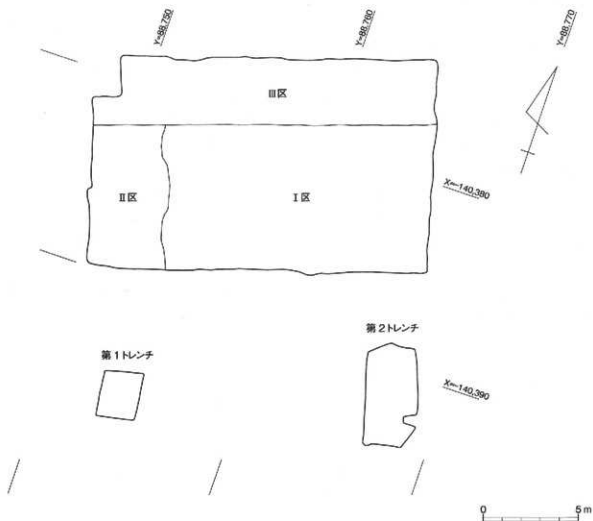
第4章 月若遺跡第100地点の調査

第1節 本発掘調査の方法

本調査地点は芦屋市月若町71番2に所在し、都市計画道路山手幹線の事業地になっている。調査が始まる直前までは、個人住宅が建っていた。

本地点周辺の発掘調査状況をみると、北側に月若遺跡第81地点（平成16年度調査）〔第62集〕、北東側に第70地点Ⅱ区（平成14年度調査）〔第57集〕、東側に第70地点Ⅰ・Ⅲ区（平成14年度調査）〔第57集〕が隣接しており、いずれも発掘調査はすでに完了している（第7図）。第70・81地点ともに、弥生時代から中世の遺構が多数検出されており、本地点にも遺構面や遺物包含層が続いていることは明らかであった。

本地点においては、調査地の北半部が街路部分となる計画となっていた。そこで、調査区は山手幹線街路が建設される範囲を対象とした。一方、調査地の南半部については、埋蔵文化財の基礎資料を得るために、確認調査を実施することとなった。



第21図 調査区地区割図 1/200

発掘調査は、既存建物の解体が終わった平成21年（2009）5月11日から開始した。まず、調査地の周囲を安全フェンスで囲むなど、準備工を進めながら、調査地南半部の確認調査を行った。その概要は次節で記すが、トレンチを2基設定し、西側のものを第1トレンチ、東側のものを第2トレンチと名付けた（第21図）。両トレンチともに、弥生時代後期後半から中世の遺物包含層が確認された（第22図、図版23）。

第1・2トレンチを埋め戻した後、調査地の南西部にコンテナハウスを2棟設置した。また、敷地南東部を残土置き場とした。

今回の調査では、残土はすべて場内で処理することとなった。そこで、この条件を踏まえて、調査区を分割することとした。また、現況では、調査地の北辺に街路建設工事に伴う万能堀が設置されていたために、その範囲（Ⅲ区）の発掘調査の着手時期を遅らせることとなったことから、まず、万能堀より南方にⅠ区を設定した。Ⅰ区を設定する際には、Ⅱ区を残土置き場として掘り残した。Ⅰ区の調査中に万能堀が撤去されたため、Ⅰ区の調査終了後、Ⅱ区とⅢ区を同時に調査することとなった（第21図）。

Ⅰ～Ⅲ区を設定するにあたって、調査区の北辺は、隣接する月若遺跡第81地点の調査区南辺に重なるように設定した。調査区の南辺は、街路工事範囲の南限までとした。調査地の東側には個人住宅、西側には道路があるため、調査区の東辺と西辺は、隣地境界線付近から約2m控えて、土砂の崩壊などから安全を確保することとした。

このようにして設定した調査区の形態は、おおよそ東西に長い長方形を呈し、その規模は東西18m、南北11.5mとなり、面積は204㎡となった。また、各区の面積については、Ⅰ区が108㎡、Ⅱ区が37㎡、Ⅲ区が59㎡となっている。なお、今回の調査では、Ⅰ区で3面、Ⅱ区で2面、Ⅲ区で2面の遺構面を検出したことから、延べ調査面積は516㎡となる。

調査深度は、無遺物層までとした。具体的には、第1・2トレンチの結果から第4節で記す第8a層上面（発掘調査時の第2遺構面）までとなった。

掘削に際して、まず、Ⅰ区南東部に重機（0.25㎡）でトレンチを掘削し、機械掘削の深度を確認した。なお、このトレンチは偶然にも近現代遺構（KG02）と重複した。さらに、Ⅰ区北西隅にもトレンチを掘削し、土層の確認を行った。引き続き、埋蔵文化財に影響を与えないように近現代の堆積土～中世の耕作土（第1～4層）を重機で掘削し、除去した。それより下層は人力で分層発掘しながら、遺構面を検出した。

調査区には、平面直角座標系第Ⅴ系（日本測地系）の座標値を投影させた基準点を設置した。

写真撮影には、35mmカラーポジフィルムとデジタルカメラ（600万画素）を用いた。

実測図は、調査区配置図を縮尺1/100、遺構面平面図を縮尺1/20ないし1/50、調査区土層断面図を縮尺1/20、各遺構の平面図・土層断面図・断面図を縮尺1/10ないし1/20で作成した。なお、平面実測図は、光波測距器を用いて測点し、作成した。

調査区の現状復旧については、街路課との打ち合せにより、今後の街路事業の工事に合わせて部分的に埋め戻した。

第2節 確認調査の概要

先述したとおり、調査地の南半部については、埋蔵文化財の基礎資料を得るために、トレンチを2基

設定し、確認調査を実施した。両トレンチともに、重機（0.25m）を用いて掘削した。

西側に設定した第1トレンチは、東西約2.1m、南北約2.5m、面積約5.2m²を測る。弥生時代から中世の遺物包含層が確認された（第22図、図版23）。遺構では、東西方向にのびる中世の溝が検出された。

東側の第2トレンチは近現代の遺構（防空壕跡）に重なったため、規模を拡大せざるを得ず、東西約2.7m、南北約5.0m、面積約13.5m²を測る。第1トレンチと同じく、弥生時代から中世の遺物包含層が確認された（第22図、図版23）。

また、先述した近現代の遺構は平面形態が「凸」字形を呈する。壁は鉾煉瓦で構築されており、壁面は内外面ともにモルタルで仕上げられている。床もモルタルで仕上げられており、その北部には直径約18cmの排水溝が設けられている。鉾煉瓦の規格は、長さ22.0cm、幅9.8～10.0cm、厚さ6.0cmを測る。なお、床には板材が敷かれているのを、機械掘削中に確認している。南部の突出部は、床面より約41.5cm高くなっている。防空壕跡であると考えられる。

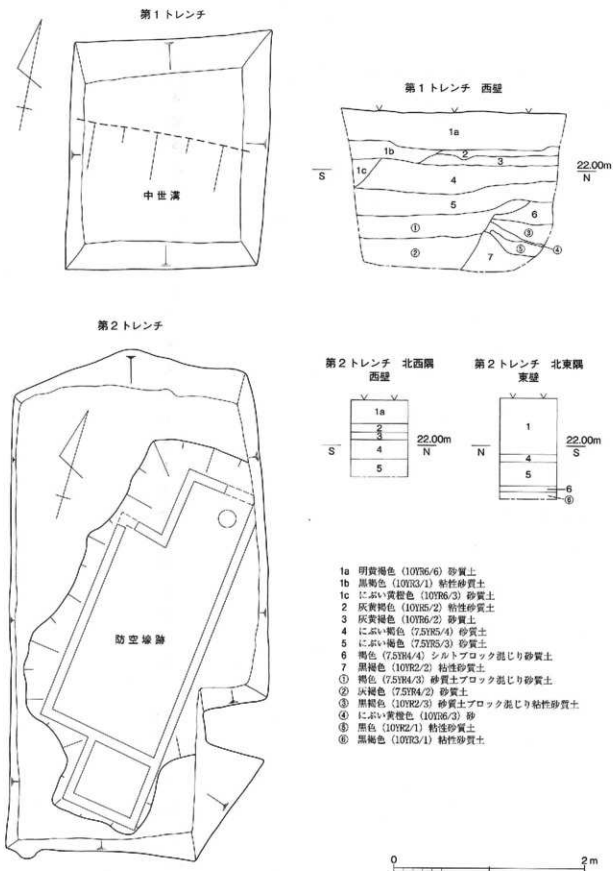
土層については、第1トレンチ西壁の土層断面図および第2トレンチの土層柱状図を示す（第22図、図版23）。両トレンチの土層番号は対応している。土質や包含される遺物、周辺の既往調査結果などから各層の性格について記すと、第1層は近現代の表土および盛土などである。第2層は近現代の耕作土と考えられる。第3層は近世の耕作土と考えられる。第4層は中世の耕作土と考えられる。第5層は中世の居住域に伴う土壌層と考えられ、月若遺跡第96地点の第5層に対応していると推測される〔第76集〕。第6層は古墳時代から古代の居住域に伴うと考えられる土壌層である。月若遺跡第96地点の第6層に対応すると考えられる。第7層は黒褐色（10YR2/2）を呈する粘性砂質土で、遺物の包含は確認されていない。

遺構埋土では、第1トレンチの第①・②層が先述した中世溝の埋土である。当遺構は第6層を基盤層としている。同トレンチ第③～⑤層は、弥生時代後期後半～古墳時代前期初頭頃の溝の埋土と考えられる。当溝は第7層を基盤層としており、位置的に第5節で述べるSD05と同一のものと考えられる。第2トレンチ第⑥層は遺構埋土と認識したが、その性格については確認できていない。

次に、第22図の第1・2トレンチの土層註記を記す。土層番号は上層から下層に向かって順番にアラビア数字を付した。また、それらの中で、土質や土色等に若干の差違が観察されたものには、アラビア数字の後にアルファベットの小文字を付けて細分した。一方、遺構埋土をはじめ、部分的に認められる土層については、円圈のアラビア数字で通し番号を付けた。土層番号に続けて、色調、粒度、包含物、性格等を順に記した。色調は『新版標準土色帖』2000年後期版（農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所色票監修）を用いて、客観化を図った。

【第1・2トレンチ土層註記】

- 第1a層 明黄褐色（10YR6/6）砂質土。極細粒砂～粗粒砂。ビニールを含む。現表上。
- 第1b層 黒褐色（10YR3/1）粘性砂質土。粘土～細粒砂。赤煉瓦を含む。近現代の表土および盛土。
- 第1c層 ぶい黄褐色（10YR6/3）砂質土。シルト～細粒砂。土管の風設溝等の埋土。
- 第2層 灰黄褐色（10YR5/2）粘性砂質土。粘土～細粒砂。近現代の耕作土と考えられる。
- 第3層 灰黄褐色（10YR6/2）砂質土。シルト～細粒砂。乗付磁器を含む。近世の耕作土と考えられる。
- 第4層 ぶい褐色（7.5YR5/4）砂質土。シルト～細粒砂。中世の耕作土と考えられる。
- 第5層 ぶい褐色（7.5YR5/3）砂質土。シルト～細粒砂。中世の遺物を含む。中世の居住域に伴う土壌層と考えられる。
- 第6層 褐色（7.5YR4/4）シルトブロック混じり砂質土。シルト～細粒砂。径1cm程度の褐色シルトブロックを含む。古墳時代から古代の居住域に伴う土壌層と考えられる。
- 第7層 黒褐色（10YR2/2）粘性砂質土。粘土～粗粒砂。無遺物層。



第22図 確認調査トレンチ平面図・土層断面図・柱状図 1/40

- 第①層 褐色 (7.5YR4/3) 砂質土ブロック混じり砂質土。シルト～細粒砂。径5cm以下の茶色砂質土ブロックを多く含む。中世溝の埋土。
- 第②層 灰褐色 (7.5YR4/2) 砂質土。シルト～細粒砂。第1トレンチ南壁では、東西方向にのびる径30cm前後の円礫の列が認められる。径5cm以下の淡灰褐色粘土ブロックが部分的に含まれる。中世溝の埋土。
- 第③層 黒褐色 (10YR2/3) 砂質土ブロック混じり粘性砂質土。粘土～細粒砂。径5cm以下の黒褐色砂質土ブロックを多く含む。弥生土器片もしくは土師器片を含む。弥生時代後期後半～古墳時代前期初頭頃の溝の埋土。
- 第④層 ぶい黄褐色 (10YR6/3) 砂。極細粒砂～細粒砂。ラミナがみられる。弥生土器片もしくは土師器片を含む。弥生時代後期後半～古墳時代前期初頭頃の溝の埋土。
- 第⑤層 黒色 (10YR2/1) 粘性砂質土。粘土～細粒砂。弥生土器片もしくは土師器片を含む。弥生時代後期後半～古墳時代前期初頭頃の溝の埋土。
- 第⑥層 黒褐色 (10YR3/1) 粘性砂質土。粘土～細粒砂。須恵器片を含む。遺構の埋土。

第3節 発掘調査の経過

本発掘調査は、森岡・竹村・平山・坂田・白谷を調査担当者として、竹村・平山が現場に常駐し、平成21年(2009)5月11日から7月21日までに実働45日で実施した。また、発掘調査と並行してコンテナハウスにおいて遺物洗浄と写真整理などを行った。調査・整理補助員としては、桑原・近藤・西岡・横森が従事した。

5月11日からネットフェンス等の現場設営、調査器材の搬入等を行い、5月13日よりI区の機械掘削を開始し、人力掘削により第1～3遺構面を検出し、記録作業を行った。I区の調査が完了後、6月24日には反転掘削を行って、II・III区の調査へと移行した。機械掘削を行い、人力掘削により第1～2遺構面を検出し、記録作業を行った。7月21日に本地点の発掘調査を終了した。

発掘調査の経過および作業内容の詳細については、次のとおり本発掘調査の日誌抄を掲げて記す。

【本発掘調査日誌抄】

平成21年(2009)

5月11日(月) 晴れ

本日より発掘調査を開始する。生涯学習課細井課長補佐・森岡主査・竹村学芸員・平山囃託、街路課足立主査・梅木課員・中尾課員、島田組大塚氏が臨席の下、開始立会を行った。

開始立会后、調査地の東・西・南縁にネットフェンスを設置し始める。調査地は北半部を全面調査し、南半部はトレンチによる確認調査を行う予定である。

準備工とはば並行して、調査地の南西隅に第1トレンチを設定し、重機による掘削を行った。掘削深度は、現地表下170cm付近である。トレンチの掘削を完了し、縮尺1/20で平面実測図を作成した。詳細な土層観察は明日行うことにした。

5月12日(火) 晴れのち曇り

工事用目録シートを張るなどの準備工と並行して調査を進めた。第1トレンチは、縮尺1/20で西壁土層断面図を作成し、基本土層を確認した。簡略に示すと第1層が表土(近現代)、第2層が灰色土(近世～近現代耕作土)、第3層が淡灰色土(近世耕作土)、第4層が淡灰褐色土(中世耕作土)、第5層が灰茶色土(中世)、第6層が褐色土(古墳時代～古代)、第7層が黒灰色土(弥生時代後期)である。記録後、トレンチは埋め戻した。また、調査地の南東部に第2トレンチを設定し、機械掘

削を開始した。鉋澤煙灰で構築された地下施設を検出し、その状況を撮影した。

調査地北半部では、調査区を設定した。基本土層の確認のため南東隅を深掘したが、偶然にもちょうど大型の近現代遺構に重なった。それを基に調査区東端を面的に重機で掘削したところ、大規模な近現代遺構(KG01・02)を検出した。これらの近現代遺構の掘削面にみられた基本土層について、縮尺1/20の土層断面図・柱状図を作成した。

5月13日(水) 晴れ

第2トレンチは縮尺1/20で平面実測図に記録し、土層状況図を縮尺1/20で作成して埋め戻した。本日で、確認調査は終了した。

北半部は調査区東壁に沿って側溝を掘削し、分層を行った。第1遺構面は第6層上面と考えられる。重機で第4層上部まで掘削し、調査区東側から順に第4層を検出した。また、近現代遺構(KG04)より戦後の遺物が多数出土した。

5月14日(木) 晴れ

コンテナハウスで設置され、調査器材を搬入した。ようやく、本格的な調査環境が整った。昨日に引き続き、機械掘削から開始した。調査区北部では、すでに第1遺構面と考えられる第6層が露出している部分があり、人力掘削時に注意を要する。

調査区北東部に位置し、近現代遺構(KG04)と重複

関係にある近現代遺構（K G03）内で巨石を検出し、その状況を撮影した。近現代遺構の埋土の除去と並行して、調査区南壁に沿って側溝を設定し、掘削を開始した。

5月15日（金）曇りのち晴れ

調査区は、残土置き場の確保と北側にある万能堀の撤去時の兼ね合いから、東部と西部・北部の2期に分けて調査を行う計画となっており、前者をⅠ区、後者をⅡ区・Ⅲ区と呼称することにした。本日で機械掘削が終了し、近現代遺構と南壁側溝の掘削を進めた。

Ⅰ区北西部において暗渠を確認し、その埋土を除去し始めた。検出長が約490cm、幅が約60cmを測り、さらに西側に続いている。詳細な時期は不明である。また、南壁側溝の掘削を完了した。南壁を分層したところ、第1遺構面の基礎層である第6層が確認できなかった。第4・5層は南に向かうほど厚く堆積している。第1遺構面を検出する際には、この点に留意して掘削を進める必要がある。

午前に藤川祐作氏が来跡した。

5月18日（月）晴れ

新型インフルエンザが5月16日に神戸市で発生し、マスク姿の人々が目立つ。先週末に降雨があり、雨水の排出作業から開始した。本日よりベルトコンベアを稼働させ、Ⅰ区の人力掘削に移行した。東側から順に第4層を除去することで、第5層上面の検出に努めた。ただし、Ⅰ区北半はすでに第6層が露呈している。

Ⅰ区北西部の暗渠は、検出状況を撮影した。その後、壁の遺存状態が良好な東端部と西端部に断ち切りラインを設定し、その間の蓋石と裏込土を除去して、その状況を撮影した。また、縮尺1/20で光波測距器による略測図を作成した。

5月19日（火）曇りのち晴れ

Ⅰ区の人力掘削および暗渠の調査を継続した。第5層上面では、近現代遺構（K G01・02）間において壁痕を確認した。検出状況を撮影し、光波測距器を用いて縮尺1/50で実測した。壁痕は、暗渠と同様、ほぼ東西方向に走っている。その後、第5層を上部・下部に細分して順に掘り下げ、第6層および第7層上面の検出を行った。暗渠は壁を取り外しながら東端部を重点的に調査し、これ以上東方に延伸しないことが判明した。暗渠底面のレベルは、東から西に向くほど低くなっていった。また、近現代遺構（K G05）を掘削し、南壁側溝の掘り下げも行った。午後に藤川謙次氏が来跡した。

5月20日（水）晴れのち曇り

本日は人力掘削で検出した第6層上面を中心に、暗渠の調査も継続して行った。暗渠は、西端部に改めて断ち切りラインを設定し、暗渠構築状況を撮影した。

第6層上面ではピットや壁痕をわずかに検出し、月若路跡第81地点から続く古代の大溝の東岸も確認した。そこで全景を撮影し、光波測距器による縮尺1/50の遺構配置図を作成した。ピットと壁痕を掘削し、各々に遺構番号を付して出土遺物を取り上げた。

午後3時過ぎに、調査地北側の万能堀の撤去について、街路課足立主査と打ち合せした。

5月21日（木）曇り

当初、第1遺構面は第6層上面と考えたが、未だ検出される遺構は稀薄な状況であった。そこで人力掘削を進



第23図 調査風景（5月21日）

めて第7層上面を検出したところ、多くの遺構を確認することができた。このため、第7層上面を第1遺構面と捉え直し、調査を進めることにした。

検出した遺構は多数のピットおよび土坑、溝である。これらはⅠ区東半部に集中し、西半部は、古代の大溝（S D01）の埋土が広がっている。検出された遺構を随時、段下げた。遺構の検出状況を撮影後、目測による縮尺1/50の遺構配置図を作成し、各々に遺構番号を付した。また、S D01の北端に断ち切りを設定し、掘削を行った。暗渠の調査は、縮尺1/10で立面図の作成を開始した。

午後に藤川祐作氏が来跡した。

5月22日（金）雨のち曇り

本日は朝からの降雨により、作業を中止した。三条文化財整理事務所において遺物洗浄を行った。

5月25日（月）曇りのち晴れ

第1遺構面の遺構検出を継続し、ピット・土坑の段下げ、半掘を随時行った。また、一部のピットは、土層断面の撮影も行った。島田組が基準測量杭の打設と国土地理院の投影を行った後、光波測距器による縮尺1/20の平面実測図を作成し始めた。

S D01の調査は、北端の断ち切り掘削が完了した。そこで埋土を観察し、3層に大別した。S D01の南端にも断ち切りを設定し、埋土を層位的に掘削して、各層ごとに出土遺物を取り上げることにした。暗渠は、立面図が完成した後、西端に残っていた壁の除去を進めた。

5月26日（火）晴れ時々曇り

本日、ようやく水道が開設した。基準測量杭に標高値を移し、第1遺構面の調査を続行した。平面実測図を作成する傍ら、東半部の遺構は半掘および土層断面の撮影を進めた。一部は縮尺1/10で、土層断面図の作成に取りかかった。

S D01は、土層観察用の土手を設定し、その北側の掘削を開始した。S D01の埋土を4層（Ⅰ～Ⅳ層）に捉え直し、Ⅲ層に当たる砂層の掘削まで進めた。Ⅰ区西壁にみえる暗渠の断面を撮影した。

本日は、街路課足立主査と打ち合せを行った。

5月27日（水）曇り時々晴れ

本日よりコンテナハウスで、遺物洗浄などを開始した。遺構の半掘、撮影、土層断面図作成、土層註記を順次進



第24回 調査風景（6月1日）

め。また、第1遺構面の平面実測図が完成した。

S D01は、Ⅲ層（砂層）の掘削が完了した時点で、溝底に大小様々な重角礫・円礫の敷金が確認された。その状況を撮影した後、礫を除去していった。S D01の出土遺物には、古代瓦片が多数含まれている。

山本徹氏（映像作家）とビデオの撮影日を打ち合せ、6月1日の午前に行うことになった。

5月28日（木）雨時々曇り

降雨のため、本日の作業を中止した。三条文化財整理事務所で、遺物洗浄および図面整理を行った。

5月29日（金）晴れのち曇り

本日も遺構の記録作業を継続した。また、遺構面を再び精査し、新たにピットと土坑を検出した。ピットの位置関係と掘土の類型を検討したところ、Ⅰ区北東部に掘立建物（S B01）が確認できそうである。S B01はさらに北側へ続き、総柱建物跡と推定される。

S D01は、北部西側に堆積する最下層のⅣ層（暗灰色砂質土層）を掘削した。掘削が完了した時点で、土手壁面を分層した。その状況を撮影後、縮尺1/20で土手北壁の土層断面図作成に取りかかった。

午前に藤川祐氏が来跡した。

6月1日（月）晴れ

第1遺構面の全景撮影に向け、調査を急いだ。午前11時～午後12時半頃まで、山本氏によるビデオ撮影が行われた。東半部の遺構は、記録作業を継続する一方、S B01を構成するピットを新たに検出した。また、S D01が存在する西半部においてもピットと土坑を検出し、平面実測図に追記した。

S D01は、土手北壁の土層断面図が完成した後、土手の分層発掘に着手した。砂層である第4層（Ⅲ層）まで掘削し、層内に含まれていた礫の検出状況を撮影した。

午前に細井課長補佐の引率で、トライやるウィークの芦屋市立潮見中学校の生徒3名が見学に訪れた。

6月2日（火）晴れ

第1遺構面の全景撮影に向けた諸準備を朝から行った。遺構面の清掃と白線引きを東半部から行う一方、S D01土手の分層発掘も継続した。Ⅰ区西側に3段の撮影用足場を組み立て、午後12時半頃から撮影を開始した。地上からの撮影も行い、昼休みを挟んで各遺構の撮影に取りかかった。

撮影終了後、東半部の遺構は記録作業を再開し、S D01は北端（K G05）および南端（南壁側溝）の断ち切りを開始した。また、平面実測図の修正作業も行った。本日の遺物洗浄で、S D01（Ⅳ層下部）の出土遺物中に、法隆寺式軒瓦片を確認した。

午前に藤川課長補佐の来跡があった。また、細井課長補佐の引率で、明日から発掘作業に参加する芦屋市立潮見中学校の生徒3名が、事前挨拶に訪れた。

6月3日（水）曇り時々雨

トライやるウィークで、芦屋市立潮見中学校の生徒3名が調査に参加した。調査地北側の万能堀が撤去された後、ネットフェンスの設置を行った。この調査地北側の範囲は、Ⅱ区と合わせ、反転掘削して調査を行うことになっている。

本日はピットの半掘、撮影、略測といった記録作業が中心であり、平面実測図の追記と補正も行った。

6月4日（木）曇り時々晴れ

本日も、芦屋市立潮見中学校の生徒3名が調査に参加した。昨日同様、ピットの記録作業を継続し、順次、完掘した。平面実測図は、ピット下部の追記などを進め、遺構面全体のレベリングに取りかかった。

S D01は平面実測後、レベリングを行った。その後、溝底に堆積する黒色礫泥じり粘土層を掘削し、遺物を取り上げた。

午前に、芦屋市立潮見中学校の先生がトライやるウィーク視察のため、来跡した。

6月5日（金）雨のち曇り

天候の急変により、朝9時から本降りとなった。雨が止むまでコンテナハウス内で待機し、午前11時より作業を開始した。本日は非常に肌寒い1日であった。第1遺構面の調査も終盤であり、遺構の記録作業を進めた。また、第2遺構面の調査を見据え、東壁側溝および南壁側溝をさらに掘り下げた。

平面実測図は、ピット下部や新たに検出した土坑、耕作痕などの追加実測を行い、レベリングを継続した。S D01は、黒色礫泥じり粘土層の掘削を完了させた。

街路課足立主査と打ち合せを行った。

6月8日（月）快晴

快晴で強い陽射しの下、遺構の記録作業および平面実測図の追記作業を急いだ。また、S D01東肩を挟むように堆積する砂層の掘削を行った。S D01土手北壁の土層断面図における第6層に相当するものと思われ、高勾配様式軒瓦片が出土した。

Ⅰ区西壁にかかる暗渠の土層断面を分層した。基本土層の第4層上面から掘り込まれており、その状況を撮影した。さらにⅠ区東壁・南壁土層を分層し、縮尺1/20で南壁土層断面図の作成を開始した。

午前に、トライやるウィークの芦屋市立精選中学校の生徒2名が、細井課長補佐の引率で来跡した。

6月9日（火）曇り

近畿地方の梅雨入りが発表された。本日はピットの記録作業、平面実測図への追記作業を中心に、Ⅰ区南壁土層断面図の作成も継続して行った。

同時に、第2遺構面の検出に向けて、人力掘削を進めた。第1遺構面で記録を完了していない遺構とS B01の範囲を鳥状に残しながら、第7層上面を10cm程掘削した。



第25回 調査風景 (6月12日)

出土遺物は非常に少ない。

午後に藤川祐作氏が来跡した。また、街路課足立主査と今後予定される月若谷跡第98地点の確認調査について、打ち合せを行った。

6月10日(水) 雨

梅雨入り後、早速の降雨日となった。発掘作業を中止し、コンテナハウスで記録図面・写真の諸整理および遺物洗浄を行った。

6月11日(木) 曇りのち晴れ

本日は、昨日の降雨で溜まった雨水の排出作業から開始した。その後、ビットの記録作業、平面実測図への追記作業を急ぎ、本日でS B01を除く第1遺構面の記録が完了した。そこで本格的に第2遺構面の精査を行い、遺構を抽出した。

I区南東部において、堅穴住居跡と推測される大型の遺構を抽出した。全容は不明瞭ながら、隅隅方形を呈するものと思われる。

6月12日(金) 曇りのち晴れ

S B01の記録作業を完了させ、完掘状況の撮影を行った。その後、S B01の基盤層である第7層を掘削し、第2遺構面を抽出した。堅穴住居跡(S H01)、ビット、土坑の抽出状況を撮影後、目測による縮尺1/50の遺構配置略図と、光波測距器による縮尺1/200の平面実測図を作成し始めた。

抽出したビットの大半は、第1遺構面で見逃していたもののようである。順次、記録作業を進め、一部は完掘まで行った。S H01は、土層観察用土手を十字に設定した。また、縮尺1/10でI区西壁の暗渠の土層断面図の作成に取りかかった。

午後に藤川祐作氏が来跡した。

6月15日(月) 晴れ

第2遺構面は、S H01を抽出した南東部付近に遺構が偏在している。本日からS H01の覆土を掘削し始め、周辺に位置するビット・土坑の諸記録を進めた。

ビットには柱痕を伴うもの、底面に礎板石を据えたものも確認され、掘立柱建物の一部になると考えられる。また、遺構配置略図および平面実測図は随時、追記を行った。I区西壁の暗渠の土層断面図の作成も継続した。

午前中に畑井課長補佐の引率で、トライヤのウィークの戸屋立山手山中学校の生徒2名が見学に訪れた。午後は



第26回 調査風景 (6月18日)

松田和義氏が来跡した。

6月16日(火) 晴れ時々曇り

S H01の掘削とビットの諸記録、および平面実測図への追記作業を継続した。島田組が新たに基準測量杭を打設し、国土地理院の投影と標高値の移設を行った。

S H01は床面の検出状況と、土層観察用土手の断面を撮影した。その後、土手東壁および南壁の土層断面を縮尺1/20で図化した。S H01の出土遺物には、タタキ目をも有する弥生土器片が含まれている。I区西壁は、暗渠の土層断面図が完成した。また、I区東壁・南壁側溝をさらに掘り下げ、東壁・南壁を清掃し、分層を仕上げた。

6月17日(水) 晴れ時々曇り

梅雨入り直後の降雨日以降、一週間は天候の崩れがない。ビットの記録作業および平面実測図の追記・レベルリングと並行して、S H01の調査が中心となった。

覆土を完全に除去した後、土層観察用土手の断面を改めて撮影し、土層断面図に追加実測・註記を行った。その後、土層観察用土手を除去して床面の精査を行い、ビット2基、土坑1基を抽出し、これらを半掘した。また、写真撮影に備えてI区東壁・南壁を清掃した。縮尺1/20で、I区東壁の土層断面図を作成し始めた。

午後に藤川祐作氏が来跡した。

6月18日(木) 晴れ

第2遺構面の全景撮影に向け、朝から遺構面の清掃と白線引きを行った。I区西側に3段の撮影用足場を組み立て、午前11時過ぎより撮影を開始し、午前中に地上からの遺構撮影まで終了させた。山本氏によるビデオ撮影も行われた。

午後からは平面実測図の追記とレベルリング、I区東壁の土層断面図作成を継続した。途中、I区東壁・南壁土層の撮影も行った。また、K G05を掘り下げ、埋設された土管の検出状況を撮影した。

本日、戸屋庵寺遺跡(第115地点)で、市民向けに発掘調査現場が公開された。森岡主査の案内で、本遺跡にも多くの市民が見学に訪れた。

6月19日(金) 晴れ

来週早々からのI区堀め戻しに向け、第2遺構面の記録作業を急いだ。I区東壁・南壁土層を改めて撮影した後、S H01のビット・土坑の記録および平面実測図の追記・レベルリングを行い、S P 68・69の礎板石の断面図を

縮尺1/10で作成した。

I区東壁・南壁の土層断面図は追加実測と修正作業を行い、土層註記は次週に残された。また、S D01東側の掘削、S H01床面の掘り下げ、S P68・69西側の断ち割りを行い、遺構や遺物の有無を確認した。

6月22日(月) 雨

久しぶりに雨天となった。作業を中止し、午前中はコンテナハウスで写真整理、午後からは三条文化財整理事務所へ、記録図面の整理を行った。

6月23日(火) 晴れのち曇り

本日でI区の調査を終了した。まず、東壁・南壁の土層断面図に追加実測し、土層註記を行った。次に、東壁・南壁土層に対応させる形で、西壁の暗渠の土層断面図に註記を行った。また、S P68の北側を断ち割ったが、新たな礎板石などは確認されなかった。

午後からはI区の埋め戻しを開始する一方、I区の西・北側にII・III区を設定した。I区の埋め戻しは、S D01西側・S B01周辺を残して、本日でほぼ完了させた。また、II・III区の調査に向けて、仮の測量杭を2本移設した。光波測距器を用いて、調査地の隣地境界を計測した。

6月24日(水) 曇りのち晴れ

I区北側に設定したIII区から機械掘削を開始し、第1遺構面である第7層上面を検出した。III区北壁に沿って、月若遺跡第81地点の南壁ラインが確認でき、その掘削を始めた。また、昨日移設した仮の測量杭に標高値を設定した。

本日は、本調査地点から北西に位置する、月若遺跡第98地点の確認調査も行った。確認調査には街道課足立主査が立ち会い、森岡主査・竹村学芸員・白谷陽氏が検証した。

午後に藤川祐作氏・松田氏が来訪した。

6月25日(木) 晴れのち曇り

I区西側に設定したII区の機械掘削に着手し、第7層上面を検出した。また、西壁側溝を掘削した。

II区は第1遺構面の精査を行い、I区S B01およびS D01の続きを含むピットと溝を検出した。目測による縮尺1/50の遺構配置略図を作成し、各々に遺構番号を付して、段下りでまとめた。

6月26日(金) 晴れ時々曇り

本日でII・III区の機械掘削が完了した。II区は機械掘削の後、人力掘削を行って第1遺構面を検出し、ピットや溝をわずかに確認した。II区を南北に走るS D05は、月若遺跡第81地点のS D203から続くものと考えられる。南壁側溝を掘削し、西壁側溝もさらに掘り下げた。目測による縮尺1/50の遺構配置略図を作成した。また、光波測距器による縮尺1/20の平面実測図を一部作成した。

II区は、仮の測量杭を2本打設した後、ピットと溝の記録作業を開始した。土層断面の撮影、縮尺1/10の土層断面図の作成を順次行った。また、S D01は分層掘削に向けて、土層確認のために、まず北端と南端の掘削を開始した。

6月29日(月) 曇りのち雨

非常に不安定な天候で、時折、雨が降る中での作業となった。本日は、雨足が強くなった午後4時頃で作業を

中止した。朝から島田組が、II・III区に基準測量杭を打設し、国土座標の投影と標高値の移設を行った。縮尺1/20の平面実測図を作成した。

II区は遺構面の精査を続ける一方、西壁・南壁側溝の掘り下げ、ピットの記録作業を行った。S D05の南部(近代井戸掘削の北側)を部分的に掘削し、便宜の上に層(白黄色砂層)・中層(灰色シルト層)・下層(灰色シルト層と暗黄色砂層)に分けて、出土遺物を取り上げた。わずかな掘削範囲ながら、弥生土器片が大量に出土した。

II区はピットの記録作業を進め、S B01を構成するピットの検出状況を撮影した。S D01は、先行して掘削した北端と南端の分層を行った後、分層掘削に着手した。I～III層を掘削し、礫の検出状況の撮影を行った。

6月30日(火) 雨時々曇り

本日も非常に不安定な天候であり、作業を中止した。コンテナハウスで図面整理や遺物洗浄、ネーミング等を行った。

朝、III区北壁が崩落しているのを確認した。特にS D01以西が著しい状況であり、早急な対策が必要である。

7月1日(水) 曇り時々雨

今週に入り梅雨空が続いている。天候は不安定であったが、III区北壁の復旧作業を行った。土砂を除去し、まずは崩落の著しいS D01以西に単管とコンパネによる土留めを施した。

III区北壁の復旧に合わせ、本日はIII区のみ作業を進めた。縮尺1/20の東壁土層断面図を作成し、平面実測図はレベリングまで行った。さらに、ピットと溝(S D03)の記録作業を進めるとともに、S D01も完結した。

午後3時過ぎに、生涯学習課細井課長補佐・街道課足立主査・梅本課員が来訪し、月若遺跡第98地点の本発掘調査に関する打ち合せを行った。

7月2日(木) 曇り

本日の作業は、II区で縮尺1/20の南壁土層断面図を作成し、S D05の北部と南部で先行して、部分的に断ち割りを進めた他は、III区に重点をおいて調査を行った。

ピットの記録作業を継続する一方、第1遺構面の清掃と白線引きを行い、午前中にIII区第1遺構面全景およびS D01の完結状況を撮影した。午後からは、平面実測図の追記と修正作業に取りかかり、レベリングを行った。遺構の記録が完了した範囲から、第2遺構面の検出に向けて、人力掘削を開始した。また、昨日と同様の土留めをS D01以南のIII区北壁にも施し、今後の壁崩落に備えることとした。

7月3日(金) 曇りのち雨

II区は第1遺構面の調査を進めた。遺構面精査を行い、南端で新たに土坑2基を検出した。S D05は、中央部の埋土を一部先行して除去し、北部の埋土を掘削した。土器は破片ばかりで、完形品は見当たらない。また、平面実測図の作成を再開した。

III区はまず、S D01に関して平面実測図の追記とレベリングを行った。S D01の底面において、地炭灰跡である砂眼を2条検出した。S D01以東は、第2遺構面の調査に着手した。溝(S D03)を確認し、遺構検出状況を撮影した。遺構掘削を行い、全景を撮影した。また、III区東壁の土層を撮影し、土層断面図に追加実測を行った。



第27図 調査風景（7月6日）

7月6日（月）曇りのち晴れ

Ⅱ区はS D05の断ち切りを進め、南部断ち切りの北壁土層を撮影し、縮尺1/20で土層断面図を作成した。また、S K08十手の北壁土層断面図を縮尺1/10で記録した他、平面実測図の追記とレベルングを行った。

Ⅲ区では、北壁にかかるS D05の土層を撮影し、縮尺1/20で土層断面図を作成した。S D01西側付近で確認した砂層を断ち切り、撮影の後、土層断面図を縮尺1/10で作成した。また、第2遺構面の平面実測図を作成し、レベルングを行った。

7月7日（火）曇り時々晴れ

Ⅱ区は第1遺構面の全景撮影に向けて、記録作業を進めた。S D05南部断ち切りの北壁土層断面図を完成させ、S D05を完結した。また、平面実測図の追記を行った。第1遺構面の清掃と白線引きの後、Ⅲ区西部（S D01以西）と合わせて、午後3時半頃より、全景を撮影した。

Ⅲ区は、東壁土層断面図に追加実測を行い、Ⅰ区東壁土層との整合を図った。また、Ⅲ区のS D05北側断ち切りの土層断面図を完成させた。平面実測図に追記とレベルングを行った。S D01以東は、第2遺構面の調査が完了したため、埋め戻しを開始した。

午後に、街路課足立主査・梅木課員と現場撤収に関する打ち合わせを行った。また、藤川祐作氏の来訪があった。

7月8日（水）雨のち曇り

作業開始直前からの降雨により、午前中はコンテナハウスで待機し、室内作業を行った。ただし、重機によるⅢ区東部の埋め戻しは、朝から作業を進めた。午後からは、Ⅱ区で第1遺構面の記録作業を継続し、平面実測図に追記とレベルングを行った。

Ⅲ区西部は、平面実測図に追記とレベルングを行って、第1遺構面の記録を急いだ。その後、人力掘削によって第2遺構面を検出し、精査を行った。土坑を1基確認し、完掘の後、第2遺構面全景を撮影した。

午後に松田氏が来訪した。また、市民の見学があった。

7月9日（木）曇り

Ⅱ区第1遺構面の記録作業を中心にを行った。重複するS K08の記録のために一部掘り残していたS D05埋土の掘削に取りかかった。また、平面実測図に追記とレベルングを行い、S D01土層断面図を縮尺1/20で作成した。こうした記録作業が完了した後、第2遺構面の検出に向け、人力掘削を開始した。

本日で、月若遺跡第98地点の機械掘削（盛土除去）

を開始した。午前中、生涯学習課竹村学芸員・平山囃託、街路課足立主査・梅木課員が立ち会い、掘削範囲を設定した。午後から、現地表下約80cm（月若遺跡第100地点の第4層上面に相当）辺りまで掘削していった。

午後に榊井課長補佐と月若遺跡第98地点に関する打ち合わせを行った。市民の見学があった。

7月10日（金）曇りのち雨

Ⅱ区は、第2遺構面を検出するために人力掘削を継続した。また、西壁側溝を掘り下げた。Ⅲ区西部は、第2遺構面の平面実測図を作成した。本日は、午前10時頃からの降雨により、午後の作業を中止した。

午後1時より、生涯学習課榊井課長補佐・竹村学芸員・平山囃託・坂田囃託、街路課足立主査・梅木課員、マツダ建設増元氏・各務氏が立ち会い、月若遺跡第98地点の調査開始の打ち合わせを行った。

7月13日（月）晴れのち曇り

日中は晴れ間が広がり、非常に蒸し暑い中での作業となった。本日は、月若遺跡第98地点の盛土除去を継続し、石垣の撤去を開始した。

本地点のⅡ区は、第2遺構面を精査し、ビット・土坑を各1基と溝1条を検出し、遺構を掘削した。清掃と白線引きの後、Ⅲ区西部と合わせて、第2遺構面の全景を撮影した。この際、西壁土層の撮影も行った。全景撮影の後、遺構の記録作業と南壁土層断面図に追加実測を行った。また、第2遺構面の平面実測図を作成し始めた。Ⅲ区西部は、第2遺構面の平面実測図を完成させた。

7月14日（火）晴れ

本日も蒸し暑く、厳しい陽射しの中で作業を行った。月若遺跡第98地点は、盛土除去と石垣撤去が完了し、近日開始する本発掘調査に備えた。

本地点のⅡ区は、第2遺構面の平面実測図に追記とレベルングを行う一方、西壁土層の略断面図を作成した。また、K G05に埋設された土管の一部を取り上げ、Ⅱ区の各壁面にかかる遺物も取り上げた。午後より、Ⅰ区とⅢ区西部の埋め戻しを開始し、現場撤収に向けた諸準備を進めた。

7月15日（水）晴れ

調査区の埋め戻しを継続する傍ら、調査地の未計測範囲を光波測距器で記録した。また、器材等の撤収作業を行い、午後に三条文化財管理事務所へ器材・荷物を搬入した。

午前中、月若遺跡第98地点の本発掘調査に向けた協議があり、生涯学習課榊井課長補佐・竹村学芸員・平山囃託、街路課足立主査・梅木課員、山手幹線戸屋Ⅳ工事事務所半田氏・福島氏、島田組小枝氏、マツダ建設増元氏・各務氏、西本建設福田氏が臨席した。

7月16日（木）曇り時々雨

コンテナハウス等の撤収作業を行った。

7月21日（火）雨

本日は雨天であったが、調査地のネットフェンス等を撤収した。その後、マツダ建設が月若遺跡第98地点の調査準備として、新たにネットフェンスを設置した。

本日で、月若遺跡第100地点の発掘調査を終了した。

第4節 基本土層

月若遺跡第100地点の調査区では、北側に隣接する月若遺跡第81地点の調査区に連続させたために、北壁土層のすべては、その埋め戻し土となった。そこで、調査区の南壁・東壁・西壁において土層の観察を行い、南壁と東壁の土層断面図を作成した（第28図、図版5・24）。なお、南壁については、Ⅰ区とⅡ区のそれぞれで土層断面図を作成したが、Ⅱ区を機械掘削する際、その南壁がⅠ区の南壁よりも約30cm南方にずれてしまったため、両区の土層断面図の合成に整合性が保たれなかった。そのため、南壁の土層断面図については、Ⅰ・Ⅱ区を分けて提示している（第28図）。

基本土層は、第1層から第12層まで設定した。それらを時期別で大別すると、第1層は、近現代の堆積土である。第2・3層は、近世の耕作土と考えられる。第4～5b層は、古代末～中世の耕作土である。第6層は、古代の整地土である。第7層は、弥生時代後期～古代の居住域に伴う土壌層である。第8～12層は、弥生時代後期以前の自然堆積層である。なお、第1～4層については、機械掘削で除去したため、性格の詳細は不明である。

次に、各土層と遺構面の関係について述べる。第1遺構面は、第6層上面で検出した遺構面である（第29図）。なお、発掘調査時、当遺構面は「第6層上面」と呼称していた。

第2遺構面は、第7層上面で検出した遺構面である。なお、発掘調査時、当遺構面は「第1遺構面」と呼称していた。さらに、発掘調査時には第8a層上面でも遺構を検出し、「第2遺構面」と呼称した。その後、当遺構面に伴う遺構の時期を検討したところ、発掘調査時の「第1遺構面」で検出できていなかった遺構が含まれていることが判明した。そこで、本書では発掘調査時の「第1遺構面」と「第2遺構面」で検出された遺構を図上で合成して、第2遺構面として報告することとする（第31図）。

第28図に示した土層註記では、土層番号は上層から下層に向かって順にアラビア数字を付した。また、それらの中で、土質や土色等に若干の差違が観察されたものには、アラビア数字の後にアルファベットの小文字を付けて細分した。一方、遺構の埋土等、部分的に認められる土層については、円囲いのアラビア数字で通し番号を付けた。土層番号に続けて、色調、粒度、包含物、性格等を順に記した。色調は『新版標準土色帖』2000年後期版（農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所色票監修）を用いて、客観化を図った。

第1層は、灰黄褐色（10YR4/2）砂質土である。現表土および近現代の盛土である。近現代遺構の埋土も含まれる。

第2層は、灰黄褐色（10YR6/2）砂質土である。近世～近代の耕作土と考えられる。

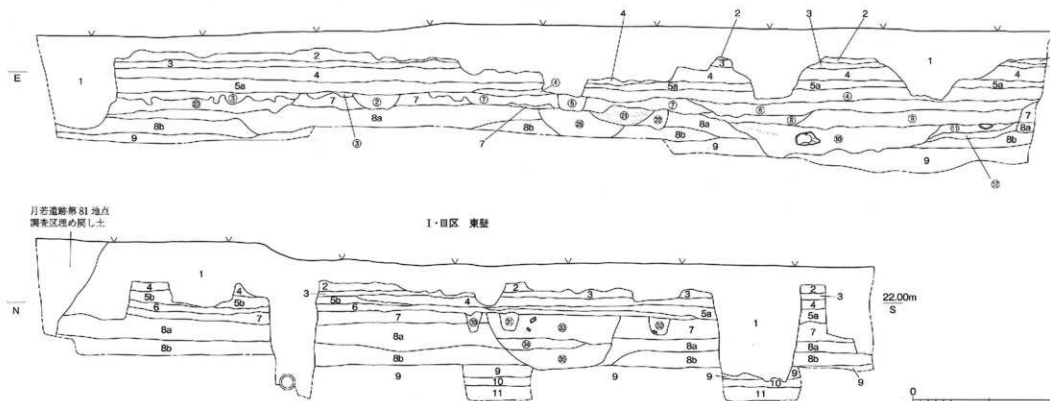
第3層は、にぶい黄橙色（10YR7/2）砂質土である。近世の耕作土と考えられる。

第4層は、にぶい黄橙色（10YR6/4）砂質土である。褐色を呈する径1～2cmのシルトブロックを多く含む。中世の耕作土と考えられる。

第5層は、第5a層と第5b層に二分した。両層ともに古代末～中世の耕作土と考えられる。第5a層は、にぶい黄褐色（10YR5/4）砂質土である。茶色を呈する径1～2cmの砂質土ブロックを多く含む。第5b層は、にぶい黄橙色（10YR6/3）砂質土である。褐色を呈する径1～2cmのシルトブロックを多く含む。当層下面を第1遺構面として検出した。

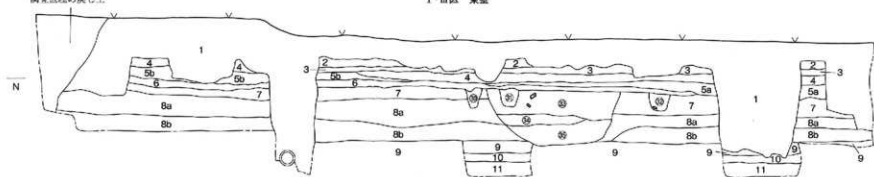
第6層は、褐色（10YR4/6）砂質土である。径1～2cmのシルトブロックを多く含む。古代の整地土

I区 南壁



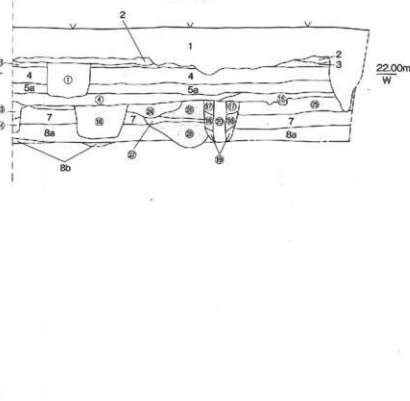
月形遺跡南3地点
調査区域の概し

I-Ⅱ区 東壁



- 1 灰青褐色 (10YR4/2) 砂質土。シルト～細粒砂。瓦片・煉瓦片などを含む。現地表および近現代の盛土・近現代遺構の盛土。
- 2 灰青褐色 (10YR4/2) 砂質土。シルト～細粒砂。近世～近代の耕作土と考えられる。
- 3 土壌褐色 (10YR7/2) 砂質土。シルト～細粒砂。近世の耕作土と考えられる。
- 4 土壌褐色 (10YR6/4) 砂質土。シルト～細粒砂。近1～2cmの褐色シルトブロックを多く含む。中世の耕作土と考えられる。
- 5a 土壌褐色 (10YR5/4) 砂質土。シルト～細粒砂。近1～2cmの褐色砂質土ブロックを多く含む。古代末～中世の耕作土と考えられる。
- 5b 土壌褐色 (10YR6/3) 砂質土。シルト～細粒砂。近1～2cmの褐色シルトブロックを多く含む。古代末～中世の耕作土と考えられる。当面下層を第1遺構面として検出した。
- 6a 褐色 (10YR4/6) 砂質土。シルト～細粒砂。近1～2cmのシルトブロックを多く含む。古代の盛土と考えられる。当面下層を第2遺構面として検出した。
- 7 褐色 (10YR3/1) 砂質土。シルト～細粒砂。弥生時代前期～古代の居住跡に由来する土壌である。当面下層を第2遺構面として検出した。
- 8a 褐色 (10YR3/2) 砂質土。シルト～細粒砂。弥生時代中期～後期の居住跡に由来する土壌である。当面下層を第2遺構面として検出した。
- 8b 灰青褐色 (10YR4/4) 砂。弥生時代後期以前の居住跡もしくは土石混じり堆積物と考えられる。遺物の包含は確認されていない。
- 9 褐色 (10YR2/1) 粘質土。粘土～シルト。土壌化している。遺物の包含は確認されていない。
- 10 褐色 (10YR3/2) 粘質土。粘土～シルト。土壌化している。遺物の包含は確認されていない。
- 11 褐色 (10YR1/1) 粘土。粘土。近10cm以下の垂直層を含む。土壌化している。遺物の包含は確認されていない。
- 12 褐色 (10YR2/2) 硬泥じり粘性砂質土。粘土～細粒砂。近10cm以下の垂直層を多く含む。土壌化している。遺物の包含は確認されていない。
- ① 褐色 (10YR6/1) 砂質土。シルト～細粒砂。近3cm以下の垂直層を含む。遺物の層上。
- ② 褐色 (10YR3/2) 砂質土。シルト～細粒砂。近1cm程度の褐色シルトブロックを含む。ビットの層上。
- ③ 土壌褐色 (10YR7/2) 砂質土。シルト～細粒砂。近5cm以下の褐色砂質土ブロックを含む。土壌層・瓦片を含む。耕作時の層上。
- ④ 土壌褐色 (10YR5/3) 砂質土。シルト～細粒砂。土壌層を含む。基本土層第5層に相当する。S D01の層上。
- ⑤ 灰青褐色 (10YR4/2) 砂質土。シルト～細粒砂。下部に近3cm程度の褐色砂質土ブロックを含む。土壌層を含む。ビットの層上。
- ⑥ 灰青褐色 (10YR4/2) 砂質土。シルト～細粒砂。下部に近3cm程度の褐色砂質土ブロックを含む。土壌層を含む。ビットの層上。
- ⑦ 灰青褐色 (10YR4/2) 砂。細粒砂～粗粒砂。土壌層を含む。S D01の層上。
- ⑧ 灰青褐色 (10YR3/2) 砂質土。シルト～細粒砂。第38回のS D01層上第2層と対応する。
- ⑨ 灰青褐色 (10YR3/2) 砂質土。シルト～細粒砂。第38回のS D01層上第3層と対応する。
- ⑩ 灰青褐色 (10YR3/2) 砂質土。シルト～細粒砂。第38回のS D01層上第4層と対応する。
- ⑪ 灰青褐色 (10YR3/2) 砂。細粒砂～粗粒砂。近30cm以下の垂直層～円筒を含む。ラミナが観察にみられる。下部に近3cm以下の垂直層～円筒を含む。第38回のS D01層上第5層と対応する。
- ⑫ 褐色 (10YR2/2) 砂質土。シルト～細粒砂。第38回のS D01層上第5層と対応する。

Ⅱ区 南壁



- ⑬ 土壌褐色 (10YR6/3) 砂。細粒砂～粗粒砂。第38回のS D01層上第6層と対応する。
- ⑭ 褐色 (10YR3/2) 砂質土。シルト～細粒砂。部分的に細粒砂のラミナがみられる。第38回のS D01層上第3層と対応する。
- ⑮ 褐色 (10YR2/2) 砂質土。シルト～細粒砂。第38回のS D01層上第5層と対応する。
- ⑯ 灰青褐色 (10YR5/2) 砂質土。シルト～細粒砂。近1～3cmの灰青褐色砂質土ブロックを多く含む。下面に耕作跡と考えられる面がみられる。
- ⑰ 褐色 (10YR5/1) 砂質土。シルト～細粒砂。近1cm程度の褐色を呈した灰が斑状にみられる。土壌層を含む。S K07の層上。
- ⑱ 褐色 (10YR5/1) 砂質土ブロック直じり砂質土。シルト～細粒砂。近5cm程度の褐色 (10YR2/1) 砂質土ブロックを含む。土壌層片を含む。S P97の層上。
- ⑲ 褐色 (10YR3/1) 砂質土ブロック直じり砂質土。シルト～細粒砂。近5cm程度の褐色 (10YR2/1) 砂質土ブロックを含む。S P97の層上。
- ⑳ 土壌褐色 (10YR4/1) 砂質土。シルト～細粒砂。S P97の層上。
- ㉑ 土壌褐色 (10YR6/4) 粘土ブロック直じり砂質土。シルト～細粒砂。近10cm程度の褐色 (10YR6/4) 粘土～シルトブロックを含む。近15cm程度の土壌とみられる。S P97の層上。
- ㉒ 浅黄褐色 (10YR8/4) 砂。細粒砂～粗粒砂。近4cm以下の垂直層～円筒を含む。ラミナがみられる。S D03の層上。
- ㉓ 灰青褐色 (10YR4/2) 砂質土。シルト～細粒砂。ビットの層上と考えられる。
- ㉔ 褐色 (10YR2/1) 砂質土。シルト～細粒砂。第38回のS D01層上第7層と対応する。
- ㉕ 褐色 (10YR4/1) 粗粒砂質土。シルト～粗粒砂。近1cm程度の灰褐色の斑状にみられる。弥生土層片を含む。S K08の層上。
- ㉖ 灰青褐色 (10YR4/2) 粗粒砂質土。シルト～粗粒砂。弥生土層片を含む。第38回のS D05南部所も刺り第2層と対応する。落ち込みの層上。
- ㉗ 褐色 (10YR2/2) 砂質土。シルト～粗粒砂。近1cm程度の褐色を含む。マンガンが多くみられる。炭化物を含む。第38回のS D05南部所も刺り第2層と対応する。
- ㉘ 褐色 (10YR5/1) 粗粒砂。シルト～粗粒砂。ラミナがみられる。弥生土層片を含む。第38回のS D05南部所も刺り第2層と対応する。
- ㉙ 褐色 (10YR1/1) 粗粒砂直じり粘性砂質土。粘土～粗粒砂。近5cm以下の垂直層を含む。植物の根がみられる。第38回のS D05南部所も刺り第2層と対応する。
- ㉚ 灰青褐色 (10YR4/2) 砂質土。シルト～粗粒砂。ビットの層上。
- ㉛ 灰青褐色 (10YR4/2) 砂質土。シルト～粗粒砂。ビットの層上。
- ㉜ 灰青褐色 (10YR4/2) 砂質土。シルト～粗粒砂。ビットの層上。
- ㉝ 褐色 (10YR3/2) 硬泥じり砂質土。シルト～細粒砂。近10cm以下の垂直層を含む。遺物の層上。
- ㉞ 褐色 (10YR3/2) 砂質土。シルト～粗粒砂。遺物の層上。
- ㉟ 土壌褐色 (10YR4/3) 砂質土。シルト～細粒砂。炭化物を含む。遺物の層上。

第28図 調査区土層断面図 1/50

と考えられる。当層上面が第1遺構面である（発掘調査時の「第6層上面」）。また、当層下面を第2遺構面として検出した。

第7層は、黒褐色（10YR3/1）砂質土である。弥生時代後期～古代の居住域に伴う土壌層と考えられる。当層上面が第2遺構面で、発掘調査時に「第1遺構面」と呼称していたものである。そして、当層下面は発掘調査時の「第2遺構面」である。

第8層は、第8a層と第8b層に二分した。第8a層は、黒褐色（10YR3/2）粗粒砂混じり砂質土である。第8b層が土壌化したものと考えられる。遺物の包含は確認されていない。当層上面は、発掘調査時の「第2遺構面」である。第8b層は、浅黄褐色（10YR8/4）砂である。弥生時代後期以前の洪水もしくは土石流に伴う堆積物と考えられる。遺物の包含は確認されていない。

第9層は、黒色（10YR2/1）粘質土である。土壌化している。遺物の包含は確認されていない。

第10層は、黒褐色（7.5YR3/2）粘質土である。土壌化している。遺物の包含は確認されていない。

第11層は、黒色（10YR1.7/1）粘土である。土壌化している。遺物の包含は確認されていない。

第12層は、黒褐色（10YR2/2）礫混じり粘性砂質土である。径15cm以下の亜角礫を多く含む。土壌化している。遺物の包含は確認されていない。

次に主な遺構についてみると、第④・⑥～⑭層は古代の大溝であるSD01内の堆積土である。当遺構は、第7層上面から、掘り込まれている。

第⑭層は、弥生時代後期後半の竪穴住居跡であるSH01の覆土である。当遺構は、第7層上面から、掘り込まれている。

第⑮～⑰層は、弥生時代後期後半の溝であるSD05の堆積土である。当遺構は、第7層上面から、掘り込まれている。

第5節 遺構

I区では、第1～4層上部までを機械掘削し、第4層下部から人力で掘削した。各層の境界面を遺構面として捉え、遺構の検出に努めた。発掘調査時には、第6層上面を「第6層上面」、第7層上面を「第1遺構面」、第8a層上面を「第2遺構面」として検出した。しかし、発掘調査時の「第2遺構面」については、本来、「第1遺構面」に伴う遺構であるにもかかわらず、検出時に見逃されていたものが含まれていた。そこで、本書では、発掘調査時の「第1遺構面」と「第2遺構面」を合成した平面図を作成し、それを一括して第2遺構面と捉え直して報告することとする（第31図）。また、発掘調査時の「第6層上面」と呼称していた遺構面については、第1遺構面と呼びかえて報告する（第29図）。

各遺構面の時期は、第1遺構面が中世～近現代、第2遺構面が弥生時代後期後半～中世である。

なお、II区では、第1～5a層を機械掘削し、それより以下を人力で掘削した。人力掘削では、各層の境界面を遺構面として捉え、I区の発掘調査時の「第1遺構面」「第2遺構面」に対応する遺構面を検出した。

III区では、第1～6層を機械掘削し、それ以下を人力で掘削した。人力掘削では、各層の境界面を遺構面として捉え、I区の発掘調査時の「第1遺構面」「第2遺構面」に対応する遺構面を検出した。

1. 第1遺構面

第1遺構面は、第5b層に覆われ、第6層を基盤層とする遺構面である。遺構としては、近現代の遺構(KG01~13)、近世の暗渠1条、中世のピット7基(SP01~07)、埴痕16条が検出された。

(1) 近現代の遺構

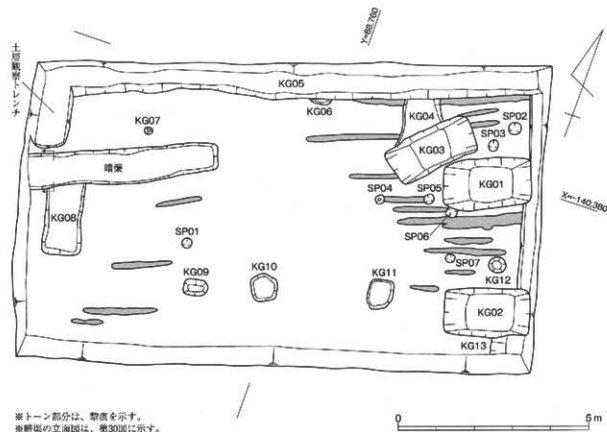
近現代の遺構は、本来、第2層上面で検出されるべきものであるが、第6層上面において下部が残存していた比較的深い近現代遺構を当遺構面の中で報告する。

本調査地点付近の土地利用の変遷について、地形図から読み取ると、大日本帝国参謀本部陸軍部測量局による明治18年(1885)測量の2万分の1板製地形図「西宮」では水田となっており、大日本帝国陸地測量部による大正12年(1923)測図、昭和7年(1932)要部修正の1万分の1地形図「芦屋」では宅地となっている〔清水編1995〕。

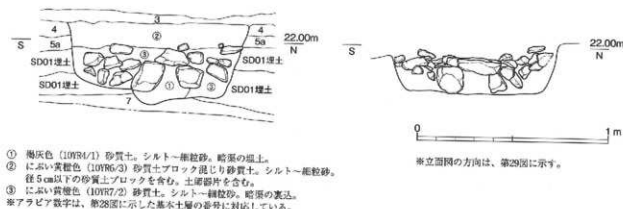
このような中、I区で検出された近現代の主要な遺構としては、土坑4基(KG01~04)、埋設管1条(KG05)がある(第29図、図版25)。

土坑の内、KG01~03は、おおそ長方形を呈する大型の土坑で、それぞれの形態は比較的良好に保たれている。規模は、長辺2.3m、短辺1.3m程度で、深さは現地表面から0.8~1.5m程度である。縦断面は桶状を呈しており、KG03では底面の一部にショベルカーのバケツの爪痕と考えられる痕跡が認められた。さらに、同遺構の中からは長さ約1.3m、幅約64cm、厚さ約65cmを測る巨石が検出され、底面に接していた(図版25)。KG03の状況から、KG01・02もショベルカーによって掘削されたものと推定される。

KG04は南部をKG03に壊されているため、全容は不明である。残存部は不整な長方形で、規模は一



第29図 第1遺構面平面図 1/100



第30図 暗渠土層断面図・立面図 1/20

辺1m以上を測り、現地表面からの深さは約70cmと推測される。埋土からガラス瓶やプラスチック製品が多数出土しており、戦後の遺構であると判断される。

K G05は土管を埋設する東西方向にのびる溝で、幅90cm前後を測る(図版25)。検出長は約17.4mである。土管の埋設深度については、土管上端の高さが検出された最西部で標高21.038m、最東部で21.072mとなっており、東側が3.4cm高くなっている。なお、土管の法量は、長さ65.0cm、外径19.0～19.5cm、内径15.0～16.0cm、受口の外径24.4cm、内径20.2cmを測るものである。

(2) 暗渠

I区北西部で、石組の暗渠が検出された(第29・30図、図版26)。北東端部が検出され、真北から64°東偏して、北東から南西へのびる。検出長は約5.1m、掘形の幅は87～95cmを測る。石組は側壁一段の上に蓋石を被せて、内側に幅約10cm、深さ約20cmの溝ができるように構築されている。石材には、径10～20cm程度の亜角礫～円礫が用いられている。

時期については、遺物が伴出していないため不明であるが、基本土層第3層に覆われていることから、近世のものと考えられる。

(3) ビット

ビットが7基検出された(S P01～07)。いずれも平面が円形を呈しており、直径は20～30cm程度である(第29図、図版25)。層序や出土遺物などから、中世のものと考えられる。なお、S P02・03・05は後述するS B02に伴う柱穴である。

(4) 犁痕

真北から61°～72°東偏して、北東から南西へのびる犁痕が16条検出された(第29図、図版25)。方向は、おおよそ現在の土地割と一致している。幅は20cm程度である。時期を判別できる遺物はないが、第6層上面で検出されていることから、中世の耕作に伴うものと考えられる。

2. 第2遺構面

先述したとおり、当遺構面は、第7層上面と第8a層上面でそれぞれ検出された遺構面を図上で合成し

たものである(第31図、図版4・27・28)。当遺構面からは、竪穴住居跡1棟(S H01)、掘立柱建物2棟(S B01・02)、多数のピットおよび土坑、溝5条(S D01~05)、落ち込み1基、地震痕跡(砂版)が検出されている。

検出された遺構の時期は、弥生時代後期後半~中世にかけてのものである。

(1) 竪穴住居跡

調査区南東部において、竪穴住居跡1棟(S H01)が検出された(第32図、図版31)。南部および東部が調査区外となっているため全様は不明である。平面形態は隅四方形を呈し、北東隅の一部と北西隅が検出されている。主軸は真北より16°西偏する。北辺が3.1m以上、西辺が2.1m以上を測り、検出面からの深さが14cmを測る。

覆土は3層に細分でき、黒褐色~黒色砂質土を呈している。覆土には、弥生時代後期後半頃の土器の細片が若干含まれている(第41図7)。

床面では、ピット2基(P 1・2)と土坑1基(K 1)が検出されている。P 1は楕円形のピットで長径約46cm、短径約42cm、深さ約20cmを測る。埋土は黒色を呈しており、弥生土器片を含む。P 2は略円形のピットで長径約20cm、短径約17cm、深さ約20cmを測る。埋土はP 1と近似する。遺物は出土していない。

K 1は略円形の土坑で長軸約58cm、短軸約50cm、深さ約26cmを測る。埋土は黒褐色砂質土で、炭化物や焼土ブロックを多量に含む。このことから、当土坑の機能を炉と推定することができる。

なお、S P35・66・74はS H01の覆土との重複関係から、S H01より新しいことが確認されている。

(2) 掘立柱建物

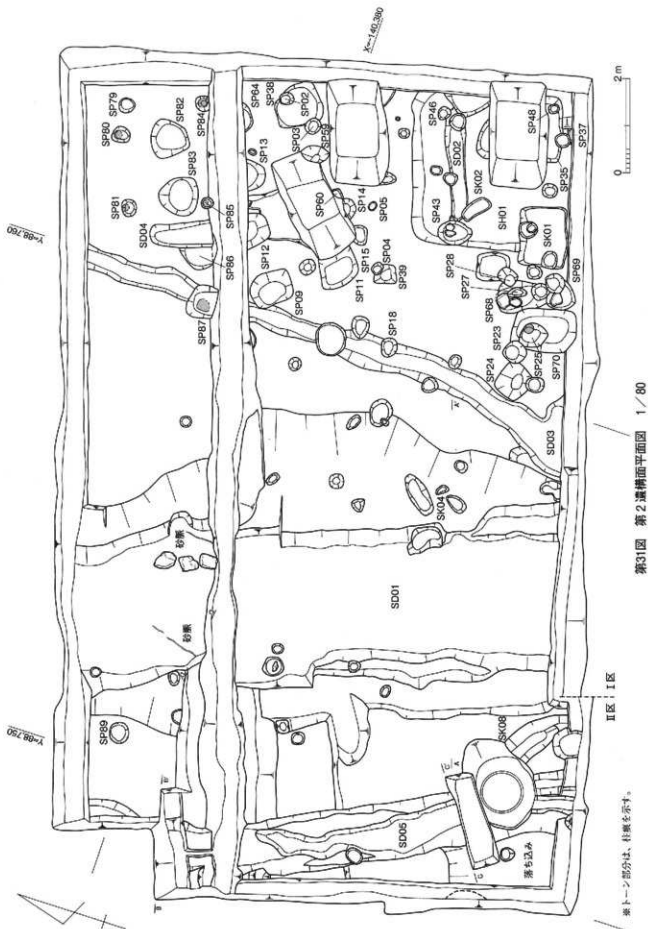
第2遺構面では、弥生時代から中世のピットが多数検出されている。これらの中には、掘立柱建物を構成するものも含まれると推測されるが、現地において柱穴の配列を確認できた掘立柱建物は2棟のみである(S B01・02)。なお、ピットから掘立柱建物の柱穴を検討するにあたっては、各ピットの位置や形態、埋土の様相、底面の標高、伴出遺物などを分析した。

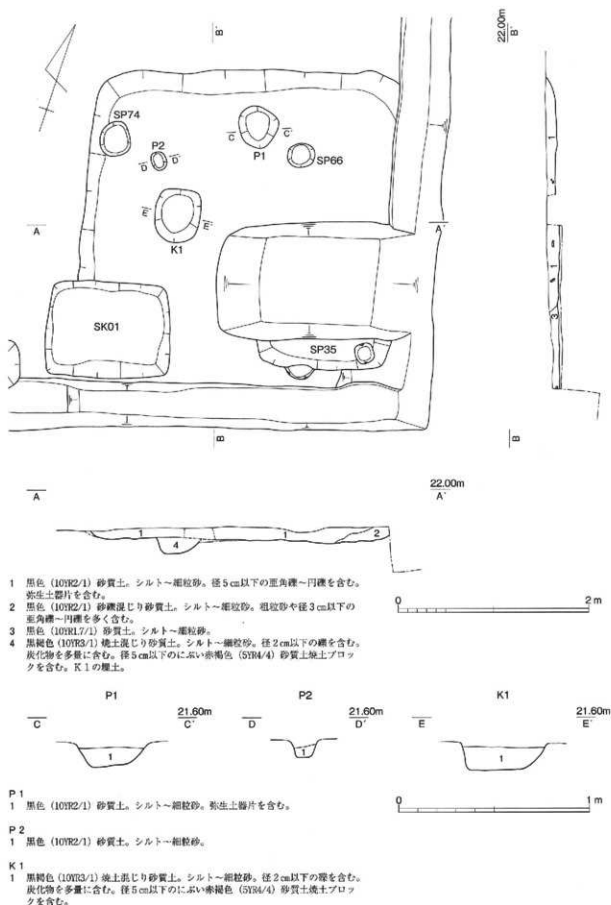
① S B01

調査区北東部で検出された掘立柱建物である(第33図、図版32)。桁行3間(約3.7m)、梁間2間(約3m)の総柱建物である。主軸は真北より37°西偏する。柱間距離は、桁行において約1.3m、梁間において約1.5mを測る。

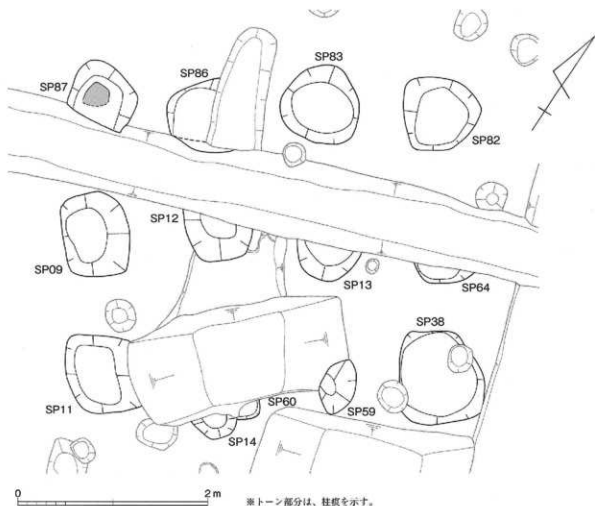
S B01を構成する柱穴(S P09・11・12・13・14・38・59・60・64・82・83・86・87)は平面形態が不整形や不整形で、おおよそ長径80~100cm、短径70~80cmの規模となっている。断面形態は、逆台形を呈するものが多い。残存する深さは、30~60cmと差違がみられる。しかし、各柱穴の底面の標高はおおよそ一致しており、本来、いずれの柱穴も同程度の深度であったと考えられる。柱穴の多くは埋土を3層に大別することができる(第34・36図、図版32)。なお、S P87では、径約25cmを測る柱穴が認められる。

時期については、出土遺物(第41図8~10)から7世紀前半頃と考えられる。なお、月若遺跡第81地点第1遺構面で検出された飛鳥時代の総柱建物であるS B102と主軸方位が近似していることから(第62集)、同時期の遺構であると考えられる。





第32図 SH01平面図・土層断面図 1/40、柱穴・土坑土層断面図 1/20



第33図 SB01平面図 1/40

②SB02

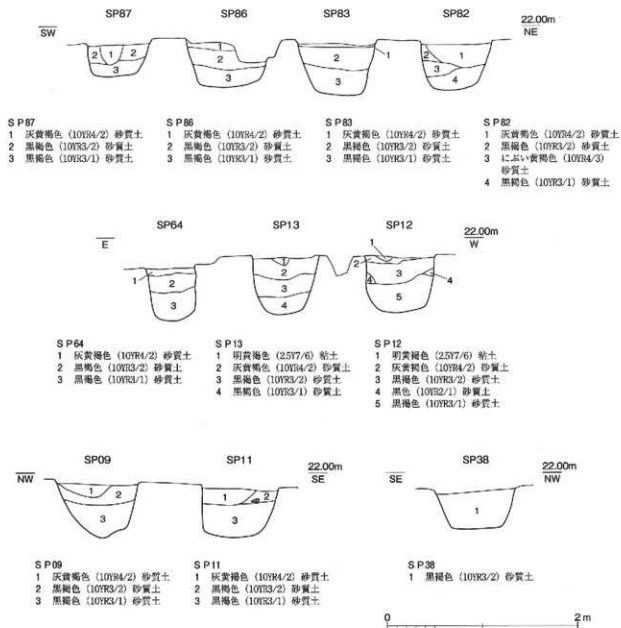
調査区北東部で検出されたピットの内、SP02・03・05・79・80・81・84・85については、平面形態が円形で、埋土が灰色系を呈する点で類似しており、規則的な配置が確認された（第35図、図版33）。さらに、今回の調査地の北側に位置する月若遺跡第81地点第1遺構面で検出されているSB104〔第62集〕や、東側に位置する月若遺跡第70地点第1遺構面で検出されているSB104〔第57集〕は、各々の位置関係から同一の掘立柱建物である可能性が高い。

図上での復元となるので実証性が低くなってしまうが、規則的な位置にあるピットを検討していくと、少なくとも東西5間（約11m）、南北5間（約9.5m）の規模をもつ総柱の大型掘立柱建物を復元することができる（第48図）。その場合、主軸は真北より23°西偏する。

建物の時期は、出土遺物（第41図11・12）から11世紀末～12世紀初頭頃と考えられる。

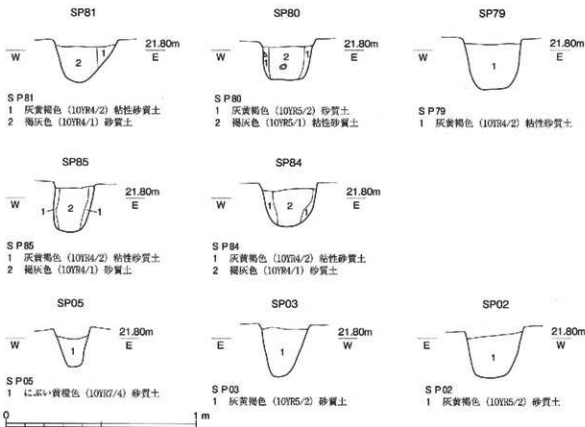
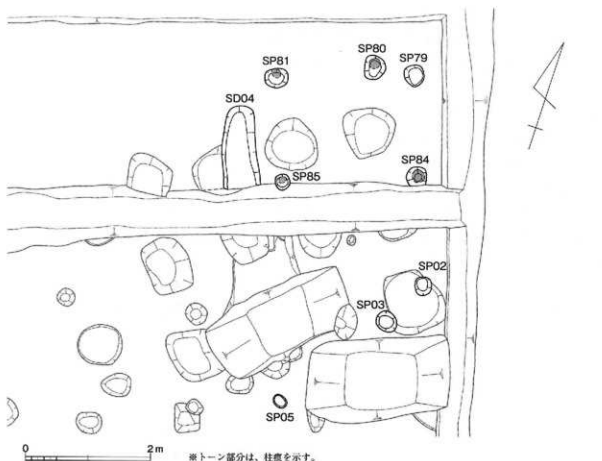
また、今回の調査で検出されたSD04は、月若遺跡第81地点第1遺構面のSD102と連続する同一の遺構として捉えることができ、月若遺跡第70地点第1遺構面で検出されている東西方向にのびる溝と合わせて、SB02に伴う溝になる可能性が高い。

今回の調査地点やその周辺において検出されている平安時代末から鎌倉時代の遺構には、今回の調査地点のSB02やSD04、月若遺跡第70地点第1遺構面の扇状遺構（SX103）、SB02と主軸方位をほぼ



第34図 S B01柱穴土層断面図 1/40

同じくする掘立柱建物である S B101・104や、同時期の S B102・103、溝 (S D102) [第57集]、第81地点第1遺構面の掘立柱建物 (S B101) [第62集]、第96地点第1遺構面の掘立柱建物 (S B01)、井戸 (S E01)、溝 (S D03~05)、護岸遺構 (S R02-1) [第76集] などがある (第48図)。なお、第96地点の護岸遺構は庭園遺構の一部になる可能性がある。これらの存在から、本調査地点周辺においては、平安時代末から鎌倉時代頃に堀により区画され、その内側には中心施設とそれに伴う付属施設が建ち並び、庭園や井戸などが設けられていたことを復元することができる。なお、このような遺構群の性格の検討については、今後の課題としたい。



第35図 SB02平面図 1/60、柱穴土層断面図 1/20

(3) ビット

第2遺構面では、ビットが数多く検出された(第31・36・37図、図版27・28・34)。なお、出土遺物からは、弥生時代後期後半から中世にわたる時期の異なるものが混在していることがわかる。また、それらの時期については、埋土の色調からもおよそ推測することができ、具体的には古墳時代前期以前のもものが黒褐色系、古墳時代中期から古代は暗灰色系、中世は灰色系の色調を呈する傾向が認められる。

これらの中には、本来、掘立柱建物などを構成していたものが含まれていると推測され、今回の調査では、先述のとおり、7世紀前半頃の掘立柱建物1棟(SB01)と11世紀末～12世紀初頭頃の掘立柱建物1棟(SB02)の柱穴の配列を確認することができた。

ビットの中には、柱痕が認められるもの(SP04・70等)がある(第36・37図、図版35)。また、調査区南東部で検出されたSP68・69には、底面に礎板石と考えられる径30cm程度の平滑な礫が据えられていた(第37図)。

(4) 土坑

第2遺構面では、土坑が数多く検出された(第31・37図、図版27・28・34)。ただし、遺構検出時に比較的大型のを土坑として登録しており、ビットと土坑は規模で区別している。そのため、土坑の中には、掘立柱建物を構成する柱穴が多数含まれていると考えられる。

これらの時期は、ビットと同じく弥生時代後期後半から中世のものまで含まれている。埋土の色調の差違も、ビットとよく似た傾向がある。

調査区南東部で検出されたSK01は、埋土に円柱状の黄色粘土が認められた(第37図、図版34)。黄色粘土は平面形態が円形で、直径20～40cm程度を測る。柱穴の柱材に関連するものと考えられ、柱材の抜き取り穴に黄色粘土を充填したものか、柱材自体が黄色粘土に変質したものと推測される。

SK08は調査区南西部で検出された土坑で、SD05を切っている。不整形で長辺約1.4m、短辺約60cm、深さ約18cmを測る。出土遺物から、弥生時代後期後半のものと考えられる。

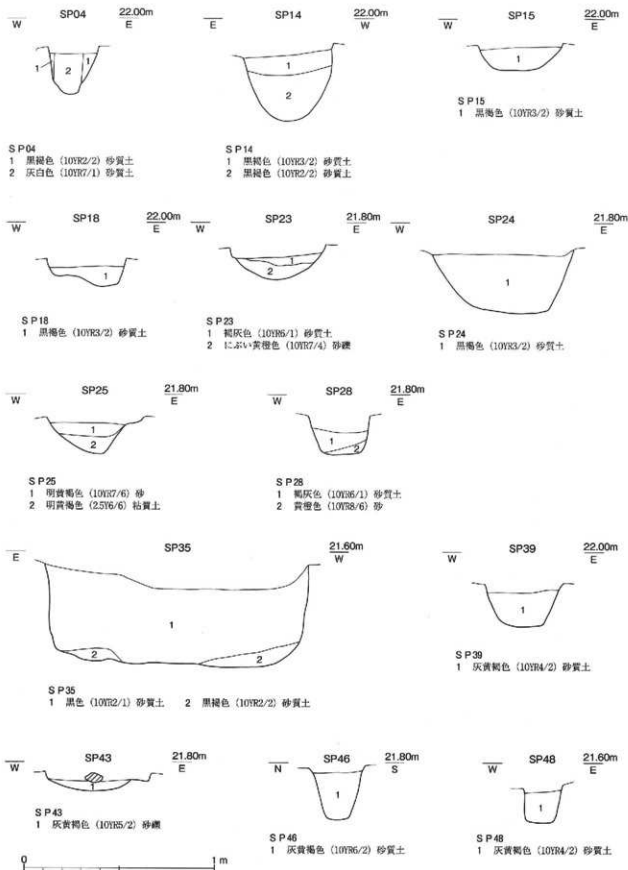
(5) 溝

横断面の形態から人為的掘削によって造られたと考えられる溝が4条検出された(SD01～04)。また、SD05は人工溝か、自然流路かを積極的に判断できなかったが、ここでは人工溝として報告する。

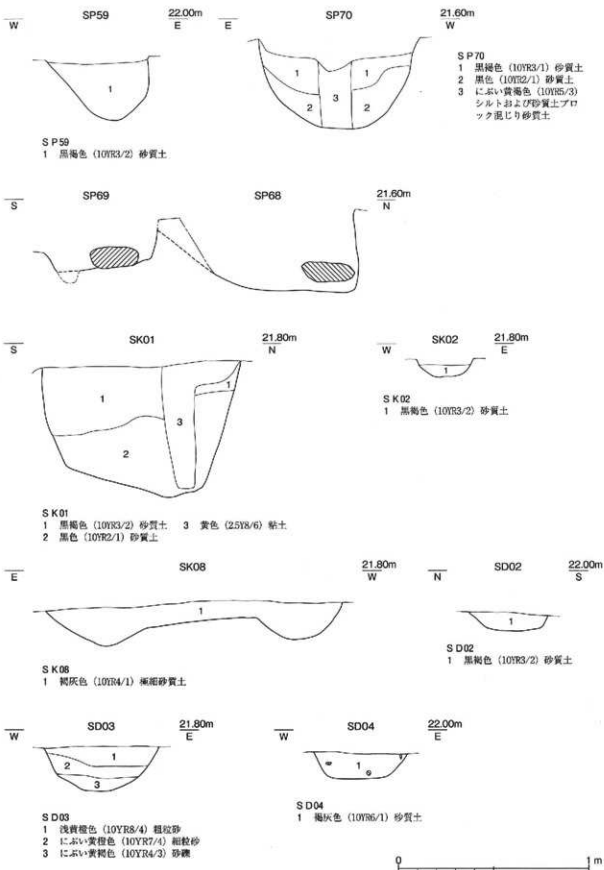
①SD01

当溝は調査区中央付近で検出された(第31・38図、図版5・35)。基本土層第7層を基盤層としており、第5a層に覆われている。西屑付近がちょうどⅠ区とⅡ区の境界になっていることから、横断面の土層の合成が上手くできなかった(第38図)。北北西から南南東にのび、検出長は約10mを測る。幅は調査区北側で約4.4m、調査区南側で約4.8m、最大幅で約6.2mを測り、深さは最深部で約70cmである。

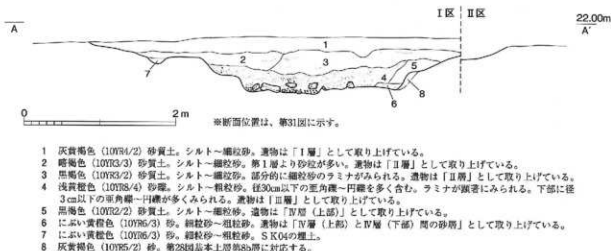
埋土は6層に細分され、土坑と認識したSK04についても当溝を流れる水的作用によって生じたものと推測される(第38図、図版5・35)。これらをみると、下層は径30cm以下の礫を多数含む砂礫層(第4層)と砂層(第6・7層)からなり、水流があったことがわかる。ただし、下層においても第5層のように砂質土も認められる。一方、上層はシルト～細粒砂からなる砂質土(第1～3層)となっており、徐々に埋没していったと考えられる。なお、当溝の底面では、基盤層の黒色粘土に食い込むように、亜角礫～円礫が多数認められ(図版35)、それらの中には鉄滓も含まれていた。



第36図 第2遺構面ビット土層断面図 1/20



第37図 第2遺構面ビット・土坑・溝土層断面図 1/20



第38図 S D01土層断面図 1/50

埋土は比較的明瞭に区別できる4層に大別し、「I～IV層」と呼称して掘削した。また、土層観察用土手設定位置で堆積していなかった砂層については、「IV層 (下部)」と呼称した。I～IV層と第38図の土層との対応関係は、I層が第1層、II層が第2・3層、III層が第4層、IV層 (上部) が第5層、IV層 (上部) とIV層 (下部) 間の砂層が第6層、IV層 (下部) が図示されていない砂層となる。

出土遺物からは、当溝は7世紀後半頃に開削され、9世紀頃に完全に埋没したと推測される。さらに、これらに含まれている単弁八弁蓮華文高句麗様式軒丸瓦や、法隆寺式の複弁八弁蓮華文軒丸瓦、均正忍冬唐草文軒平瓦を含む多数の古代瓦片や、鉄滓などは、本調査地周辺に官衙施設や工房の存在を推測させるものである。

なお、当溝については、位置関係や形態、時期、埋土の堆積状況から、北北西に位置する月若遺跡第102地点S D01〔第84集〕および月若遺跡第81地点S D101〔第62集〕、南南東に位置する寺田遺跡第197地点S R05〔第84集〕で検出された古代の溝と連続するものと考えられる (第47図)。これらの地点と今回検出されたS D01の調査結果からは、当溝が7世紀後半頃に開削されたもので、幅約5.5m、深さ約80cmで、北北西から南南東に少なくとも110mの距離を直線的にのびているものと推測される。さらに、これらの地点からも、当溝に伴い多数の古代瓦や埴、緑釉陶器、鉄滓など、官衙的要素をもつ特殊な遺物が出土している。

② S D02

調査区南東部で検出された溝で、東北東から西南西へのびる (第31図、図版27・34)。溝の両端が検出されており、全長約2.4mを測る。幅は約45cm、深さは約10cmである。埋土は黒褐色 (10YR3/2) 砂質土で、マンガンが顕著に認められる (第37図)。土師器片と須恵器片が出土しているが、時期を判断できる遺物はない。飛鳥時代から奈良時代までのものと考えられる。

③ S D03

調査区中央付近を、おおよそ真北から真南に向かって直線的にのびる溝である (第31図、図版4・28・34)。調査時の第2遺構面に伴う遺構で、第8a層を基盤層とし、第7層に覆われている。検出長約11.5m、幅60cm前後、深さ25cm程度である。埋土は3層に分層でき、上層が浅黄褐色 (10YR8/4) 粗粒砂、中層がにぶい黄褐色 (10YR7/4) 細粒砂、下層がにぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂礫である (第37図)。

これらの埋土から、水流があったと考えられる。

出土遺物は非常に少なく、土師器片が1点認められるのみである。そのため、当溝の時期を遺物から検討することは難しい。ただし、当溝の北部で、7世紀代の掘立柱建物であるSB01の柱穴（SP87）に壊される状況が確認できることから、それ以前の遺構であることは間違いない。

なお、当溝の連続が北側の月若遺跡第81地点第1遺構面のSD105〔第62集〕と、北東側の月若遺跡第70地点第2遺構面のSD202〔第57集〕として検出されており、少なくとも長さ約30mにわたって、さらに真北に向かって直線的にのびていることが明らかとなった。

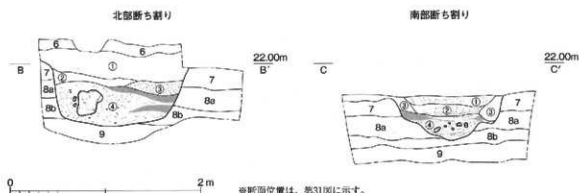
④SD04

調査区北東部で検出された北西から南南東に走る溝である（第31図、図版30・33・34）。SB01に伴う柱穴であるSP86を切っている。さらに、検出時に記録できておらず第31図では示していないが、SB01のSP12も切っていた。溝の両端は閉塞した状態で検出されている。規模は、長さ約2.5m、幅約58cm、深さ約28cmを測る。埋土は、褐灰色（10YR6/1）砂質土である。出土遺物（第41図24～27）から11世紀末～12世紀初頭頃のものと考えられる。

なお、当溝については、SB02の記述で触れたとおり、両者の位置関係や同時期の遺構であることから、SB02に伴うものと考えられる。

⑤SD05

調査区西部を北西から南東へ流れる溝である（第31図、図版29・36）。検出長は約10m、幅は1.2～1.3m、深さは最大で約80cmを測る。埋土は4層に分層でき、それぞれシルト～粗粒砂から構成されている（第39図）。ラミナが認められ、水流があったと考えられる。出土遺物（第43・44図64～110）から



北部断ち割り

- ① 黒褐色（10YR3/2）砂質土。シルト～粗粒砂。径1cm前後の礫を含む。マンガンが多くみられる。炭化物を含む。遺物は「SD05上層」として取り上げている。
- ② 褐灰色（10YR4/1）極細粒砂。シルト～極細粒砂。シルトと砂層が層状に分かれる。殊生土器片を含む。遺物は「SD05中層」として取り上げている。
- ③ 浅黄褐色（10YR8/4）砂。細粒砂。遺物は「SD05中層」として取り上げている。
- ④ にぶい黄褐色（10YR6/3）砂礫。粗粒砂～粗粒砂。径35cm前後の重角礫を含む。径5cm以下の重角礫～円礫を含む。遺物は「SD05下層」として取り上げている。

南部断ち割り

- ① 浅黄褐色（10YR8/4）砂。細粒砂～粗粒砂。遺物は「SD05上層」として取り上げている。
- ② 灰黄褐色（10YR5/2）砂。細粒砂～粗粒砂。灰色シルトのラミナがみられる。遺物は「SD05中層」として取り上げている。
- ③ 灰黄褐色（10YR4/2）極細砂質土。シルト～極細粒砂。一部に細粒砂がみられる。遺物は「SD05中層」として取り上げている。
- ④ にぶい黄褐色（10YR6/3）極細粒砂。粗粒砂～粗粒砂。径5cm以下の重角礫を多く含む。殊生土器片を多く含む。遺物は「SD05下層」として取り上げている。

※アラビア数字は、第28図に示した面土層の番号に対応している。

第39図 SD05土層断面図 1/40

弥生時代後期後半を中心とするものと考えられる。

当溝は、今回の調査地点の北側に位置する月若遺跡第81地点のS D203〔第62集〕、月若遺跡第102地点のS D02〔第84集〕と連続するものである。また、本地点から南南西へ約50m離れている寺田遺跡第128地点のS D04が同時期の溝であり〔第47集〕、両者の位置関係からも連続する可能性がある。

(6) 落ち込み

調査区南西部で検出された落ち込みである（第31図）。調査区端のため、全体は不明であるが、深さは約17cmを測る。埋土は灰黄褐色（10YR4/2）極細砂質土で、シルト～極細粒砂からなる（第28図第③層）。当層は、S D05南部断ち割り第③層

（第39図）とも対応しており、S D05から供給されたものであることがわかる。弥生土器片が出土しており、S D05と同時期の弥生時代後期後半のものと考えられる。

(7) 地震痕跡

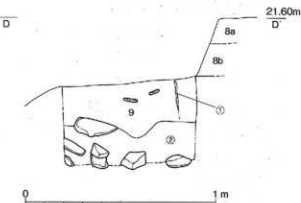
地震痕跡として、調査区北西部で北東から南西に走る筋状の砂脈が2条検出された。ただし、その内の1条のみを記録した（第40図、図版36）。その長さは1.2m程度で、最大幅は約1cmである。比較的光滑な部分を対象に断ち割り、土層断面を観察したところ、砂脈は基本土層第9層の下層となるにぶい黄褐色（10YR5/4）砂礫層（第40図第②層）から噴き上がってきたものであることが確認された。なお、噴き上がった砂脈を構成する砂粒の大きさは、極細粒砂～細粒砂である。

当砂脈を生じさせた大地震の発生時期については、砂脈と基本土層との関係が確認できておらず、基本土層第9層の堆積以降に発生したものではないとしか判断できない。

第6節 遺物

月若遺跡第100地点の調査では、弥生時代中期から近世にかけての遺物が20ℓ容量の遺物整理用コンテナで29箱分出土している。その種類は、弥生土器・土師器・須恵器・黒色土器・瓦器・瓦質土器・陶器・磁器・製塩土器・土錘・瓦・石器・サヌカイト剥片・石製品・鉄製品・鉄滓である。

次に出土した遺物について、出土した層位あるいは出土した遺構ごとに記述する（第41～44図、図版37～40・43）。ただし、古代の瓦片については出土した層位や遺構に関わらず、一括して報告する（第45・46図、図版6・41・42）。また、図版43には器種不明の異形の土師器・須恵器、石器、石製品、鉄滓などについて、実測していないが、写真のみ掲載する。なお、遺物を実測する際には、比較的大きな破片を中心に抽出した。



※断面位置は、第31図に示す。

- ① にぶい黄褐色（10YR7/4）極細砂。極細粒砂～細粒砂。最大幅1cmの砂脈。第②層から供給されている。
- ② にぶい黄褐色（10YR5/4）砂礫。細粒砂～粗粒砂。径15～20cm大の壺角礫を含む。

※アラビア数字は、第28図に示した基本土層の番号に対応している。

第40図 地震痕跡（砂脈）土層断面図 1/20

1. 遺物包含層出土の遺物

基本土層に包含されていた遺物について記す（第41図1～6、図版37）。

1は第4層から出土した青磁の底部で、龍泉窯系青磁の無文の盤になると考えられる。

2は第5層から出土した管状土錘である。土師質で、紡錘状を呈する。ほぼ完存しており、長さ3.95cm、最大幅1.25cm、重量5.4gを測る。

3は第6層から出土した東播系須恵器の椀である。全体に淡灰色を呈するが、口縁部外面が端部から9mmほどの幅で暗灰色を呈している。

4は第7層から出土した弥生土器の底部である。外面・内面ともにナデ調整が施される。しっかりとした平底の形態から、中期の壺などの底部と考えられる。

5は土師器杯で、Ⅲ区西部から出土しているが、包含されていた層位は不明である。復元口径19.4cm、器高3.5cmを測る。胎土は精良で、色調はにぶい黄橙色（10YR6/4）を呈する。内面は緻密な横方向のヘラミガキの後、暗文が施される。外面は口縁部に強いヨコナデが施されている。

6はⅢ区東部の第9層掘削時に出土した弥生土器である。ただし、第9層は無遺物層であると捉えていることから、遺構に伴うものなど、上層から混入したものと考えられる。広口壺の口縁部である。

2. 第2遺構面の遺構出土の遺物

第2遺構面で検出された各遺構から出土した遺物について記す（第41～46図7～110、図版37～40）。

なお、第1遺構面において検出された遺構の大半は中世以降の耕作に伴うものであったことから、遺物はあまり出土しておらず、破片も比較的小さかったため、図化していない。

（1） 竪穴住居跡出土の遺物

本調査地点で検出された唯一の竪穴住居跡であるSH01からは、少量の遺物しか出土しなかった。破片も小さく、図化できたのは1点のみである（第41図7、図版37）。

7は弥生土器の底部である。平底で、復元底径は6.0cmを測る。弥生時代後期後半頃のものと考えられる。

（2） 掘立柱建物出土の遺物

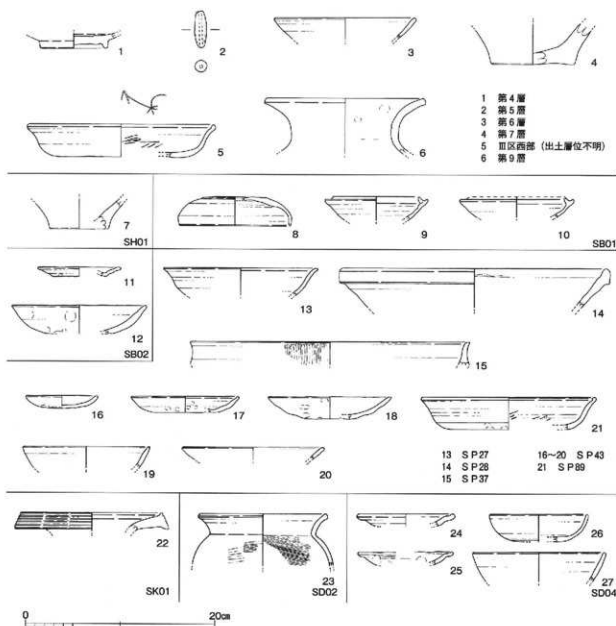
本調査地点で確認されている掘立柱建物2棟（SB01・02）に伴う遺物について、それぞれ記す。

① SB01出土の遺物

第41図8～10は、SB01を構成する柱穴から出土した須恵器である（図版37）。8はSP09から出土した杯臺で、天井部は回転ヘラ切りの後、未調整である。焼成は不良気味で、やや軟質である。9はSP86から出土した杯身、10はSP87から出土した杯身である。短く外反する立ち上がり有する。いずれも、TK217型式に比定され（田辺1981）、7世紀前半のものと考えられる〔大阪府立近つ飛鳥博2006〕。

② SB02出土の遺物

第41図11・12は、SB02を構成する柱穴から出土した土師器である（図版37）。11はSP84から出土した小皿で、口径は8.4cmに復元される。口縁部にはヨコナデが施される。色調は浅黄橙色（10YR8/3）を呈する。12はSP85から出土した皿で、復元口径は14.1cmを測る。



第41図 遺物包含層・竪穴住居跡・掘立柱建物・ビット・土坑・溝出土遺物 1/4

(3) ビット出土の遺物

本調査地点で多数確認されているビットに伴う遺物の一部について記す(第41図13~21、図版37)。

13はS P 27から出土した須恵器碗で、口縁部は外反する。14はS P 28から出土した東播系須恵器捏鉢の口縁部である。

15はS P 37から出土した弥生土器で、高杯の口縁部と考えられる。口縁は比較的短く、上方に立ち上がり、端部は強く外反する。外面には縦方向のヘラミガキが施される。後期においても古い要素が認められる。

16~20はS P 43から出土した遺物である。16~18は土師器皿で、16・17が淡黄色、18が暗黄色を呈する。19・20は東播系須恵器の碗である。20は内外面ともに全体が淡灰黄色を呈するが、外面では口縁端部から9mmほどの幅で暗灰色を呈している。

21はSP89から出土した土師器杯である。復元口径18.2cm、器高3.5cmを測る。胎土は精良で、色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈する。内面は緻密な横方向のヘラミガキの後、暗文が施される。外面は口縁部に強いヨコナデが施される。

(4) 土坑出土の遺物

本調査地点で多数確認されている土坑に伴う遺物の内、SK01から出土した遺物について記す(第41図22、図版37)。

22は弥生土器で、器台もしくは壺の口縁部と考えられる。口縁端部を上下に拡張させて面を作り、5条からなる縦門線を施す。後期後半～終末期のものと考えられる。

(5) 溝出土の遺物

本調査地点で検出されている5条の溝(SD01～05)から出土した遺物について記す(第41～44図、図版37～40)。

①SD01出土の遺物

当溝は古代の大溝で、土師器や須恵器(第42図、図版38・43)の他に、瓦(第45・46図、図版6・41・42)や鉄滓(図版43)などの官衙的要素の強い特殊な遺物が出土している。

本章第5節で記したとおり、SD01を調査するに当たって、埋土を比較的に明瞭に区別できる4層に大別して「Ⅰ～Ⅳ層」と呼称し、土層観察用手において認められなかった砂層については「Ⅳ層(下部)」と呼称して遺物を取り上げた。なお、Ⅰ～Ⅳ層と第38図の土層番号との対応関係は、Ⅰ層がSD01埋土の第1層、Ⅱ層が第2・3層、Ⅲ層が第4層、Ⅳ層(上部)が第5層、Ⅳ層(下部)とⅣ層(下部)間の砂層が第6層になる。

ここでは、これらの埋土の上層から順に、瓦片を除いた遺物について記す(第42図28～63、図版38)。なお、図版43①～④は特殊な形態の土師器や須恵器、製塩土器、石器、石製品、鉄滓、高温を受けた石材で、図化していないが、写真を掲載し、各々の出土層位において説明する。

⑤は埋土第1層から出土したサヌカイトの剥片である。長さが約3.3cm、幅が約2.9cm、厚さが約0.7cmを測る。

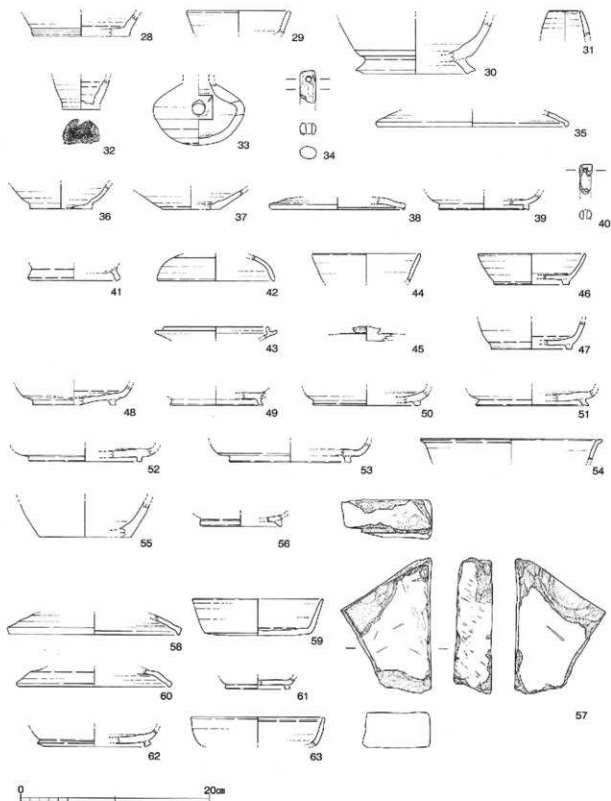
28～30は埋土第2層から出土した須恵器である。28はしっかりとした平高台で、円板状の底部に粘土紐をのせて巻き上げたものと考えられる。灰白色を呈する。29は杯と考えられ、復元口径は10.7cmを測る。30は外方に広がるしっかりとした高台をもち、壺の底部と考えられる。

31・32は埋土第3層から出土した須恵器である。31は復元口径が3.2cmを測る小型のもので、口縁部と考へて図化した。32は平底で、底部外面には回転糸切り痕が認められる。

33・34および①は埋土第4層の出土遺物である。33は須恵器の甕である。34は土師質の棒状有孔土鍾である。①は器形が不明の土師器である。面取りされた端部をもち、器壁の最大厚は約2.6cmを測る。

35および⑥は埋土第5層から出土した遺物である。35は須恵器の杯蓋で、復元口径は20cmを測る。⑥は叩き石と考えられる円礫で、全体の半分しか残存していない。敲打痕が認められる。

36はⅠ層(埋土第1層)から出土した東播系須恵器の碗である。平高台をもち、底部外面には回転糸切り痕が認められる。森田編年第Ⅰ期第1段階に比定され、11世紀後半のものと考えられる〔森田1995〕。



28~30 埋土第2層
31・32 埋土第3層
33・34 埋土第4層
35 埋土第5層

36 Ⅰ層
37~40 Ⅱ層
41~57 Ⅲ層
58・59 Ⅳ層(上部)

60~62 Ⅳ層(上部)と
Ⅳ層(下部)間の砂層
63 Ⅳ層(下部)

第42図 S D01出土遺物 1 / 4

37～40および②はⅡ層（埋土第2・3層）の出土遺物である。37は東播系須恵器の椀で、底部外面には回転糸切り痕が認められる。平高台は退化しはじめており、森田編年第Ⅰ期第2段階に比定される〔森田1995〕。11世紀末葉～12世紀前半のものと考えられる。38・39は須恵器蓋杯である。40は土師質の棒状有孔土鍾である。②は須恵質で器種は不明である。外面にはタテハケ、内面には横方向と不定方向にナデが施されている。

41～57および⑦・⑩はⅢ層（埋土第4層）から出土した遺物である。41は土師器の輪高台である。42～55は須恵器である。42～53は蓋杯で、7～8世紀のものが主体となっている。54は端部を屈曲するように外反する口縁部である。胎土は精緻で、回転ナデ調整によって大変丁寧な仕上げられている。灰白色を呈する。55は平底の底部を有する。56は黒色土器の底部である。内黒焼成のA類で、底部に輪高台を貼り付ける。9世紀に下るものである〔森1995〕。57は砂岩製の砥石である。4面を研ぎ面として利用している。重量は670gを測る。⑦は結晶片岩で、棒状を呈する。長さ約12cm、幅約3.2cm、厚さ約1.7cmを測る。当地域の石材でないことから、明らかに他地域から搬入されたものである。なお、S D 01に連続すると考えられる寺田遺跡第197地点S R 05〔第84集〕や、本調査地点の北東に近在する月若遺跡第96地点のS R 02-1護岸遺構〔第76集〕からも古代の遺物に伴って結晶片岩が複数出土しており、結晶片岩が古代に他地域から搬入されていると考えられる。ただし、その理由や用途などは不明である。⑩は砂岩と考えられる石材で、ややくぼむ平滑な面を有しており、その面が被熱により黒ずんでいる。

58・59および④は、埋土第5層に相当するⅣ層（上部）から出土した遺物である。58・59は須恵器で、58は杯蓋の口縁部である。59は杯身で、灰白色を呈し、胎土は精緻である。つくりは大変丁寧で、器表は滑らかである。底部外面は回転ヘラケズリにより仕上げられる。④はサヌカイト製の打製石器である。板状を呈し、長さ約5.2cm、幅約13.2cm、厚さ約0.5cmを測る。刃器と考えられる。

60～62は埋土第6層に相当するⅣ層（上部）とⅣ層（下部）間の砂層から出土した須恵器で、8世紀代の蓋杯と考えられる。

63および③は、Ⅳ層（下部）から出土した遺物である。63は土師器椀である。口縁部の内外面にヨコナデ調整が認められる。③は製塩土器の破片と考えられる。土師質で、胎土には径2mm以下の長石や石英が含まれており粗い。器表は全体的に磨耗している。

以上、S D 01に伴う遺物の内、第42図に掲載したものについて記してきたが、これら以外に当溝からは古代の瓦片が多数出土しており、これらについては後述する（第45・46図）。

② S D 02出土の遺物

第41図23は、弥生土器の甕で、後期後半のものと考えられる（図版37）。口縁部はヨコナデで仕上げられ、端部は面をもつ。肩部の外面にはタタキ、内面にはハケが施される。

③ S D 04出土の遺物

本章第5節で記したとおり、S D 04は掘立柱建物であるS B 02に伴うものと考えられる。当溝に伴う遺物として、第41図24～27を掲げる（図版37）。24・25は土師器皿で、いわゆる「て」字状口縁が退化したものである。いずれも淡黄色を呈する。11世紀末～12世紀初め頃のものと考えられる〔伊野1995〕。26は須恵器杯身である。底部は回転ヘラケズリで仕上げる。27は東播系須恵器の椀と考えられる。

④ S D 05出土の遺物

S D 05からは、弥生時代後期後半の土器片が数多く出土した。これらについては、大きく北半部と南半部に二分して、それぞれ上層・中層・下層の3層に分けて取り上げた。ここでは、取り上げた位置と

層位ごとに報告する（第43・44図64～110、図版39・40）。

64～73は出土位置および層位が不明のものである。64～66は壺である。64は広口壺の口縁部で、端面を形成している。65は長頸壺の口縁部と考えられ、端部外面に浅い擬凹線を一条巡らせる。66は壺の底部と考えられる。胎土には角閃石が多く含まれ、茶褐色を呈する。中河内地域からの搬入品と考えられる。67・68は甕である。68の口縁部は、屈曲させた後、端部先端を強調させるようにつまみ上げる。端部外面に平行する2条の沈線が認められる。69は鉢で、口縁部を外反させる。70～72は高杯である。

70は口縁部が外反する有稜高杯で、胎土には角閃石が多く含まれ、茶褐色を呈する。中河内地域からの搬入品と考えられる。71も有稜高杯の口縁部で、口縁部は外反する。72は高杯脚部で、柱状を呈する。73は器台もしくは壺の口縁部である。垂下する口縁の端面には擬凹線を施した後に間隔の狭い櫛描波状文を加え、竹管文を伴う円形浮文を貼り付ける。

74～76は北半部の中層から出土したものである。74・75は甕である。74は口縁端部をつまみ上げ、75は端面を形成する。76は有稜高杯で、口縁部は強く外反し、端部をつまみ上げる。

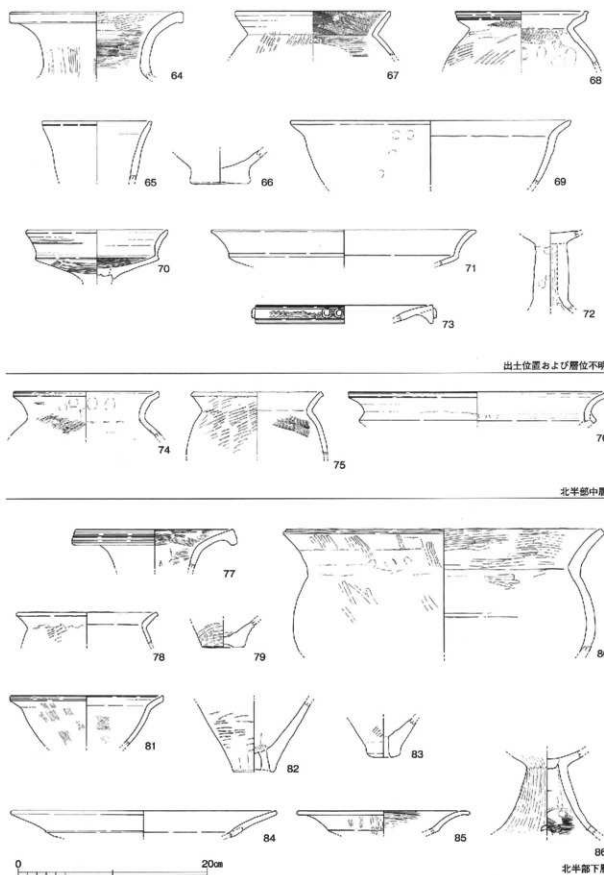
77～86は北半部下層から出土したものである。77は広口壺の口縁部で、端部を下方に肥厚させて端面を作り、浅い擬凹線を3条施す。78は甕で、口縁部外面の「く」字状に屈曲するあたりには、肩部からのタタキ目を覆う接合痕が認められる。79は底部で、右上がりのタタキが施される。80・81は鉢である。80は大型品で、復元口径は32.8cmを測る。口縁部は外反し、端面には擬凹線が1条施される。81は口縁が外反する鉢で、端部をつまみ上げ、端面には浅い擬凹線が1条認められる。内面のすべての範囲には赤色顔料がうすうす和付着している。82・83は有孔鉢である。82では、穿孔の位置が底部の中心からずれている。83は突出気味の底部に孔をあける。84～86は高杯である。84・85は有稜高杯で、84は直線気味に大きく外方する口縁部をもつ。85は大きく外反する口縁部である。86は高杯の脚部で、中空である。外面には、縦方向のヘラミガキが施される。

87～89は南半部の上層から出土した土器である。87は甕で、口縁部はヨコナデにより端部を若干立ち上げる。88・89は鉢である。

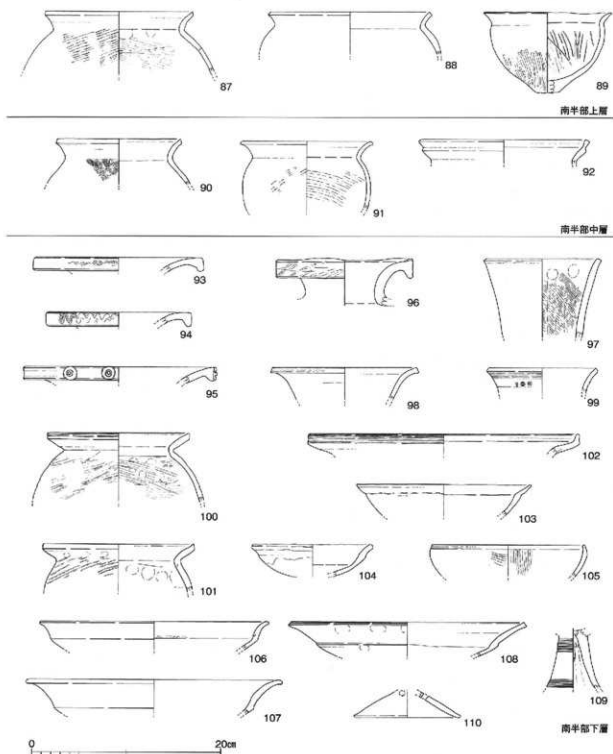
90～92は南半部の中層から出土した土器である。90・91は甕である。90は口縁端部をヨコナデにより立ち上げる。91は小型のもので、肩部外面のタタキ目はナデにより消されている。92は甕などの口縁部と考えられ、大きな屈曲をもつ。

93～110は南半部の下層から出土した土器である。93～99は壺である。93～95は口縁端部を加飾するもので、器台の可能性もある。93・94は櫛描波状文が施され、95は竹管文を伴う円形浮文を貼り付ける。なお、94は茶褐色を呈しており、胎土に角閃石が多く含まれることから、中河内地域からの搬入品と考えられる。96は口縁端部を下方に垂下させ、上方にも若干拡張するもので、端面には右上がりの浅い刺突文のような文様もしくは調整が多数認められる。97は長頸壺で、口縁部は緩やかに外方に開く。98・99は短頸広口壺の口縁部と考えられる。99には竹管文が3点施されており、記号文と推測される。100・101は甕で、両者とも口縁端部をヨコナデによって立ち上げている。102～104は鉢である。102は口径が28.2cmに復元され、大型の鉢と考えられる。口縁部は受口状を呈し、端面は強いヨコナデによって浅い擬凹線のように仕上げられている。北近畿系のものであると考えられる。103は短く外反する口縁をもつ。104は強いヨコナデを加えることによって、口縁部を少し外反させている。

105～110は高杯である。105は直口する口縁部で碗形を呈し、口縁端部にはヨコナデによる弱い段をもつ。106～108は有稜高杯である。106は外反する比較短的な口縁部である。表面はローリングを受け



第43図 SD05出土遺物 (1) 1 / 4



第44図 S D05出土遺物 (2) 1 / 4

で、摩耗している。107は外反する口縁部をもつ。108は口縁部が緩く外反し、杯部との境界には内外面ともに段を有する。口縁端部は面取りされ、1条の擬凹線が巡る。109は中空の脚柱部で、2帯の沈線文帯を施している。条数は上のものが6条、下のものが2条以上を数える。110は脚部裾が大きく開き、透かし孔をもつものである。

これまで記してきたS D05の出土土器は、森岡・竹村編年の西摂1・2様式〔森岡・竹村2006〕を中

心とするものと考えられ、弥生時代後期後半を主体とするものと判断される。

3. 瓦

今回の調査では、S D01を中心に古代の瓦片が数多く出土している（第45・46図111～125、図版41・42）。ここでは、瓦片の一部を第38図に示したS D01の土層断面図に基づいて出土層位ごとに記述する。

（1） S D01埋土第2層もしくは第3層出土の瓦（第45図111、図版6・41）

111は平瓦である。須恵質であるが、やや軟質に焼き上がっている。凹面には布目痕がみられる。模骨痕の突出した部分には、ヘラケズリが施される。端部にもヘラケズリが施される。凸面は平行タタキ目がナデ調整により丁寧に消されている。

（2） S D01埋土第4層出土の瓦（第45図112～119、図版6・41）

砂礫層である埋土第4層からは、瓦片が最も多く出土している。112・113が瓦当、114が丸瓦、115～119が平瓦の破片である。

112は芦屋庵寺跡と同型式である法隆寺式の複弁八弁蓮華文軒丸瓦で、大きな中房に18個の宝珠（1+6+11）をもつ。焼成はやや不良で、土師質となっている。113は法隆寺式の均正忍冬唐草文軒平瓦である。須恵質で硬く焼きあがっている。瓦当面には自然釉が若干付着している。凹面・凸面ともにナデ調整が丁寧に施される。瓦当部の製作方法を示す接合痕が確認でき（図版41）、剥離面には平瓦の凹面にあたる部分の布目痕が観察される。芦屋庵寺跡と同型式のもので、前記の112との組み合わせをなすものである。

114は丸瓦である。瓦質で、凹面には布目痕が認められる。

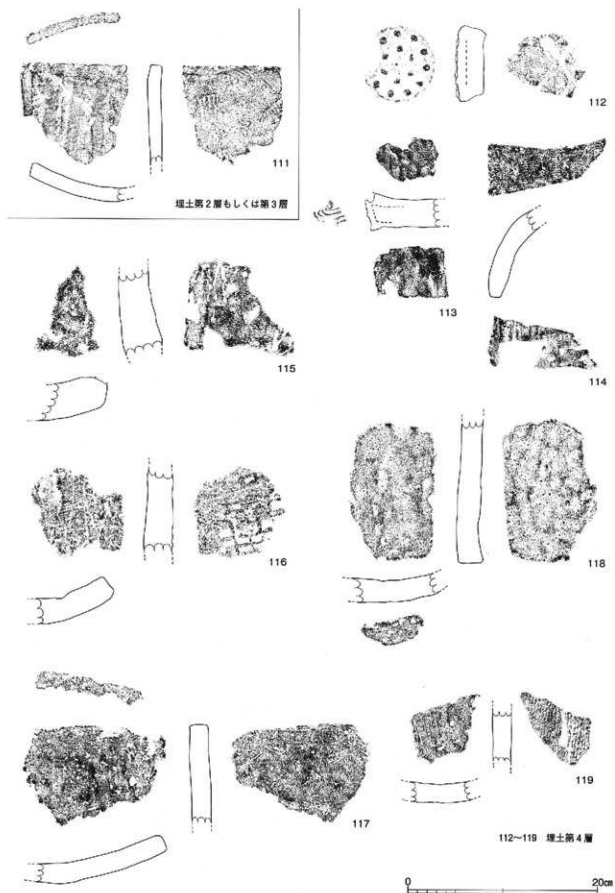
115～119は平瓦である。115は端部に近づくにつれて厚みを増していくことから、軒平瓦である可能性が高い。凹面・凸面ともにナデで仕上げる。器壁は磨耗している。116は土師質で、胎土には径5mm大の長石や石英などが多数含まれており、とても粗い。凹面には布目痕が部分的に認められる。凸面には正格子タタキ目が施されている。芦屋庵寺跡をはじめ、芦屋市域ではほとんど確認されていないものである。117は須恵質で、凹面は布目痕がヘラケズリにより消されている。凸面はナデ調整が丁寧に施されている。端部はヘラケズリにより仕上げられている。118は土師質で、径5mm以下の長石や石英を多く含む。凹面にはナデ調整が施される。凸面には、指頭痕が数多く認められる。広端面は未調整と考えられる。119は瓦質で、凹面にはナデ調整、凸面には縄目タタキが施される。

（3） S D01IV層（下部）出土の瓦（第46図120、図版6・42）

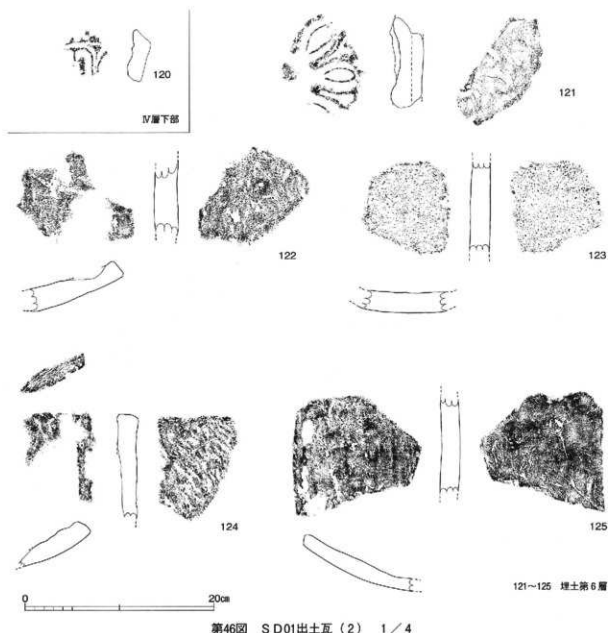
120は法隆寺式の複弁八弁蓮華文軒丸瓦である。複弁花卉と周縁の面違銀歯文が認められ、芦屋庵寺跡と同型式である。焼成はやや不良で、土師質である。

（4） S D01埋土第6層出土の瓦（第46図121～125、図版6・42）

121は単弁八弁蓮華文高句麗様式軒丸瓦である。芦屋庵寺跡第62地点で瓦当部がほぼ完存する1点が初例で（寒川・森岡・竹村2001、芦屋市教委2006b）、以後、月若遺跡第81地点〔第62集〕と月若遺跡第98地点（本書第18図11）で細片がそれぞれ1点出土しており、現時点で合計4点しか確認されてい



第45図 SD01出土瓦(1) 1/4



第46図 S D01出土瓦 (2) 1 / 4

ない。蓮弁がネガティブに表現されるのが特徴的であり、芦屋廃寺跡のものと同型式と考えられる。土師質で、色調が白黄色を呈し、胎土が精良な点もこれまでのものと共通している。

122～125は平瓦である。122は土師質で、赤褐色を呈している。凹面に布目痕が部分的に認められる。凸面には刺突文のようにみえる豆粒状のタタキ目が施されている。この平瓦と良く似たものが、月若遺跡第96地点〔第76集〕や第83地点〔第68集〕、第98地点（本書第18図12、第20図23）、第102地点〔第84集〕および寺田遺跡第197地点〔第84集〕で確認されている。123は土師質で、白黄色を呈している。凹面・凸面ともに明瞭な痕跡はみられず、ナデ調整が丁寧に施されているようである。124は瓦質である。器壁が若干磨耗している。凹面の痕跡は不明である。凸面には、非常に不明瞭で歪なタタキ目が認められる。125は瓦質である。器壁が若干磨耗している。凹面には布目痕がみられ、模骨痕の突出した部分はヘラケズリが施される。凸面はナデ調整が丁寧に施されている。

第7節 小 結

今回の調査では、弥生時代後期後半以降の遺構面が2面確認された。第1遺構面は第5b層に覆われ第6層を基盤層とするもので、近現代の遺構（KG01～13）、近世の暗渠1条、中世のビット7基（SP01～07）、埴痕16条が検出された。近現代の遺構は、大正時代以降の住宅地に伴うものと考えられる。

第2遺構面は第7層上面と第8a層上面でそれぞれ検出された遺構面を図上で合成したものであり、弥生時代後期後半～中世の居住域に伴う遺構が多数検出された。その内容は、竪穴住居跡1棟（SH01）、掘立柱建物2棟（SB01・02）、多数のビットおよび土坑、溝5条（SD01～05）、落ち込み1基、地震痕跡（砂脈）である。

竪穴住居跡（SH01）は弥生時代後期後半のものと考えられる。掘立柱建物では、SB01が飛鳥時代の総柱建物で、桁行3間（約3.7m）、梁間2間（約3m）となっている。一方のSB02は、調査区北東部に検出された8基のビットについて形態や埋土の類似が確認され、さらに、今回の調査地の周辺に位置する月若遺跡第81地点のSB104や、月若遺跡第70地点のSB104と合わせて、同一の掘立柱建物である可能性を推定した（第48図）。その結果、当建物が少なくとも東西5間（約11m）、南北5間（約9.5m）の総柱の掘立柱建物を復元することができた。建物の時期は、11世紀末～12世紀初頭頃のものと考えられる。なお、SD04はSB02に伴う溝である可能性が高い。復元した掘立柱建物の規模については、阪神間で検出されている古代末から中世の掘立柱建物と比較してみると、最大級の規模となる〔森岡2005〕。さらに、今回の調査地やその周辺においては、平安時代末から鎌倉時代の掘立柱建物や堀状遺構、井戸、庭園遺構の可能性のある護岸遺構などが確認されている（第48図）。

SD01は幅4.4～6.2m、深さ約70cmを測る古代の大溝で、7世紀後半頃に開削され、9世紀頃に完全に埋没したと考えられる。出土遺物には多数の古代瓦や鉄滓などが認められており、当溝周辺に7世紀代の寺院跡や、工房をはじめとする官衙の関連施設の存在を推測させるものである。

なお、当溝については、位置関係や形態、時期、埋土の堆積状況から、月若遺跡第102地点、月若遺跡第81地点と、南南東に位置する寺田遺跡第197地点で検出されている古代の溝と連続するものと考えられ、北北西から南南東に少なくとも110mの距離を直線的にのびているものと推測される（第47図）。

SD05は弥生時代後期後半のもので、北方に位置する月若遺跡第81地点SD203、月若遺跡第102地点SD02と連続するものであり、本地点から南南西に位置する寺田遺跡第128地点SD04にも連続する可能性がある。

地震痕跡は、北東から南西に走る筋状の砂脈が2条検出された。なお、当砂脈を生じさせた地震の発生時期については、不明である。

遺物は、20ℓ容量の遺物整理用コンテナで29箱分出土した。これらの内容を見ると、弥生時代後期後半のもの7世紀代のものが比較的多い。弥生時代後期後半の土器には、中河内地域からの搬入品や北近畿系の土器が認められる。古代の遺物では、先述したSD01から出土した遺物の中に、芦屋廃寺跡と同型式の高勾麗様式の単弁八弁蓮華文軒丸瓦、法隆寺式の複弁八弁蓮華文軒丸瓦と均正忍冬唐草文軒平瓦を含む多数の古代瓦片、多数の鉄滓や被熱により一部が黒色を呈する石材、製塩土器など、寺院跡や官衙に関連する施設の存在を推定させる特徴的な遺物が認められる。なお、出土した瓦当は、すべて芦屋廃寺跡の創建期もしくはそれに先行するものである。

第5章 まとめ

本章では、月若遺跡第98地点と第100地点で検出された遺構・遺物についてまとめ、両地点を含む月若遺跡南部とその周辺の土地利用の変遷を時代・時期を追って記す。

第98地点の調査では、弥生時代後期後半以降の遺構面が4面確認された。第1遺構面では中世～近世の耕作地に伴う遺構、第2遺構面では古墳時代後期～古代の集落に伴う遺構、第3遺構面および第4遺構面では弥生時代後期後半～古墳時代前期初頭の集落に伴う遺構が検出された。また、第1遺構面では、時期不明の地震痕跡（砂脈）が確認されている。遺物は、縄文時代晩期以降のものが20ℓ容量のコンテナで20箱分出土した。時期ごとの出土量の割合をみると、弥生時代後期後半と古墳時代後期～奈良時代の遺物が多いといえる。

一方の第100地点では、弥生時代後期後半以降の遺構面が2面確認された。第1遺構面では中世から近世の耕作地に伴う遺構や近現代の住宅地に伴う遺構、第2遺構面では弥生時代後期後半～中世の集落に伴う遺構が検出されている。また、第2遺構面では時期不明の地震痕跡（砂脈）が認められた。遺物は、弥生時代中期以降のものが20ℓ容量のコンテナで29箱分出土した。出土量では、弥生時代後期後半と7世紀代の遺物が目立っている。

地形 月若遺跡は、芦屋川中流の右岸地域に分布する縄文時代早期から近世にわたる複合遺跡である。既往の調査では、分布範囲の全体で集落や耕作地に伴う遺構が確認されている。本遺跡の周辺には、芦屋庵寺遺跡・寺田遺跡・西山町遺跡が隣接している（第7図）。これらの遺跡は行政的に区分されているが、別々の遺跡というよりも、これらの遺跡が分布する範囲内において、時代・時期ごとに集落や耕作地が範囲を変えて推移し、累積した一連の遺跡群というのが実態であろう。

月若遺跡の立地する地形は沖積扇状地中位面〔バリノ・松元・田中・辻2007〕で、標高は約20～30mを測る。第100地点から約20m北東方に位置する第69地点〔第57集〕や第89地点〔第69集〕では、弥生時代後期後半まで遡る芦屋川の河岸段丘座と考えられる崖状地形が検出されており、月若遺跡分布範囲の東限となっている。このことから、第100地点は少なくとも弥生時代後期後半以降、扇状地の東端に近い位置にあったといえる。第98地点は、第100地点から約30m北西に位置しており、現地表面において第98地点（標高約24.5m）の方が第100地点（標高約22.5m）よりも約2m高くなっている。

縄文時代 第98地点において、縄文時代晩期前半のものと考えられる土器片が1点出土している（第17図6）。ただし、擾乱からの出土であり、遺構や遺物包含層は確認されていない。

月若遺跡においては、出土点数は少ないながら縄文時代の遺物の出土例が広い範囲で確認されている。それらをみると、第2地点の土器片1点（北白川C式）、第10地点の石鏃2点〔六甲山麓遺跡調査会1993〕、第13地点の楔形石器2点と早期末～前期の土器片49点〔六甲山麓遺跡調査会1993〕、第18地点の土器片十数点（中期～後期）、第19地点の石鏃1点と土器片3点〔第26集〕、第69地点の石鏃1点〔第57集〕、第70地点の石鏃2点〔第57集〕、第71地点の石鏃1点〔第51集〕、第81地点の土器片6点（北白川C式）〔第62集〕、第83地点の石鏃7点と土器片6点（北白川C式）〔第68集〕、第96地点の石鏃2点と土器片1点（早期）〔第76集〕などがある。なお、第70地点では、報告書に記載されていないが、SD201出土の遺物の中に中期のものと考えられる土器片1点を確認している。

また、月若遺跡第98地点の西方に隣接する寺田遺跡第181地点では、第5遺構面から縄文時代晩期中

葉のものと考えられる土坑7基、集石土坑1基、ピット5基、自然流路1条が検出され、早期末と考えられる土器片4点、晩期中葉（篠原式）の土器片1点が出土している〔第62集〕。さらに、第98地点の南西側に隣接する寺田遺跡第139地点の第5遺構面においても、晩期中葉（篠原式）のピット約20基、土坑19基、河道1条が検出され、石鏃1点、土器片2点が出土している〔第45集〕。

弥生時代 第98地点では、第3・4遺構面において弥生時代後期後半～終末期のピット・土坑、溝4条（SD04～07）などが検出された。また、遺物の中に弥生時代中期のものと考えられる弥生土器の底部が認められる。周辺の既往調査との関係を見ると、本地点の第4遺構面で検出されたSD04は南側に隣接する月若遺跡第83地点のSD201およびSD202に、同遺構面SD05は第83地点のSD203に連続するものである〔第68集〕。第83地点の両溝ともに、弥生時代後期後半の土器が完形に近い状態で多数出土している。第98地点の南西側に隣接する寺田遺跡第139地点においては、第3遺構面から弥生時代後期後半の遺構・遺物、第4遺構面から弥生時代中期前葉の遺構・遺物が確認されている。

第100地点では、第2遺構面において弥生時代後期後半～終末期のものと考えられる堅穴住居跡1棟（SH01）や多数のピット・土坑、溝1条（SD05）、落ち込みが検出された。SD05から出土した土器の中には、内面に赤色顔料が付着する鉢が認められた（第43図81）。また、中河内地域からの搬入品（第43図66・70、第44図94）が認められる。周辺の既往調査との関係を見ると、本地点のSD05は、北方に位置する月若遺跡第81地点のSD203〔第62集〕および月若遺跡第102地点のSD02〔第84集〕と連続するものであり、本地点から南南西に位置する寺田遺跡第128地点のSD04〔第47集〕にも連続する可能性がある。第100地点の北東に位置する月若遺跡第96地点では、弥生時代後期後半～古墳時代前期のものと考えられるピットから小銅鐸が出土している〔第76集〕。

なお、第100地点を含む月若遺跡の南東部では、SD05より東方において遺構数・遺物数ともに減少していることから、弥生時代後期後半頃の集落の東端付近と考えられる。

古墳時代 古墳時代～飛鳥時代までの遺構・遺物について記す。第98地点では、第4遺構面において古墳時代後期もしくは飛鳥時代の堅穴住居跡2棟（SH06・07）やピット・土坑、第3遺構面において古墳時代後期もしくは飛鳥時代の堅穴住居跡1棟（SH05）やピット・土坑、第2遺構面において古墳時代後期もしくは飛鳥時代の堅穴住居跡3棟（SH01～04。ただし、SH01・02は同一の住居跡）、多数のピット・土坑、木棺墓の可能性のある土坑（SK17）などが検出されている。周辺の既往調査との関係を見ると、第98地点の第2遺構面は、南側に隣接する第83地点の第1遺構面〔第68集〕、西側に隣接する寺田遺跡第181地点の第2遺構面〔第62集〕、南西側に隣接する寺田遺跡第139地点の第2遺構面〔第45集〕に対応するものと考えられる。これらの地点からも、集落に伴う遺構が数多く検出されている。その中で、第98地点のSH01・02は、寺田遺跡第181地点のSB201と同一の堅穴住居跡と考えられる。なお、寺田遺跡第139地点の古墳時代後期末～飛鳥時代の堅穴住居跡であるSB202は、フィゴ羽口や鉄滓、砥石、滑石製紡錘車などの特殊遺物を伴っている。また、月若遺跡第83地点においても、古墳時代後期末～古代の鉄滓が出土している。

第100地点では、第2遺構面において古墳時代前期もしくは中期のものと考えられる溝1条（SD03）、古墳時代後期～飛鳥時代の掘立柱建物1棟（SB01）や多数のピット・土坑が検出された。周辺の既往調査の結果との関係は、月若遺跡第70地点の第2遺構面〔第57集〕、第81地点の第1遺構面〔第62集〕、第96地点の第1遺構面（SR02・03埋没前）および第2遺構面〔第76集〕に対応している。第100地点のSD03は、遺物がほとんど出土せず、詳細な時期は不明である。ほぼ真北から真南にのびており、そ

のまま第81地点のS D105、第70地点のS D202に連なって真北にのびている。その他に、当地域において古墳時代前期の遺構はほとんど検出されていないが、第96地点においては古墳時代前期の円筒埴輪片が出土しており、埴輪円筒棺があった可能性が考えられている〔第76集〕。

第100地点とその周辺で出土した古墳時代の土器類をみると、後期末から飛鳥時代のものが主体で、中期のものは確認されていない。このことから、この地域は7世紀頃より集落となったと考えられる。

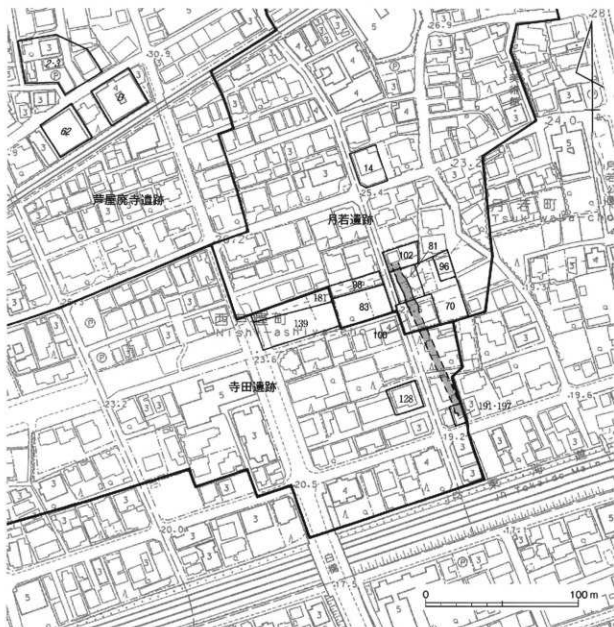
古代 第98地点では第2遺構面において白鳳文化期～奈良時代のビットや土坑が検出された。その中で、S P18およびS K04・06からは、古代の瓦片が多数出土している。これらには、規模から土坑として把握したが、本来はすべて建物の柱穴である可能性が高い。なお、西側に隣接する寺田遺跡第181地点においては、ビット（S P1009・1064）から単弁八弁蓮華文高句麗様式軒丸瓦片や法隆寺式の均正忍冬唐草文軒平瓦を含む瓦片が多数出土している。これらは芦屋廃寺跡の創建期の瓦当と同型式である。また、月若遺跡第83地点でも古代の平瓦片が出土しており、その他に円面硯も出土している。これらの遺物からは、第98地点を含む当地域に芦屋廃寺跡に先行するか、もしくは創建期にあたる7世紀代の古代寺院や官衙に関連する施設などがあったと推測できる。

第100地点では、第2遺構面より白鳳文化期～平安時代の遺構が検出されている。その中で、7世紀後半頃に開削された古代の大溝であるS D01からは、単弁八弁蓮華文高句麗様式軒丸瓦（第46図121）や法隆寺式の複弁八弁蓮華文軒丸瓦（第45図112、第46図120）、均正忍冬唐草文軒平瓦（第45図113）を含む多数の古代瓦（第45・46図）や、多数の鉄滓（図版43⑧～⑨）、被熱により一部が黒色を呈する石材（図版43⑩）、製塩土器（図版43③）など、特徴的な遺物が数多く出土している。さらに、溝は、北北西に位置する月若遺跡第102地点のS D01〔第84集〕および月若遺跡第81地点のS D101〔第62集〕と、南南東に位置する寺田遺跡第197地点のS R05〔第84集〕と連続するものと考えられ、これらを合わせると北北西から南南東に少なくとも110mの距離を直線的にのびているものと推測される（第47図）。これら各地点の溝内からも瓦片や鉄滓などが出土している。さらに、第100地点の北東方に近在する第96地点では、同型式の複弁八弁蓮華文軒丸瓦を含む古代の瓦片や8世紀代の多数の製塩土器片などが出土している。これらの遺構・遺物からは、第98地点と同じく、7世紀代の古代寺院や工房をはじめとする官衙の関連施設が存在したと考えられる。

第98・100地点から出土した瓦について記すと、瓦当は芦屋廃寺跡の創建期の瓦当と同型式のものに限られ、さらに現時点では芦屋廃寺跡より月若遺跡（第96・98・100地点）および寺田遺跡（第181地点）の方が出土点数は多い。また、平瓦においては、凹面に布目痕、凸面に縄目タタキが見られるものが主体である芦屋廃寺跡の瓦とは異なる様相をもった多種類のものが確認されている。芦屋廃寺跡と比べると薄いものが目立つ点も特徴として挙げられる。

中世 平安時代末～中世の遺構・遺物について記す。第98地点では、第1遺構面より中世の耕作地に伴う溝（S D01・02）や犁痕などが検出された。周辺では、月若遺跡第83地点の第1遺構面において鎌倉時代の掘立柱建物1棟（S B104）や多数のビット・土坑が検出されている〔第68集〕。南西側に隣接する寺田遺跡第139地点では、平安時代末～鎌倉時代前半にかけての掘立柱建物6棟をはじめ、多数の遺構が検出されている〔第45集〕。さらに、当地点からは福建省磁灶窯系と考えられる平安時代末（12世紀後半）の黄釉鉄絵盥が出土している。

第100地点では、調査区北東部で検出された8基のビットと、第100地点に隣接する第70地点のS B104、第81地点のS B104などを合わせて、同一の掘立柱建物である可能性を推定し、少なくとも東西5



第47図 月若遺跡南部・寺田遺跡東部の古代溝推定図 1 / 2500
 (ゴチック体は月若遺跡、明朝体は寺田遺跡、斜体は芦屋廃寺遺跡の調査地点番号を示す。)

間(約11m)、南北5間(約9.5m)の総柱の掘立柱建物であるSB02を復元した(第48図)。当建物の時期は11世紀末～12世紀初頭頃のものと考えられる。なお、SD04はSB02に伴う溝である可能性が高い。阪神間で検出されている古代末から中世の掘立柱建物と比較してみると〔森岡2005〕、SB02の規模は最大級のものとなる。さらに、第100地点やその周辺において検出されている平安時代末～鎌倉時代の遺構では、第70地点第1遺構面の堀状遺構(SX103)や掘立柱建物(SB101～104)、溝(SD102)、第81地点第1遺構面の掘立柱建物(SB101)、第96地点の掘立柱建物(SB01)、井戸(SE01)、庭園遺構の一部になる可能性が高い護岸遺構(SR02-1)、溝(SD03～05)などがある。これらの存在から、本調査地点周辺においては、平安時代末～鎌倉時代頃に、堀により区画され、その内側には中心施設や付属施設、井戸、庭園などが設けられていたものと考えられる。なお、これら遺構群の性格については、今後の課題とする。



第48図 月若遺跡第70・81・96・100地点の平安時代末～鎌倉時代の遺構 1 / 300
 ([第57・62・76集] および本書掲載の遺構平面図を合成して作成。)

近世および近現代 近世の遺構としては、第98地点の第1遺構面で検出された流路1条 (S R01)、第100地点の第1遺構面で検出された暗渠1条が挙げられる。その他は犁痕などが認められたが、明瞭な遺構は確認されていない。これらに加えて、土層の観察などにより、中世後半から明治時代にわたって耕作地であったと考えられる。このことは、寛政8年 (1796) に刊行された『摂津名所図会』[臨川書店1996] において調査地付近が田畠として描かれていることや、大日本帝国参謀本部陸軍部測量局による明治18年 (1885) 測量の2万分の1仮製地形図「西宮」[清水編1995] において水田となっていることから確認できる。

また、第100地点の第1遺構面では、近現代の住宅に伴う遺構群が検出された。これらの時期は、地形図から読み取る限り、大日本帝国陸地測量部による大正12年（1923）測図、昭和7年（1932）要部修正の1万分の1地形図「芦屋」において宅地となっており〔清水編1995〕、大正時代から戦後にかけてのものと考えられる。なお、第100地点では鉾津煉瓦で築かれた家庭用と考えられる防空壕跡が1基検出されている。これまでに市内では発掘調査によって防空壕跡と考えられる遺構が16基、現存するものが2基確認されている〔竹村2009・2010〕。これらの大半は家庭用防空壕と考えられる。それらの構造をみると、地下式のものには、素掘りで木材による柱などを設けるもの、石材で壁を補強するもの、煉瓦積みの壁のものが確認されている。その他に、コンクリート管を横位に埋設したものや横穴式石室を改造したものがある。そのような中で、今回検出された防空壕跡は、煉瓦積みの壁をもつものということになり、市内の家庭用防空壕では最も類例の多いものである。

地震痕跡 第98地点と第100地点の両地点において、地震痕跡である砂脈が検出されている。第98地点では、調査区東部の第1遺構面において南北方向に走るものが数条検出されている。地震の発生時期については、18世紀の流路より古いものであることが層序から明らかであるが、それより詳しい年代は不明である。

第100地点では、調査区北西部の第2遺構面において北東から南西に走る砂脈が2条検出されている。にぶい黄褐色砂礫層から極細粒砂～細粒砂が噴き上がったもので（第40図）、最大幅は約1cmを測る。当砂脈を生じさせた地震についても、層序から基本土層第9層の堆積以降に発生したことがわかるのみで、その発生時期を絞り込むことはできない。

なお、芦屋川扇状地上でこれまでに確認されている地震痕跡としては、慶長元年（1596）に起こった慶長・伏見地震に伴うものとして、芦屋廃寺遺跡第62地点の砂脈や地割れ〔寒川・森岡・竹村2001、芦屋市教委2006b〕、寺田遺跡第40地点の砂脈〔芦屋市教委2005a〕、寺田遺跡第119地点の地滑り痕〔第39集〕などが挙げられる。また、宝永4年（1707）に発生した宝永南海大地震に伴うものとしては、小阪家住宅（芦屋廃寺遺跡第45地点）の砂脈がある〔芦屋市教委2005a〕。その他、時期不明であるが、月若遺跡第96地点においても砂脈が14条検出されている〔第76集〕。

結び 阪神・淡路大震災の復興事業である都市計画道路山手幹線街路事業に伴い、芦屋市教育委員会が試掘・確認調査を実施したのは、平成10年（1998）2月2日～3月2日であった。しかし、当時は膨大な数の震災復興に伴う調査が行われており、本市教育委員会はその対応に追われていた。そこで、山手幹線街路事業に伴う発掘調査は、平成12～18年度の間に、本市教育委員会に代わって事務委任を受けた神戸市教育委員会が調査機関となって実施された。その後、平成19年度からは芦屋市教育委員会が発掘調査を実施し、本書で報告した平成21年度の発掘調査をもって当事業に関わるすべての発掘調査が完了した。そして、山手幹線は、平成22年（2010）10月24日に全線が開通した。

山手幹線街路事業に伴う発掘調査は、合計37地点に及び、調査面積の合計は14,595㎡に達した（試掘・確認調査を含む）。そして、その成果は発掘調査報告書〔芦屋市教委2005c、第43・45・57・59・62・68・69・74・76・86集〕としてまとめられ、刊行されている。

今後は、出土遺物が積極的に公開されるとともに、これらの発掘調査の成果を基に本市の歴史が明らかにされていくことを望む。

引用・参考文献

- 芦屋市教育委員会 1956 『芦屋市史』 本編
- 芦屋市教育委員会 1985 『増補会下山遺跡』
- 芦屋市教育委員会 2005a 『平成8年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査－震災復興に伴う埋蔵文化財緊急確認・本発掘調査－実績報告書集』＜芦屋市文化財調査実績報告集1＞
- 芦屋市教育委員会 2005b 『平成9・10年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査－震災復興に伴う埋蔵文化財緊急確認・本発掘調査－実績報告書集』＜芦屋市文化財調査実績報告集2＞
- 芦屋市教育委員会 2005c 『平成9年度 都市計画道路山手幹線・川西線整備事業に伴う埋蔵文化財確認調査実績報告書 寺田遺跡第103地点・月若遺跡第49地点・桑平遺跡第43地点・大原遺跡第32地点・打出岸造り遺跡第24地点 平成10年3月』『平成9・10年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査－震災復興に伴う埋蔵文化財緊急確認・本発掘調査－実績報告書集』＜芦屋市文化財調査実績報告集2＞
- 芦屋市教育委員会 2006a 『平成11・12年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査－震災復興に伴う埋蔵文化財緊急確認・本発掘調査－実績報告書集』＜芦屋市文化財調査実績報告集3＞
- 芦屋市教育委員会 2006b 『平成11年度国庫補助事業 芦屋庵寺遺跡（第62地点）発掘調査実績報告書－震災復興調査－平成12年2月』『平成11・12年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査－震災復興に伴う埋蔵文化財緊急確認・本発掘調査－実績報告書集』＜芦屋市文化財調査実績報告集3＞
- 芦屋市役所 1971 『新修芦屋市史』 本篇
- 芦屋市役所 1976 『新修芦屋市史』 資料編1
- 芦屋市役所 1986 『新修芦屋市史』 資料編2
- 伊野近富 1995 『土師器Ⅲ』『概説 中世の土器・陶磁器』 真陽社
- 大阪府立近つ飛鳥博物館 2006 『年代のものとさしー陶器の須恵器ー』（平成17年度冬季企画展／重要文化財指定記念）＜大阪府立近つ飛鳥博物館図録40＞
- 財団法人古代学協会 1985 『芦屋市 寺田遺跡発掘調査報告書』
- 来川 旭・森岡秀人・竹村忠洋 2001 『芦屋庵寺跡建物基壇に関わる地震痕跡』『日本考古学』第12号 日本考古学協会
- 清水靖夫 編 1995 『明治前期・昭和前期 神戸都市地図』 柏書房
- 高山歴史学研究所 2001 『兵庫県芦屋市 寺田遺跡（第135地点）』＜高山歴史学研究所文化財調査報告書第7冊＞
- 高山歴史学研究所 2003 『兵庫県芦屋市 月若遺跡（第67地点）』＜高山歴史学研究所文化財調査報告書第10冊＞
- 竹村忠洋 2009 『兵庫県芦屋市で発掘された防空壕跡』『考古学の視点 兵庫発掘の考古学 間壁霞子先生喜寿記念論文集（献呈篇）』 間壁霞子先生喜寿記念論文集刊行会
- 竹村忠洋 2010 『芦屋市の戦争遺跡』『歴史と神戸』第49巻第6号 特集戦争の記憶と記録2 神戸史学会
- 田辺昭三 1981 『須恵器大成』 角川書店
- 桑平52地点遺跡調査会 2001 『桑平遺跡第52地点発掘調査報告書』
- パリオ・サーヴェイ株式会社・松元美由紀・田中義文・辻 康男 2007 『芦屋川水車場跡出土遺物自然科学分析』『芦屋川水車場跡発掘調査報告書－城山古墳群第20号墳と芦屋川水車場跡の発掘調査』

- 査成果」＜芦屋市文化財調査報告第71集＞ 芦屋市教育委員会
- 兵庫県教育委員会 1997 『芦屋市所在三条九ノ坪遺跡－被災マンション等再建事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』＜兵庫県文化財調査報告第168冊＞
- 兵庫県教育委員会 2003 『芦屋市 六条遺跡』＜兵庫県文化財調査報告第256冊＞
- 兵庫県教育委員会 2004 『兵庫県遺跡地図』
- 細川道草 1963 『芦屋郷土誌』 芦屋史談会
- 武藤 誠・有坂隆道・末中哲夫・村川行弘 編 1971 『新修芦屋市史』本篇 芦屋市役所
- 武藤 誠・有坂隆道・末中哲夫・村川行弘 編 1976 『新修芦屋市史』資料篇1 芦屋市役所
- 森 隆 1995 「黒色土器」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- 森岡秀人 1999 「摂津における土器交流拠点の性格－真正弥生時代と庄内式期を比べて－」『庄内式土器研究』XXI－庄内式併行期の土器交流拠点－「摂津・播磨地域」庄内式土器研究会
- 森岡秀人 2001a 「弥生集落の新動向(Ⅳ)－小特集「兵庫県東南部における集落の様相」に寄せて－」『みずほ』第35号 大和弥生の会
- 森岡秀人 2001b 「摂津国菟原郡葦屋郷・賀美郷考証覚書」『考古学論集』第5集 考古学を学ぶ会
- 森岡秀人 2002 「摂津・八十塚古墳群と菟原郡葦屋郷・賀美郷周辺の古代史」『八十塚古墳群の研究』＜関西大学文学部考古学研究第7冊・芦屋市文化財調査報告第33集＞ 関西大学文学部考古学研究室
- 森岡秀人 2003a 「古代摂津国菟原郡葦屋郷・賀美郷と寺田遺跡」『平成12・13年度国庫補助事業 寺田遺跡(第128地点)発掘調査報告書－集落東端部の様相と知見－』＜芦屋市文化財調査報告第47集＞ 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 2003b 「考古学と古代史からみた摂津国菟原郡東部の8世紀史と藤ヶ谷古墓の占める位置」『摂津・藤ヶ谷古墓－藤ヶ谷遺跡第五地点・古代火葬墓の調査－』＜芦屋市文化財調査報告第48集＞ 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 2003c 「寺田遺跡における掘立柱建物と本地点の建物SH01について」『平成12・13年度国庫補助事業 寺田遺跡(第128地点)発掘調査報告書－集落東端部の様相と知見－』＜芦屋市文化財調査報告第47集＞ 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 2005 「調査のまとめと分析」『津知遺跡の発掘調査－第157地点における条里地割内の様相－』＜芦屋市文化財調査報告第49集＞ 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 2007 「葦屋駅家と古代山陽道路線諸説をめぐっての一試行」『考古学論究－小笠原好彦先生退任記念論集－』真陽社
- 森岡秀人・竹村忠洋 2006 「西摂地域」『古式土師器の年代学』財団法人大阪府文化財センター
- 森田 稔 1995 「中世須恵器」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- 臨川書店 1996 『摂津名所図会』＜版本地誌大系10＞(秋里龍馬著、竹原春朝画、寛政8年[1796]刊行)
- 六甲山麓遺跡調査会 1992 『芦屋市 大原遺跡－第3地点－』
- 六甲山麓遺跡調査会 1993 『芦屋市 月若遺跡－第10地点・第13地点－』

芦屋市文化財調査報告目録

- 第1集 『芦屋市史追録』第1号 有板隆道 編 村川行弘 著 1959年4月28日刊行
- 第2集 『大阪城と芦屋』 村川行弘ほか 1962年3月31日刊行
- 第3集 『会下山遺跡』 村川行弘・石野博信ほか 1964年3月31日刊行
- 第4集 『朝日ヶ丘縄文遺跡 八十塚古墳群』 村川行弘・橋爪康至・藤岡 弘・安田博幸 1966年4月15日刊行
- 第5集 『芦屋市埋蔵文化財包蔵地台帳 八十塚E号墳発掘調査報告書』 村川行弘・佐々木幸雄・藤岡 弘
1967年3月7日刊行
- 第6集 『郷土資料室文化財所蔵目録 石造遺品分布調査報告』 藤岡 弘・芦の芽グループ 1968年3月31日刊行
- 第7集 『芦屋廃寺址』 村川行弘・藤岡 弘 1970年3月31日刊行
- 第8集 『朝日ヶ丘縄文遺跡 会下山弥生遺跡』 藤井祐介・森岡秀人 1974年3月31日刊行
- 第9集 『第2章 民家・民具の調査』『芦屋の生活文化史-民俗・史跡をたずねて-』 田辺眞人ほか 1979年3月31日刊行
- 第10集 『三条岡山遺跡』 森岡秀人 編 1979年8月31日刊行
- 第11集 『芦屋・八十塚古墳群岩ヶ平支群の調査』 森岡秀人・古川久雄 編 1979年11月30日刊行
- 第12集 『芦屋市埋蔵文化財遺跡分布地図及び地名表(第1分冊)』 森岡秀人 編 1980年3月31日刊行
- 第13集 『兵庫県芦屋市六麓荘町174番地所在 八十塚古墳群発掘調査概報-岩ヶ平支群F小支群西地区の緊急調査成果概要-』 森岡秀人 編 1983年3月31日刊行
- 第14集 『埋蔵文化財調査メモリアル '80~'85』 森岡秀人 編 1986年3月31日刊行
- 第15集 『昭和62年度国庫補助事業 芦屋廃寺遺跡G・I地点発掘調査概要報告書』 森岡秀人・和田秀寿・関野 豊 編 1988年3月31日刊行
- 第16集 『芦屋市埋蔵文化財包蔵地分布地図 利用の手引き』 森岡秀人 編 1988年3月31日刊行
- 第17集 『昭和63年度国庫補助事業 芦屋廃寺遺跡K地点・寺田遺跡第16次地点発掘調査概要報告書』 森岡秀人・和田秀寿・後神 泉 編 1989年3月31日刊行
- 第18集 『三条九ノ坪遺跡-第2地点発掘調査簡報-』 森岡秀人・和田秀寿・後神 泉 編 1990年3月31日刊行
- 第19集 『平成元年度国庫補助事業 寺田遺跡第20次地点 金津山古墳後円部範囲・構造確認調査 三条九ノ坪遺跡第4地点 発掘調査概要報告書』 森岡秀人・和田秀寿・後神 泉 編 1990年3月31日刊行
- 第20集 『芦屋市八十塚古墳群岩ヶ平支群第10号墳の調査-古墳損壊に伴う確認調査の結果-』 古川久雄 編
1990年12月28日刊行
- 第21集 『平成2年度国庫補助事業 寺田遺跡第23次地点 寺田遺跡第24次地点 寺田遺跡第25次地点 寺田遺跡第27次地点 芦屋廃寺遺跡M地点 芦屋廃寺遺跡N地点 発掘調査概要報告書』 森岡秀人・松村朋世・後神 泉 編 1991年3月31日刊行
- 第22集 『平成3年度国庫補助事業 芦屋廃寺遺跡ほか発掘調査概要報告書 月若遺跡第12次地点 月若遺跡第14次地点 八十塚古墳群岩ヶ平支群第50号墳』 森岡秀人・白谷朋世 編 1992年3月31日刊行
- 第23集 『平成4年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書 打出小槌遺跡第7次地点 打出小槌遺跡第2次地点 打出小槌遺跡第3次地点』 森岡秀人・白谷朋世 編 1993年3月31日刊行
- 第24集 『芦屋市埋蔵文化財包蔵地分布地図および利用の手引き』 森岡秀人・和田秀寿・白谷朋世 編 1993年

3月31日刊行

- 第25集 『平成5年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書 六藍荘町94番地（八十塚古墳群・徳川氏大坂城岩ヶ平採石場）』 森岡秀人・白谷朋世 編 1994年3月31日刊行
- 第26集 『平成6年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書 月若遺跡（第19地点）』 森岡秀人 編 1995年3月31日刊行
- 第27集 『平成7年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査－震災復興に伴う埋蔵文化財緊急確認（試掘）調査－概要報告書 寺田遺跡（第40・41・47・52・55・57地点） 芦屋廃寺遺跡（W地点・第29・38地点） 月若遺跡（第20・25・28・30・33地点） 打出岸造り遺跡（第1地点） 打出小輪遺跡（第17地点） 金津山古墳（第9地点） 久保遺跡（第15地点） 山芦屋遺跡（S8地点）』 森岡秀人・木南アツ子 編 1996年3月31日刊行
- 第28集 『平成7年度国庫補助事業 阪神・淡路大震災復興・復興事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書 芦屋廃寺遺跡（W地点） 芦屋廃寺遺跡（第29地点） 月若遺跡（第20地点） 月若遺跡（第28地点） 打出岸造り遺跡（第9地点） 久保遺跡（第15地点）』 森岡秀人 編 1996年3月31日刊行
- 第29集 『月若遺跡（第18地点）発掘調査報告書』 森岡秀人 編 1995年3月31日刊行
- 第30集 『若宮遺跡（第1・2地点）発掘調査報告書－震災復興住環境整備事業（芦屋市若宮町住宅1号館建設）に伴う埋蔵文化財事前調査の成果－』 森岡秀人・竹村忠洋 編 1999年8月31日刊行
- 第31集 『徳川大坂城東六甲採石場Ⅰ－芦屋墓園拡張工事に伴う奥山刻印群K地区内の事前発掘調査－』 森岡秀人 編 1998年3月31日刊行
- 第32集 『寺田遺跡第95地点発掘調査概要報告書 阪神・淡路大震災復興に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果』 重藤輝行・竹村忠洋 編 1999年9月30日刊行
- 第33集 『八十塚古墳群の研究』＜関西大学文学部考古学研究第7冊＞ 網干善教・米田文孝・竹村忠洋・太田宏明・海邊博史 編 関西大学文学部考古学研究室 2002年3月31日刊行
- 第34集 『津知遺跡第17地点発掘調査概要報告書－芦屋西部第二地区土地区画整理事業（津知第2公園）に伴う震災復興調査－』 竹村忠洋 編 1999年3月31日刊行
- 第35集 『芦屋廃寺遺跡（第53地点）・寺田遺跡（第104地点）震災復興埋蔵文化財確認調査概要報告書 津知川排水区雨水管敷設工事（東川用水路推定地）に伴う確認調査』 森岡秀人・竹村忠洋・古川久雄 編 1999年3月31日刊行
- 第36集 『三条岡山遺跡－第11地点発掘調査概要－』 渡辺 界 編 1998年12月15日刊行
- 第37集 『津知遺跡（第19地点） 従前居住者用住宅（（仮称）津知町住宅）新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－震災復興事業－』 篠宮 正 編 2000年3月31日刊行
- 第38集 『若宮遺跡（第3・4・10・11・16・17・25・31・32・33・34地点）発掘調査概要報告書－若宮地区住環境整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果－』 竹村忠洋 編 2002年3月31日刊行
- 第39集 『寺田遺跡（第117～124地点）発掘調査概要報告書 都市計画道路川西線建設に伴う発掘調査－震災復興調査－』 山田清朝 編 2001年3月31日刊行
- 第40集 『芦屋市埋蔵文化財包蔵地分布地図利用の手引き』 森岡秀人・竹村忠洋 編 2001年3月31日刊行
- 第41集 『六条遺跡発掘調査報告書－芦屋西部第一地区震災復興土地区画整理事業、清水公園建設事業に伴う六条遺跡（第17・18地点）の事前調査記録－』 森岡秀人・坂田典彦 編 2002年2月28日刊行
- 第42集 『平成13年度国庫補助事業 徳川大坂城東六甲採石場Ⅱ 岩ヶ平刻印群（第11次）発掘調査報告書』 古川久雄 編 2002年3月31日刊行
- 第43集 『兵庫県芦屋市 寺田遺跡発掘調査報告書 第127・130・132・133地点－都市計画道路山手幹線街路事業

- に伴う発掘調査-」 前田佳久・平田朝子・中居さやか 芦屋市・芦屋市教育委員会 2002年3月31日刊行
- 第44集 『徳川大坂城東六甲採石場Ⅲ 岩ヶ平刻印群(第12次)発掘調査報告書-芦屋市六麓荘浄水場高区配水池(水道施設)築造工事に伴う唐津藩採石場跡の発掘調査-』 古川久雄 編 2003年2月28日刊行
- 第45集 『兵庫県芦屋市 寺田遺跡発掘調査報告書 第132・133・137・139・141・142地点-都市計画道路山手幹線街路事業に伴う発掘調査Ⅱ-』 前田佳久・千種 浩・佐伯二郎・平田朝子・中居さやか 芦屋市・芦屋市教育委員会 2003年3月31日刊行
- 第46集 『津知遺跡第142地点ほか発掘調査報告書-芦屋西部第二地区震災復興土地区画整理事業に伴う震災復興調査の成果-』 竹村忠洋・山内芳子 編 2003年3月31日刊行
- 第47集 『平成12・13年度国庫補助事業 寺田遺跡(第128地点)発掘調査報告書-集落東端部の様相と知見-』 森岡秀人・坂田典彦 編 2003年3月31日刊行
- 第48集 『摂津・藤ヶ谷古墓-藤ヶ谷遺跡第五地点・古代火葬墓の調査-』 森岡秀人 編 2003年3月31日刊行
- 第49集 『津知遺跡の発掘調査-第157地点における条里地割内の様相-』 森岡秀人・坂田典彦 編 2005年3月31日刊行
- 第50集 『津知遺跡(第181地点)発掘調査報告書-共同住宅建設事業に伴う遺跡西限部の様相把握-』 森岡秀人・坂田典彦 編 2004年5月31日刊行
- 第51集 『月若遺跡(第71地点)発掘調査報告書』 竹村忠洋・白谷朋世 編 2004年2月29日刊行
- 第52集 『前田公園建設事業に伴う前田遺跡(第20地点)発掘調査概要報告書-弥生前期水田跡の構造と水利動態-』 森岡秀人 編 2004年3月31日刊行
- 第53集 『三条岡山遺跡 第3地点発掘調査報告書(1981発掘記録)-中枢地区北部隣接地の様相と出土遺物-』 森岡秀人 編 芦屋市教育委員会・三条岡山遺跡発掘調査団 2005年3月31日刊行
- 第54集 『山芦屋遺跡S3地点発掘調査報告書-1982・新出の終末期古墳・三条5号墳とその性格-』 森岡秀人 編 山芦屋遺跡発掘調査団 2005年3月31日刊行
- 第55集 『津知遺跡(第198・222地点)発掘調査報告書-芦屋西部第二地区震災復興土地区画整理事業に伴う震災復興調査の成果-』 竹村忠洋 編 2004年3月31日刊行
- 第56集 『元塚発掘調査報告書』 竹村忠洋・白谷朋世 編 2005年3月31日刊行
- 第57集 『兵庫県芦屋市 月若遺跡発掘調査報告書 第68・69・70地点-都市計画道路山手幹線街路事業に伴う発掘調査Ⅲ-』 前田佳久・石島三和・中村大介ほか 芦屋市・芦屋市教育委員会 2004年3月31日刊行
- 第58集 『若宮遺跡(第42地点)発掘調査報告書-須恵器集中遺存地点の調査と成果-』 森岡秀人・坂田典彦 編 2005年3月31日刊行
- 第59集 『兵庫県芦屋市 寺田遺跡発掘調査報告書 第150~153・157~160・166~168地点-都市計画道路山手幹線街路事業に伴う発掘調査Ⅳ-』 川上厚志・阿部 功・中村大介 芦屋市・芦屋市教育委員会 2005年3月31日刊行
- 第60集 『徳川大坂城東六甲採石場Ⅳ 岩ヶ平石切丁場跡-宅地造成工事に伴う埋蔵文化財事前調査の記録と成果-』 森岡秀人・坂田典彦 編 2005年9月30日刊行
- 第61集 『徳川大坂城東六甲採石場Ⅴ 岩ヶ平刻印群(第85地点)発掘調査報告書-長州藩毛利家石切丁場跡における発掘調査の成果-』 竹村忠洋・白谷朋世 編 2006年3月31日刊行
- 第62集 『兵庫県芦屋市 栗平遺跡第61地点 月若遺跡第79・81地点 寺田遺跡第178・181地点 発掘調査報告書-都市計画道路山手幹線街路事業に伴う発掘調査Ⅴ-』 安田 滋 編 芦屋市・芦屋市教育委員会 2006年3月31日刊行

- 第63集 【八十塚古墳群（第106地点）発掘調査報告書－八十塚古墳群岩ヶ平支群第10号墳と徳川大坂城東六甲採石場岩ヶ平刻印群の調査－】 白谷朋世 編 2006年12月25日刊行
- 第64集 【徳川大坂城東六甲採石場Ⅵ 岩ヶ平刻印群発掘調査報告書 第32・33・45・67・70・79・81・91地点－平成9・11・14・15・16年度国庫補助事業－】 森岡秀人・竹村忠洋 編 2006年3月31日刊行
- 第65集 【平成12年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書－震災復興に伴う埋蔵文化財緊急確認・本発掘調査の成果－ 城山南麓遺跡（C・D地点） 西山町遺跡（第7地点） 芦屋廃寺遺跡（第71地点） 六条遺跡（第13地点） 津知遺跡（第24・31地点） 打出岸造り遺跡（第32地点） 四ツ塚（第7地点） うの塚（第1地点）】 森岡秀人・竹村忠洋 編 2007年3月31日刊行
- 第66集 【打出小槌遺跡（第41地点）発掘調査報告書】 竹村忠洋・白谷朋世 編 2007年3月31日刊行
- 第67集 【八十塚古墳群・岩ヶ平石切場（徳川大坂城東六甲採石場Ⅵ）－岩ヶ平第45・46・58号墳と第108地点の発掘調査成果－】 森岡秀人・坂田典彦 編 2007年3月31日刊行
- 第68集 【兵庫県芦屋市 月若遺跡発掘調査報告書 第83地点－都市計画道路山手幹線街路事業に伴う発掘調査Ⅵ－】 斎木 巖 編 芦屋市・芦屋市教育委員会 2007年3月31日刊行
- 第69集 【兵庫県芦屋市 月若遺跡発掘調査報告書 第89地点－都市計画道路山手幹線街路事業に伴う発掘調査Ⅶ－】 斎木 巖 編 芦屋市・芦屋市教育委員会 2008年3月31日刊行
- 第70集 【前田遺跡（第26地点）発掘調査報告書－弥生時代前期水田跡の北限域の状況－】 森岡秀人・坂田典彦 編 2007年6月30日刊行
- 第71集 【芦屋川水車場跡発掘調査報告書－城山古墳群第20号墳と芦屋川水車場跡の発掘調査成果－】 竹村忠洋・白谷朋世 編 2007年9月30日刊行
- 第72集 【平成13年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書－市内遺跡及び震災復興に伴う埋蔵文化財緊急確認・本発掘調査の結果－ 芦屋廃寺遺跡（第74・75・77・79地点） 寺田遺跡（第143地点） 六条遺跡（第43地点） 津知遺跡（第43・69地点） 大原遺跡（第45地点） 打出岸造り遺跡（第35地点）】 森岡秀人・竹村忠洋 編 2008年3月31日刊行
- 第73集 【平成18年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書－徳川大坂城東六甲採石場Ⅵ－ 三条会下遺跡（第2地点） 岩ヶ平刻印群（第122・124・126地点）】 森岡秀人・竹村忠洋 編 2008年3月31日刊行
- 第74集 【芦屋市山手幹線街路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の概要－総集編－】 山本雅和 編 芦屋市・芦屋市教育委員会 2008年3月31日刊行
- 第75集 【金津山古墳発掘調査報告書－第17地点で検出した外周壕の発掘調査成果－】 白谷朋世 編 2008年12月24日刊行
- 第76集 【兵庫県芦屋市 月若遺跡発掘調査報告書 第96地点－都市計画道路山手幹線街路事業に伴う発掘調査Ⅷ－】 竹村忠洋・守田めぐみ 編 芦屋市・芦屋市教育委員会 2009年3月31日刊行
- 第77集 【旭塚古墳 城山古墳群発掘調査報告書－第1・2次確認調査結果の概要と多角形終末期穴式石室墳の保存調査－】 森岡秀人・坂田典彦 編 2009年3月31日刊行
- 第78集 【平成14年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書－震災復興に伴う埋蔵文化財発掘調査とその成果－ 城山南麓遺跡（E・F・G地点） 冠遺跡（第23地点） 芦屋廃寺遺跡（第81・88地点） 月若遺跡（第74地点） 寺田遺跡（第144地点） 津知遺跡（第123・187地点） 打出岸造り遺跡（第38・39地点） 久保遺跡（第47・48地点） 打出小槌遺跡（第36・37地点）】 森岡秀人・竹村忠洋・坂田典彦 編 2009年3月31日刊行
- 第79集 【平成19年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査報告書 寺田遺跡（第191地点） 山芦屋遺跡（S14地

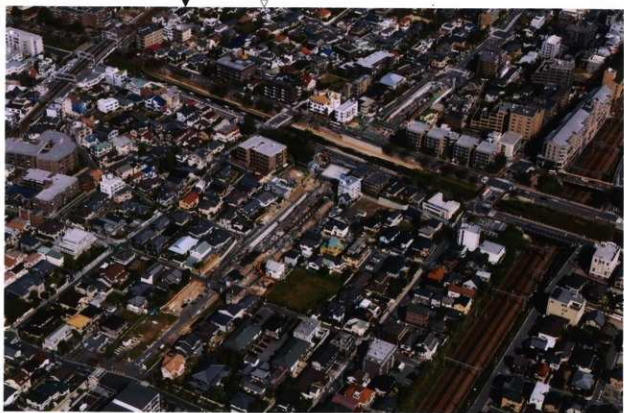
- 点)】 森岡秀人・竹村忠洋・守田めぐみ 編 2009年3月31日刊行
- 第80集 『芦屋市埋蔵文化財包蔵地分布地図利用の手引き』 森岡秀人・竹村忠洋・坂田典彦・白谷朋世 編
2009年4月1日刊行
- 第81集 『会下山遺跡出土遺物再整理基礎データ活用の手引き』 森岡秀人・竹村忠洋 編 2009年3月31日刊行
- 第82集 『三条岡山遺跡発掘調査報告書(第19地点)－片鱗をみせる中世居館と三条岡山古墳群－』 白谷朋世 編 2009年9月30日刊行
- 第83集 『平成15年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書 芦屋庵寺遺跡(第89地点) 寺田遺跡(第171地点) 清水遺跡(第22地点) 金津山古墳(第12地点)』 森岡秀人・竹村忠洋・坂田典彦・白谷朋世 編 2010年3月31日刊行
- 第84集 『平成20年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書 城山南麓遺跡(K地点) 芦屋庵寺遺跡(第108地点) 月若遺跡(第102地点) 寺田遺跡(第197地点) 岩ヶ平刻印群(第169地点)－徳川大坂城東六甲採石場X－』 森岡秀人・竹村忠洋・坂田典彦・白谷朋世 編 2010年3月31日刊行
- 第85集 『兵庫県芦屋市 会下山遺跡確認調査報告書－遺跡分布範囲の確認を目的とした第8～10次発掘調査の成果－』 森岡秀人・竹村忠洋・坂田典彦 編 2010年8月31日刊行
- 第86集 『兵庫県芦屋市 月若遺跡発掘調査報告書 第98・100地点－都市計画道路山手幹線街路事業に伴う発掘調査区－』 竹村忠洋 編 芦屋市・芦屋市教育委員会 2010年10月31日刊行
- 第87集 『兵庫県芦屋市 芦屋庵寺遺跡(第115地点)発掘調査概要報告書』 森岡秀人・竹村忠洋・坂田典彦・白谷朋世 編 2010年7月31日刊行

写真図版
P L A T E





大阪湾上空から芦屋市域をのぞむ（南から、平成21年10月21日撮影・芦屋市広報課提供）



月若遺跡とその周辺を俯瞰する

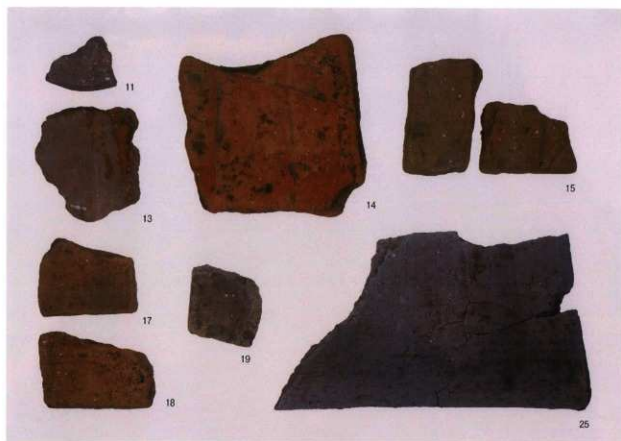
（南西から、▲の交点が月若遺跡第98地点、△の交点が第100地点、平成21年10月21日撮影・芦屋市広報課提供）



調査区西半（Ⅰ・Ⅱ区）第2遺構面全景（東から）



調査区東半（Ⅲ・Ⅳ区）第2遺構面全景（西から）



出土瓦 (凹面)



出土瓦 (凸面)



I区第2遺構面（発掘調査時の第1遺構面、西から）



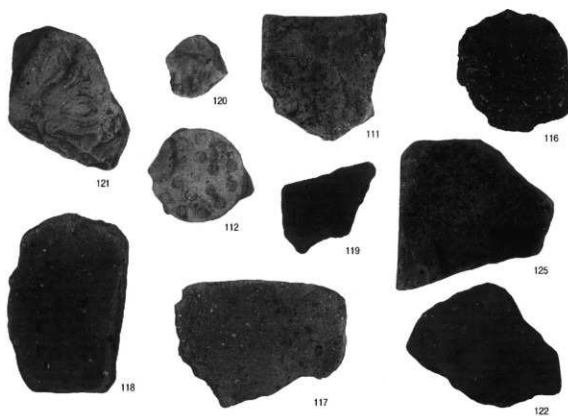
I区第2遺構面（発掘調査時の第2遺構面、西から）



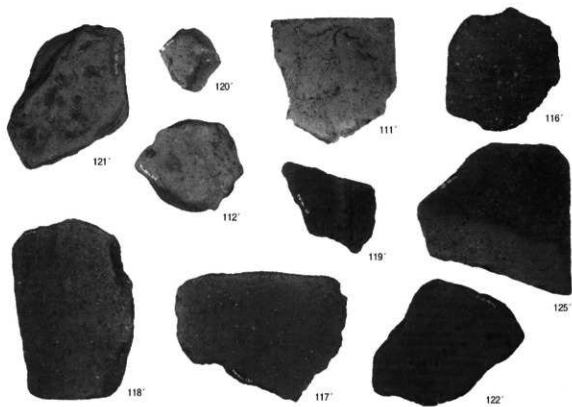
I区東壁土層断面（南西から）



SD01土層断面（北から）



S D01出土瓦 (凹面)



S D01出土瓦 (凸面)

調査地近景（北東から）

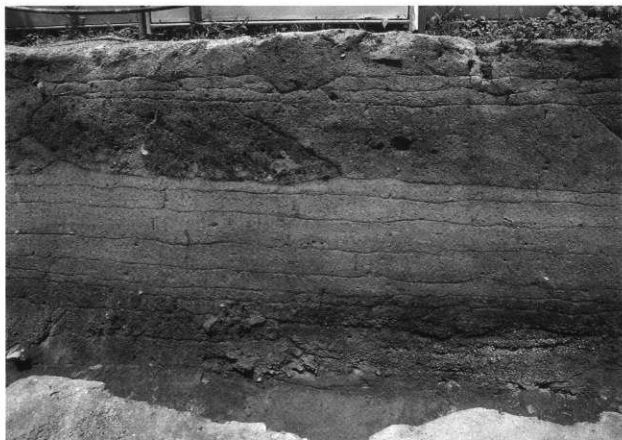


調査地近景（南東から）



盛土等除去後の調査地
（南西から）



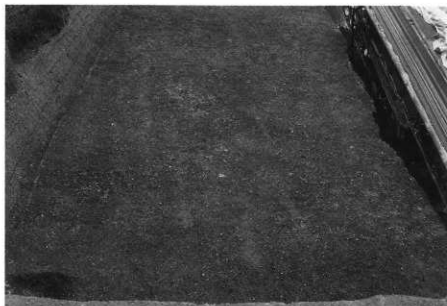


調査区西半（Ⅰ区）北壁土層断面（南から）



調査区東半（Ⅲ区）北壁土層断面（南から）

調査区西半(Ⅰ区)第1遺構面
(西から)

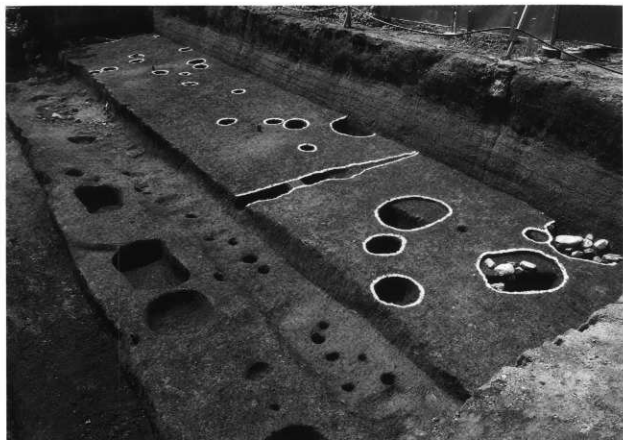


調査区東半(Ⅲ区)第1遺構面
(南から)



地震痕跡の砂脈(南から)





調査区西半（Ⅰ・Ⅱ区）第2遺構面（南東から）



調査区東半（Ⅲ・Ⅳ区）第2遺構面（西から）

SH02 (北から)



SH03 (南から)



SH04 (西から)

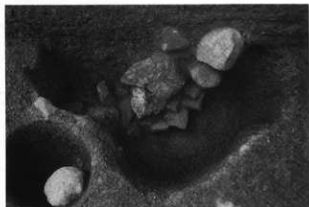




S K04・05 (東から)



S K04上部礫検出状況 (南から)



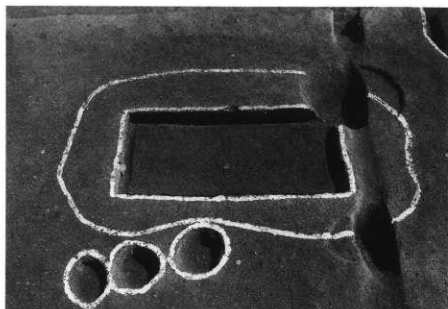
S K04下部瓦片検出状況 (南から)



S K04礫と瓦片 (南東から)



S K05土層断面 (東から)



SK17 (北から)



SK17 (東から)



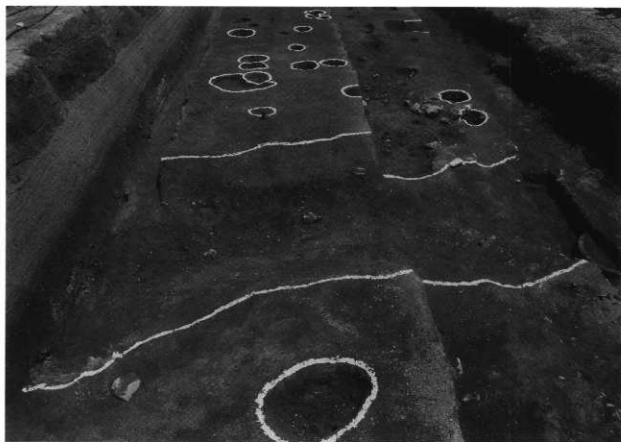
SK17土層断面 (東から)



調査区西半 (Ⅰ・Ⅱ区) 第3遺構面 (東から)



調査区東半 (Ⅲ・Ⅳ区) 第3遺構面 (北東から)



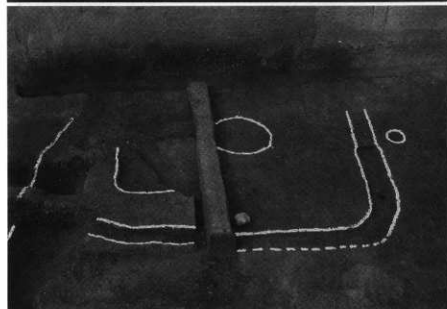
調査区西半（Ⅰ・Ⅱ区）第4遺構面（西から）



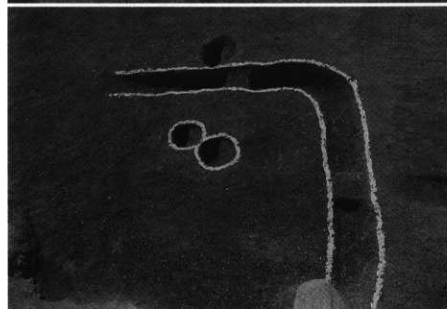
調査区東半（Ⅲ・Ⅳ区）第4遺構面（西から）



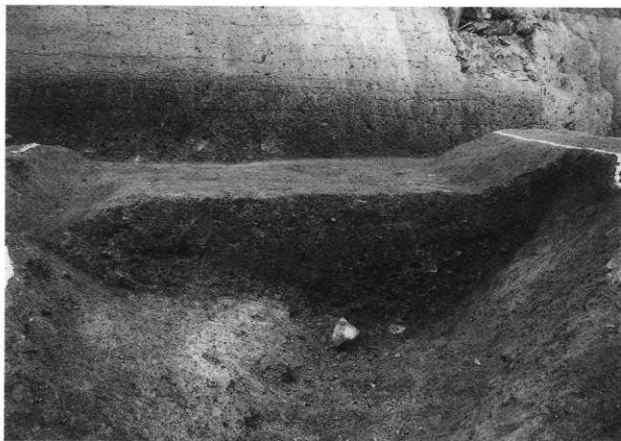
SH06・07 (南から)



SH06 (南から)



SH07 (東から)



S D05土層断面 (南から)



S P34土層断面 (南から)



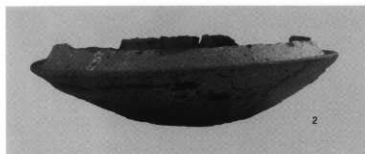
S K03土層断面 (南から)



S K26土層断面 (南から)



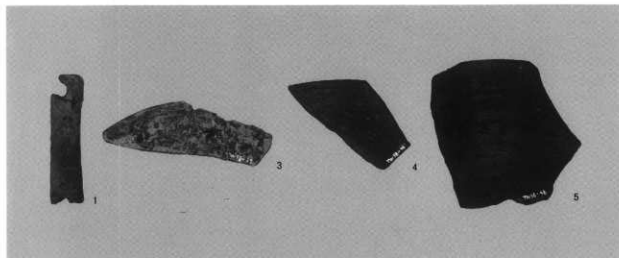
S D01土層断面 (南から)



S H02出土須恵器



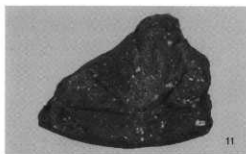
S K17出土須恵器



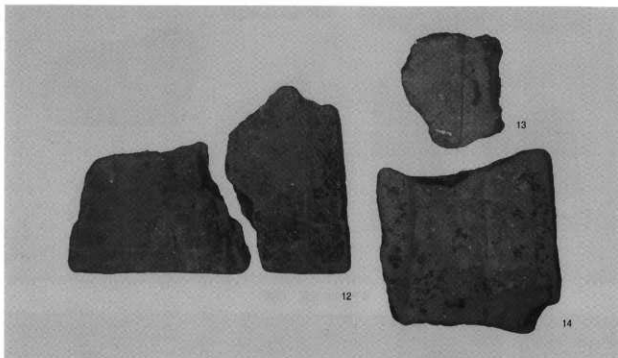
S H01・S K01出土遺物



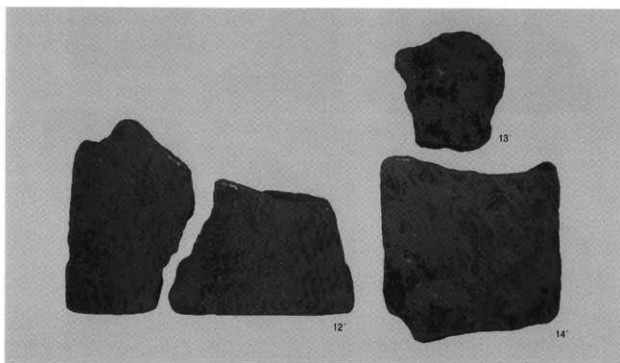
遺構に伴わない遺物



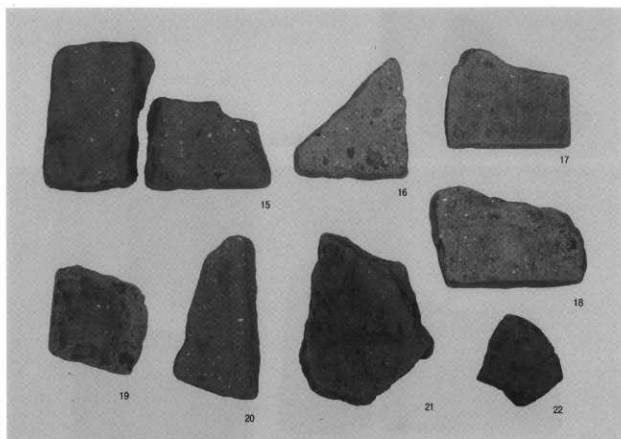
第11a層出土軒丸瓦



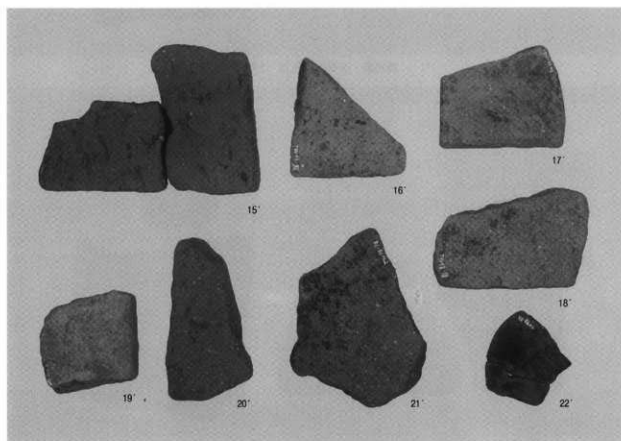
第15層・SH03出土瓦（凹面）



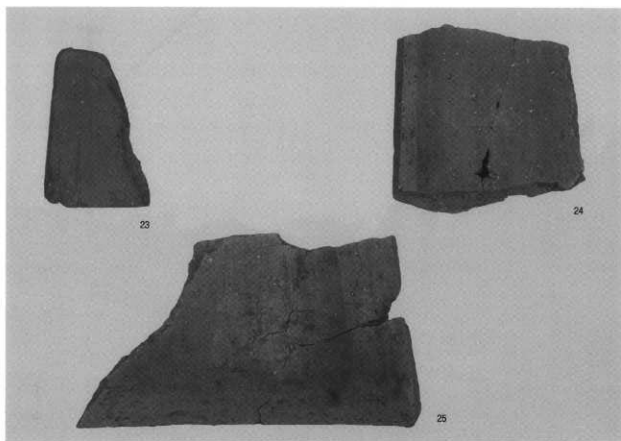
第15層・SH03出土瓦（凸面）



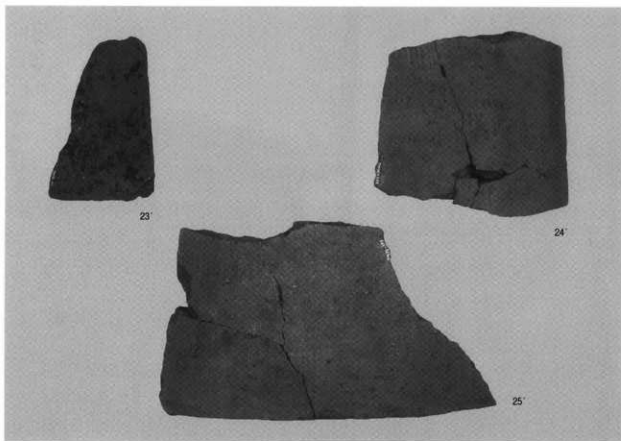
SK04出土瓦 (凹面)



SK04出土瓦 (凸面)



S K06出土瓦 (凹面)



S K06出土瓦 (凸面)



調査地近景（北西から）



調査地近景（南西から）

第1トレンチ（南西から）



第1トレンチ
西壁土層断面（東から）



第2トレンチ 防空壕跡
（北から）





I区南壁土層断面（北西から）



I区東壁土層断面（西から）



I区第1遺構面（東から）



I区第1遺構面（西から）



K G03・04（北東から）



K G05（東から）



I区東部窪痕（西から）



暗渠検出状況（北東から）



暗渠基底石（北東から）



暗渠土層断面（東から）



I区第2遺構面（発掘調査時の第1遺構面、西から）



I区第2遺構面（発掘調査時の第1遺構面、東から）



I区第2遺構面（発掘調査時の第2遺構面、西から）



I区第2遺構面（発掘調査時の第2遺構面、東から）



Ⅱ区第2遺構面（北から）



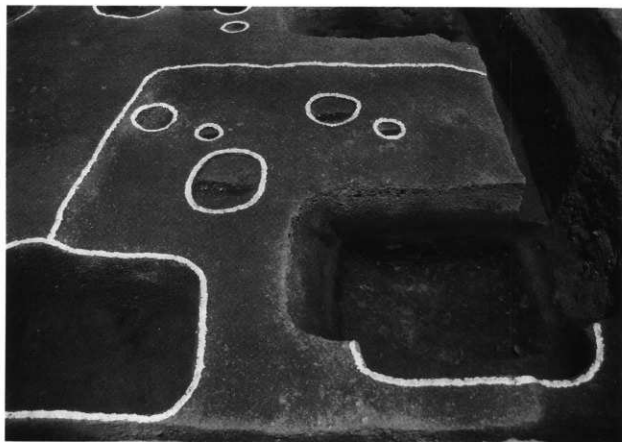
Ⅱ区第2遺構面（南から）



Ⅲ区第2遺構面（発掘調査時の第1遺構面、南東から）



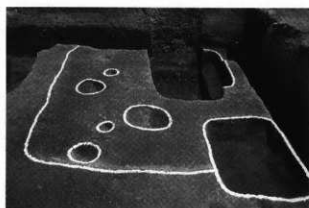
Ⅲ区第2遺構面（発掘調査時の第2遺構面、南から）



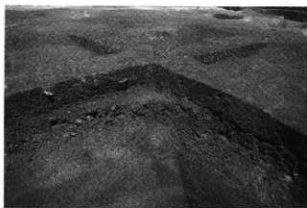
SH01 (南から)



SH01 (東から)



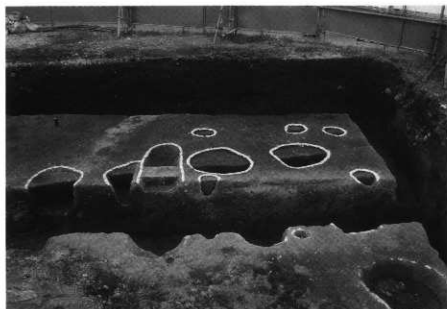
SH01 (西から)



SH01土層断面 (南東から)



SH01-K1土層断面 (南から)



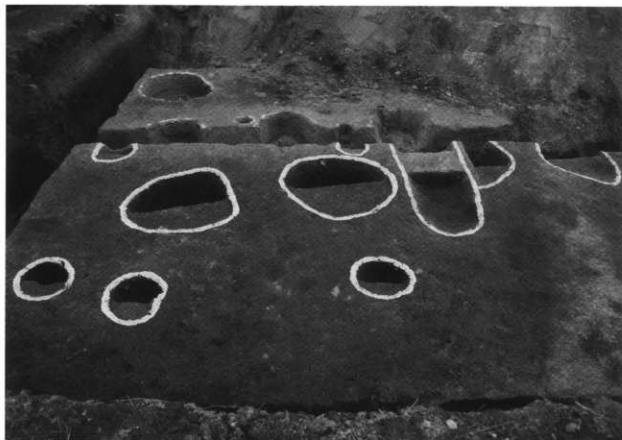
S B01北半部（南から）



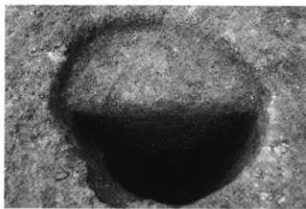
S B01南半部（南東から）



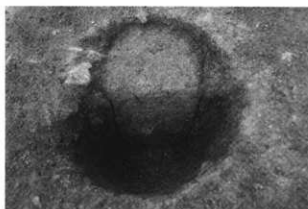
S B01-SP13土層断面
（北から）



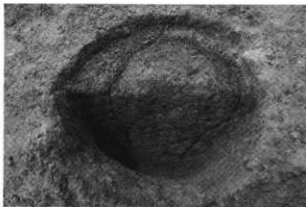
S B02 (北から)



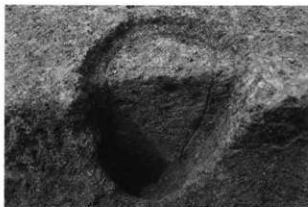
S B02 - S P79土層断面 (南から)



S B02 - S P80土層断面 (南から)



S B02 - S P84土層断面 (南から)



S B02 - S P85土層断面 (南から)



SP24土層断面 (南から)



SP70土層断面 (北から)



SK01上半部土層断面 (東から)



SK01下半部土層断面 (東から)



SK08土層断面 (北から)



SD02土層断面 (西から)



SD03土層断面 (南から)



SD04土層断面 (南から)



SD01底部礫検出状況（北から）



SD01完掘状況（北東から）



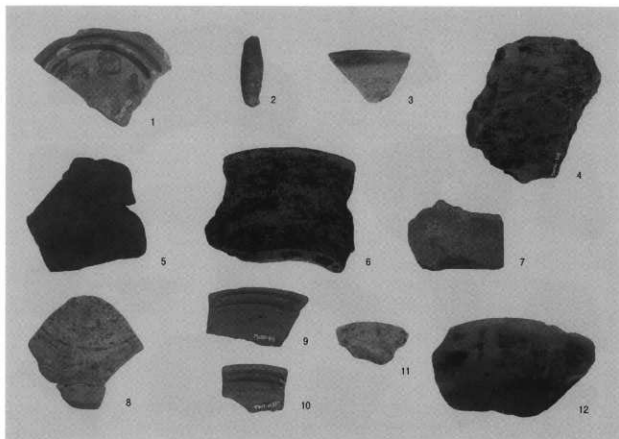
S D05北部断ち割り土層断面
(南から)



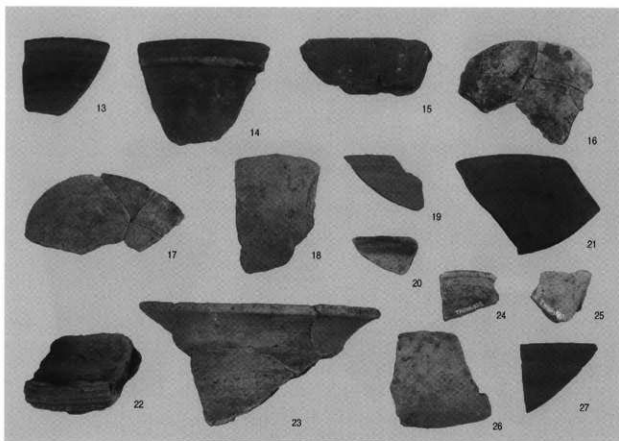
S D05南部断ち割り土層断面
(南東から)



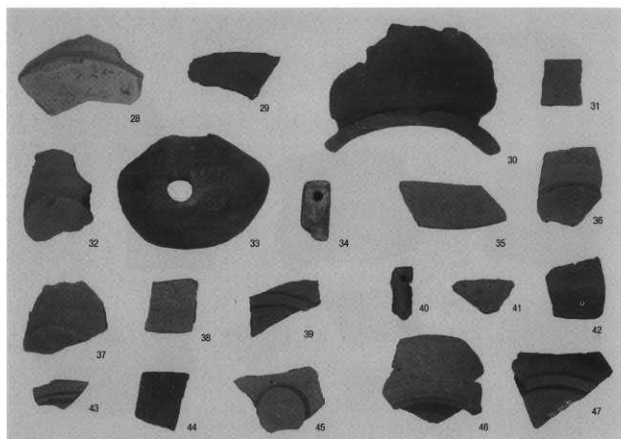
地震痕跡 (砂脈)土層断面
(北東から)



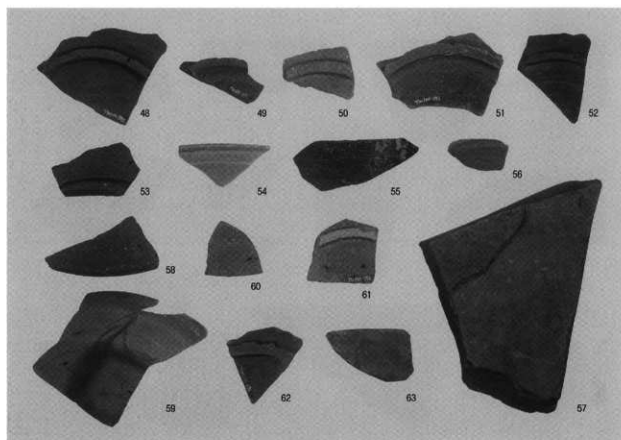
遺物包含層・竪穴住居跡・掘立柱建物出土遺物



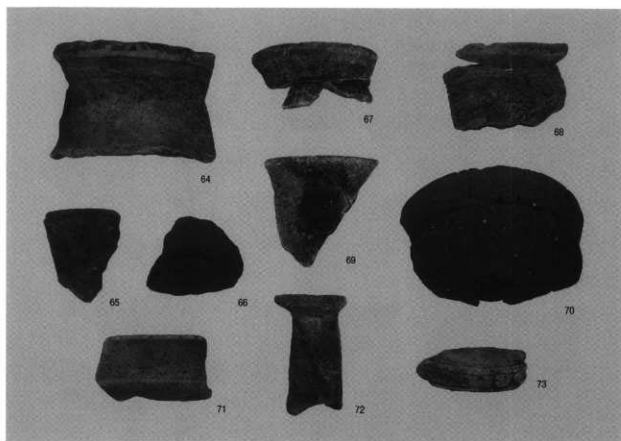
ピット・土坑・溝出土遺物



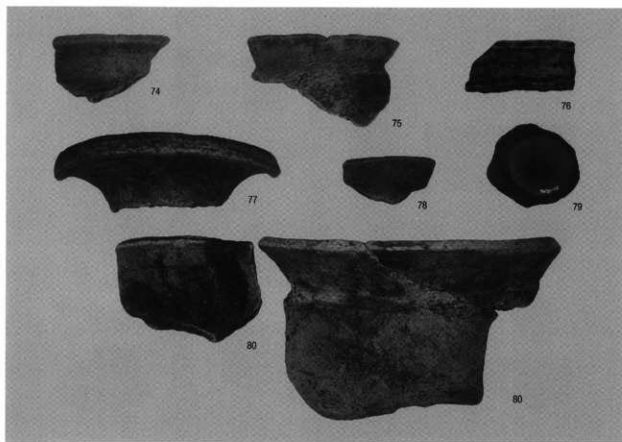
SD01出土遺物 (1)



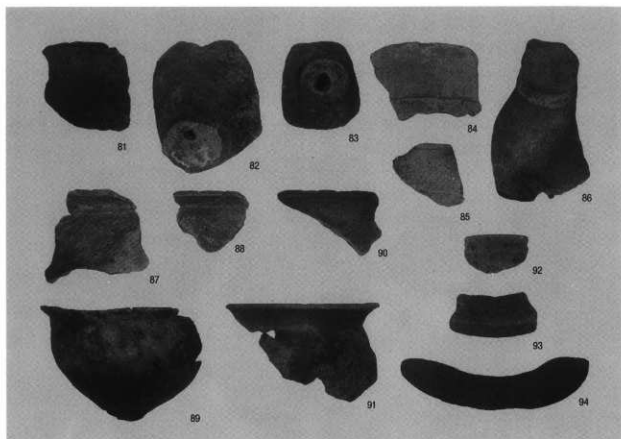
SD01出土遺物 (2)



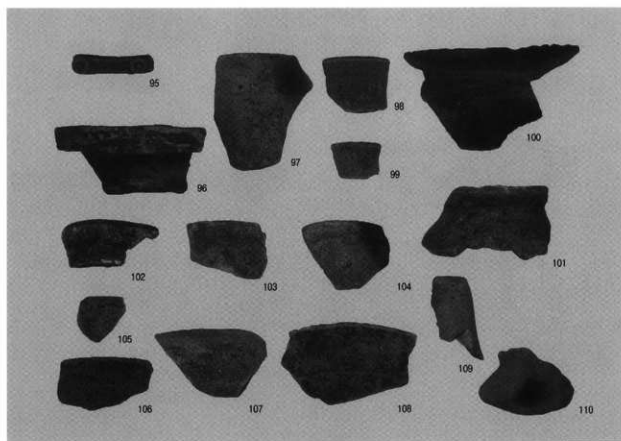
SD05出土遺物 (1)



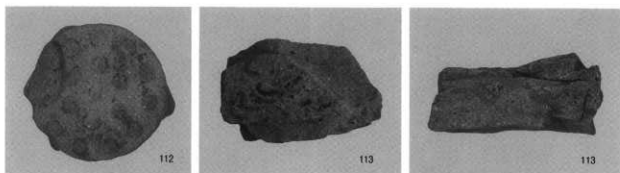
SD05出土遺物 (2)



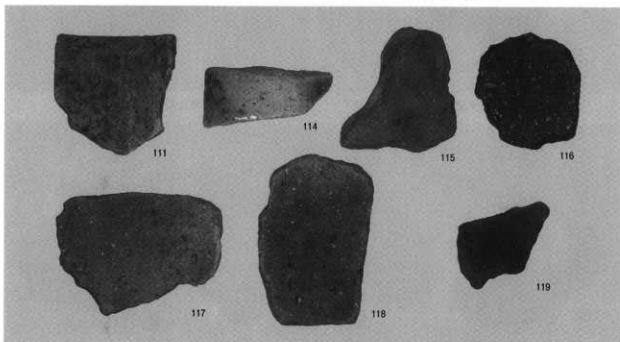
SD05出土遺物 (3)



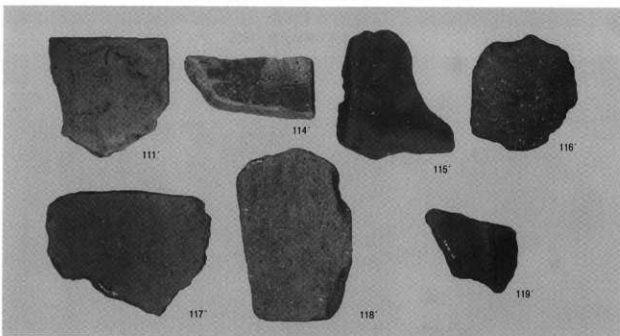
SD05出土遺物 (4)



S D01埋土第4層出土軒丸瓦および軒平瓦とその瓦当部製作手法



S D01埋土第2層もしくは第3層および第4層出土瓦（凹面）



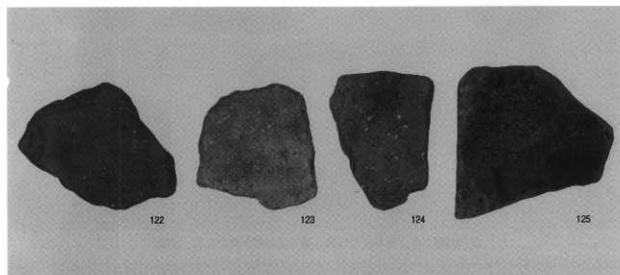
S D01埋土第2層もしくは第3層および第4層出土瓦（凸面）



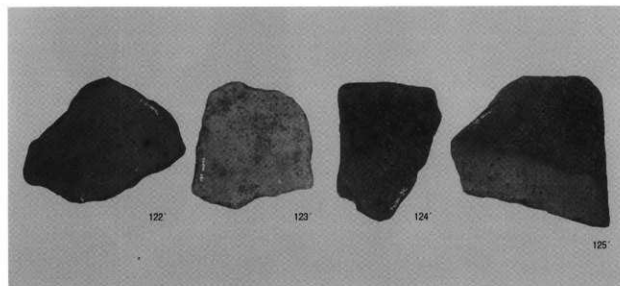
SD01Ⅳ層（下部）出土軒丸瓦



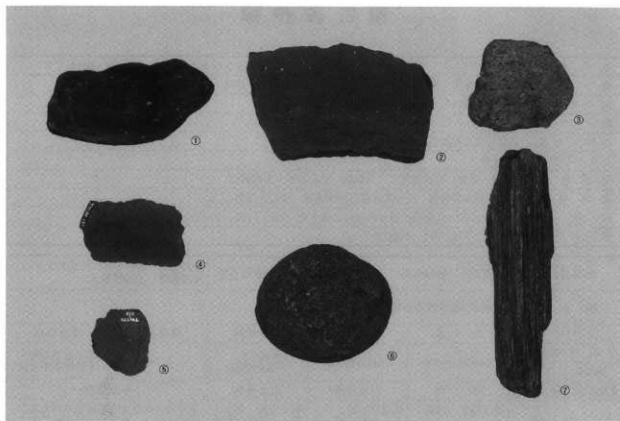
SD01埋土第6層出土軒丸瓦



SD01埋土第6層出土瓦（凹面）

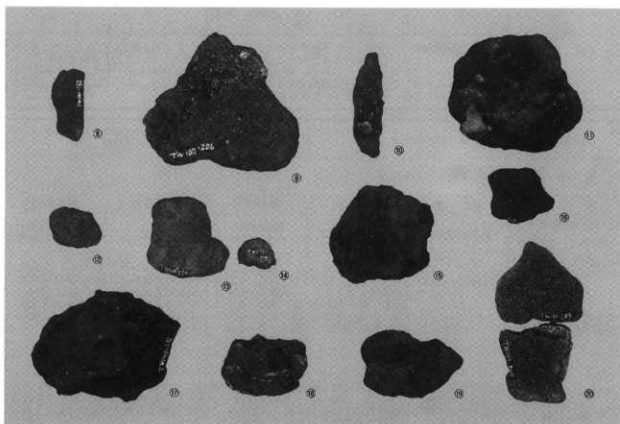


SD01埋土第6層出土瓦（凸面）



SD01出土特殊土器・製塩土器・石器・サヌカイト剥片・石製品

①埋土第4層 ②Ⅱ層 ③Ⅳ層（下部） ④Ⅳ層（上部） ⑤埋土第1層 ⑥埋土第5層 ⑦Ⅲ層



SD01出土鉄製品・鉄滓・被熱石材

⑧・⑨Ⅱ層 ⑩・⑪・⑫Ⅲ層 ⑬Ⅳ層（上部） ⑭・⑮Ⅳ層（下部） ⑯～⑰溝底黑色粘土

報告書抄録

ふりがな	ひょうごけんあしやし つきわかいせきはつくつちょうさほうこくしょ だい98・100ちてん
書名	兵庫県芦屋市 月若遺跡発掘調査報告書 第98・100地点
副書名	都市計画道路山手幹線街路事業に伴う発掘調査区
巻次	
シリーズ名	芦屋市文化財調査報告
シリーズ番号	第86集
編著者名	(編集・執筆) 竹村忠洋 (執筆) 平山裕之・西岡崇代
編集機関	芦屋市教育委員会 社会教育部生涯学習課 (文化財担当)
所在地	〒659-8501 兵庫県芦屋市精道町7番6号 TEL. 0797-38-2115
発行年月日	2010年(平成22年)10月31日

所収遺跡名		月若遺跡（第98地点）		発掘調査担当者		森岡秀人・竹村忠洋・平山裕之・坂田典彦・白谷朋世					
所在地		兵庫県芦屋市白戸原町34番2、34番6、34番7									
コード		北 緯		東 経		調査期間		調査面積		調査原因	
市町村調査番号		34度44分14秒		135度17分15秒		20090721 ～20090926		220㎡		都市計画道路山手幹線街路事業	
28206 TW98											
所収遺跡名		種 別		時 代		主な遺構		主な遺物		特記事項	
月若遺跡 (第98地点)		集落跡 官衙跡 生産遺跡		縄文時代～近世		堅穴住居跡・ピット・土坑・溝・流路・竈・埴輪・地震痕跡（砂眼）		縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・黒色土器・瓦器・瓦質土器・陶器・磁器・土師・瓦・ササカイト剥片・石製品・鉄製品		単弁八弁蓮華文高句麗様式軒瓦の破片が出土。柱穴から7世紀代の古代瓦の破片が数多く出土。	
要 約		弥生時代後期後半から近世にわたる遺構面が4面検出された。ピット1基（SP18）と土坑2基（SK04・06）では7世紀代のものと考えられる古代瓦片が多数出土した。また、遺物では単弁八弁蓮華文高句麗様式軒瓦が認められる。本地点周辺でも7世紀代の軒瓦・軒瓦を含む瓦片が多く出土しており、近在する白鳳寺院である戸原寺跡に先行するか、もしくは同時期に創建された古代寺院や官衙の関連施設等が存在した可能性が高い。									

所収遺跡名	月若遺跡（第100地点）		発掘調査担当者		森岡秀人・竹村忠洋・平山裕之・坂田典彦・白谷朋世	
所在地	兵庫県芦屋市月若町71番2					
コード	北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因	
市 町 村	調査番号	34度44分14秒	135度17分36秒	20090511 ～20090721	204㎡	都市計画道路山手幹線街路事業
28206	TW100					
所収遺跡名	種 別	時 代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
月若遺跡 (第100地点)	集落跡 官衙跡 生産遺跡	弥生時代～近代	堅穴住居跡・掘立柱建物・ピット・土坑・溝・落ち込み・暗渠・埴輪・地震痕跡(砂眼)・防空壕跡	弥生土器・土師器・須恵器・黒色土器・瓦器・瓦質土器・陶器・磁器・埴輪土器・土師・瓦・石器・ササカイト剥片・石製品・鉄製品・鉄滓	古代の大溝から、単弁八弁蓮華文高句麗様式軒瓦、法隆寺式の複弁八弁蓮華文軒瓦・均正忍冬唐草文軒平瓦を含む7世紀代の古代瓦の破片や鉄滓等が数多く出土。	
要 約		弥生時代後期後半以降の遺構面が2面検出された。その中で、7世紀代に開削されたと考えられる大溝であるS D01からは、多数の古代瓦や鉄滓などが出土しており、当溝周辺に7世紀代の寺院や官衙の関連施設の存在を推測させる。11世紀末～12世紀初頭頃の掘立柱建物であるS B02は、本地点周辺の既往調査の遺構と合わせて、東西5間（約11m）、南北5間（約9.5m）の総柱の掘立柱建物を復元した。さらに、本調査地点の周辺では、堀や庭園遺構と推測される同時期の遺構が確認されている。				

